

令和6年度  
地域課題研究ゼミナール支援事業  
成果報告集

編集発行：  公益社団法人  
大学コンソーシアム石川  
〒920-0962 金沢市広坂2丁目1番1号  
(石川県政記念いのき迎賓館3階)  
Tel : 076-223-1633 Fax : 076-223-1644  
E-mail : kadai@ucon-i.jp  
URL <https://www.ucon-i.jp>  
発行年月：2025年2月

本成果報告集は石川県による委託事業として、公益社団法人大学コンソーシアム石川が  
実施した令和6年度地域課題研究ゼミナール支援事業の取り組みを取りまとめたものです

## 目 次

### 地域共創支援枠

ICTを活用したコミュニティバス等の情報発信	・・・・・・・・	1
金沢工業大学	教授	向井 宏明 (BUS STOP PROJECT)
お薬から見る健康づくり	・・・・・・・・	7
高齢者医療費抑制に向けた医薬品適正使用の推進		
金沢大学	教授	菅 幸生
	助教	石田奈津子
金沢への外国人観光客に白山手取川ジオパークへ	・・・・・・・・	13
足を延ばしてもらうための具体的な計画立案		
北陸学院大学	教授	富岡 和久
	助教	木村ゆかり (白山ジオ)
「加賀立国1200年」を契機とした地域の歴史PRと学びの場創出	・・・・・・・・	19
金沢学院大学	准教授	戸根比呂子
既存の地域の医療体制では解決しきれないヘルスケア課題解決	・・・・・・・・	25
金沢大学	教授	米田 隆
	准教授	米谷 充弘
女性活躍の推進に関する実践	・・・・・・・・	31
金城大学	助教	齊藤 実祥
	准教授	平子 紘平
金沢大学	特任教授	寒河江雅彦
観光資源としての手取キャニオンロード自転車道とその可能性の再発見	・・・・・・・・	37
金城大学短期大学部	教授	矢澤 建明

## 地域課題発掘枠

念仏踊り（地域のお宝）の保存と継承	・ ・ ・ ・ ・	43
北陸大学	講師	伊藤 梢
	教授	福江 充
家庭で始めるエシカル消費の推進	・ ・ ・ ・ ・	49
北陸大学	教授	志田 義寧

## 復興課題枠

被災高齢者等の健康管理				.....	55
	石川県立看護大学	教授	垣花 渉		
		講師	佐能 唯		
キリコ祭り（秋祭り）の文化の継続・継承				.....	61
	石川県立大学	准教授	長野 峻介		
	金沢大学	博士研究員	小林 秀輝		
こども食堂の認知と充足率の向上				.....	67
	金沢学院大学	教授	広根 礼子		
どぶろくの魅力発信プロジェクト				.....	73
	北陸先端科学技術大学院大学	教授	島田 淳一		
	金沢工業大学	准教授	村山 祐子		
能登半島地震におけるこども支援及び中高生の居場所作りにおける調査と検証				.....	79
	北陸大学	教授	田尻慎太郎		
七尾市の人口減少と能登地域の衰退				.....	85
	金沢大学	教授	松島 大輔		
奥能登観光資源の創造的復興のモデルケースづくり				.....	91
	石川工業高等専門学校	准教授	豊島 祐樹		
		教授	村田 一也		
	金沢工業大学	准教授	片桐由希子		
知恵と科学に基づいた避難所施設の安全性・利便性向上の検討				.....	97
	石川県立看護大学	准教授	松田 幸久		
過疎高齢化と震災による地域の人口減少と地域住民の活力の低下				.....	103
	金沢星稜大学	准教授	神崎 淳子		
石川県における地域防災力の向上				.....	109
	金沢大学	講師	原田 魁成		



# 地域共創支援枠



## I C Tを活用したコミュニティバス等の情報発信

指導教員 金沢工業大学 教授 向井宏明

参加学生 大学院 坂内遼太郎

4年	中屋飛人	勝木隆也	古越航太	角田想	市村凌久
	李 健	吾妻慶伍			
3年	村田優一	山本航輝	橋本佳明	土永蓮晟	山下正義
	宮前友樹人	吉田賢次郎	能登健心	渡邊佳史	横井空
	山根昌大	長谷川優也	中山慶也	遠山宗一郎	田中優
2年	佐藤駿平	角飛希	竹内謙真	八巻顕伍	大曾根萌華

活動にご協力くださいました野々市市建設部都市整備課および  
ののいちバス株式会社の皆さんに感謝申し上げます



### 活動概要

野々市市のコミュニティバス「のっティ」は、地域住民にとって欠かせない交通手段であるが、天候や災害、交通状況による運行への影響が課題となっている。そこで、ICT技術を活用し、運行情報をリアルタイムに提供する仕組みを整えることで、利用者の利便性向上を目指している。

### Web版「のっティバスどこ」改良内容



#### 【マップ表示の改善】

Google Mapライブラリを @vis.gl/react-google-maps に置き換え、効率的かつ安定したマップ表示を実現。

#### 【UIの向上】

バス停アイコンのデザイン変更とルート切り替え処理の改善で、使いやすさを向上。

図1 Web版「のっティバスどこ」のトップ画面

### 耐環境性能向上への取り組み

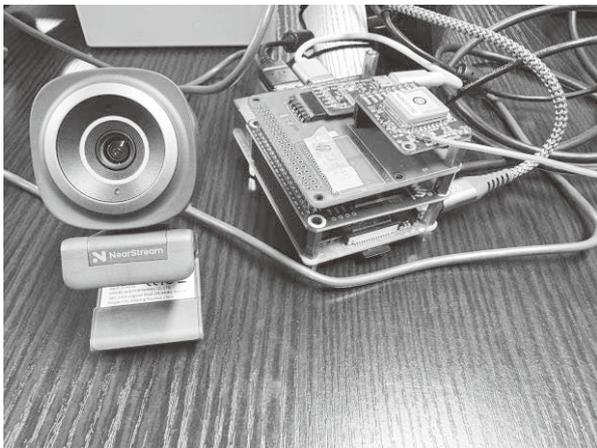


図2 車載器の画像

#### 【ケースの改良】

直射日光対策として色付きケースを採用し、側面に通気用の穴を追加。

#### 【CPUの冷却強化】

ファンを取り付け、CPU平均温度を57.3°Cから43.3°Cに低下。

#### 【モバイルルーター問題の解決】

膨張対策としてUSB SIMドングルに置き換え。

#### 【シリアル変換器の固定化】

接着剤で固定し、再認識の困難さを解消。

### 活動の成果と今後の計画

#### 【活動の成果】

本システムは安定運用を実現し、利用者数は月ごとに増加。12月には月間2000人以上の利用を達成し、システムの有用性と需要を確認した。

#### 【今後の計画】

- ・「のっティバスどこ」のiOS版リリースで利便性向上。
- ・代車切り替えシステムのアプリ実装と機能アップデートで柔軟性を強化。



Web版



アプリ版

## 1. 活動の要約

本活動では、「のっティバスどこ」のWeb版アップデート、耐環境性能の向上、システムモニタリング機能の実装、代車対応システムの構築、乗降人数取得方式の改良を行った。Web版では、実証実験中であることを知らせるポップアップ機能の追加やGoogle Mapライブラリの更新、ユーザーインターフェースの改善を実施した。耐環境性能向上においては、ケースの改良やCPUの冷却対策を行い、安定性を高めた。システムモニタリング機能では、Google Playストアの新要件に対応するため、プライバシーポリシーを策定し、アプリ内で表示されるようにした。代車対応では、タブレットシステムの設計・運用準備、アプリ開発、システムコードの改良により柔軟な運用が可能になった。

さらに、乗降人数取得方式をカメラ1台で効率化し、プログラムの最適化を図った。

## 2. 活動の目的

野々市市内を走るコミュニティバス「のっティ」は、地域の住民にとって重要なインフラとなっている。しかし気象条件や交通渋滞などによる影響で正常な運行ができない場合があり、特に石川では雪や地震などの災害も多いため、特に影響が大きい。また、近年のスマートフォンの普及により、ICTを活用したリアルタイム情報発信は利用者の利便性に直結した課題となっている。以上のことから、ICT技術によって運行情報をリアルタイムに発信し、コミュニティバス「のっティ」の利便性向上を目標に活動をしている。

## 3. 活動の内容

### ① Web版「のっティバスどこ」のアップデート

Web版の「のっティバスどこ」において、いくつかの改良を実施した。まず、実証実験中であることを利用者に伝えるため、ポップアップ画面を表示する機能を追加した。さらに、Google Mapのライブラリを@vis.gl/react-google-mapsに置き換えることで、より効率的で安定したマップ表示を実現した。加えて、バス停アイコンのデザイン変更やルート切り替えの処理を改善し、ユーザーインターフェースの向上を図った。



図1 ご利用にあたる同意画面

## ② システムモニタリング機能

システムモニタリング機能に関する対応として、Google Playストアでのアプリ公開に必要な新要件であるプライバシーポリシーの策定を行った。作成したプライバシーポリシーは、アプリ内で確認できるように実装し、さらに初回起動時に自動的に表示されるよう設定した。

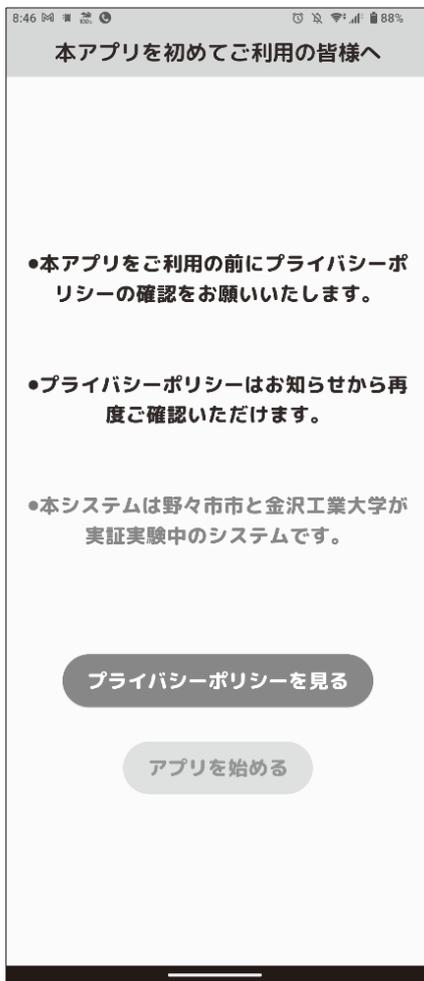


図2 モバイル版アプリのポリシー確認画面

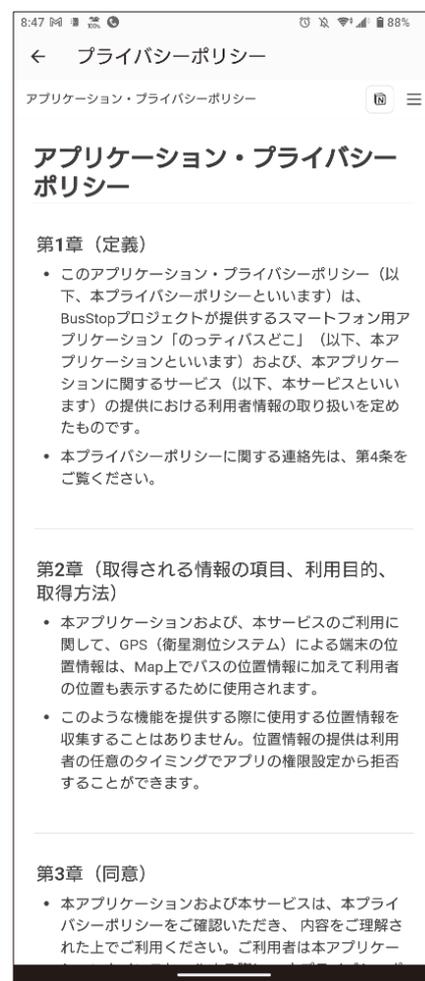


図3 プライバシーポリシーの詳細画面

## ③ 代車対応システム

従来のシステムでは車載器が各ルート対応の設定を行うことが前提条件で、代車が使用される場合にはその間はバスどこシステムにバスの位置が表示されないという問題があった。代車はメンテナンス時のみの使用であったが、市民への影響を考慮して代車使用時にもバスの位置が表示されるようシステムを改良した。システムへの改修を最小限にすることと、バス会社の運用性の両立を図るため、バス運営者がタブレットを使用して配車状態を設定することを提案し、システム運用フローを作成した。改修内容については、Firebase 及び BusLocationBus のコードに代車2台分の処理を追加することで、動作しているコードの大半を流用し、システム更新のリスクを最小限とした。また、バス運営者が利用する代車対応システムのワイヤーフレームも作成した。

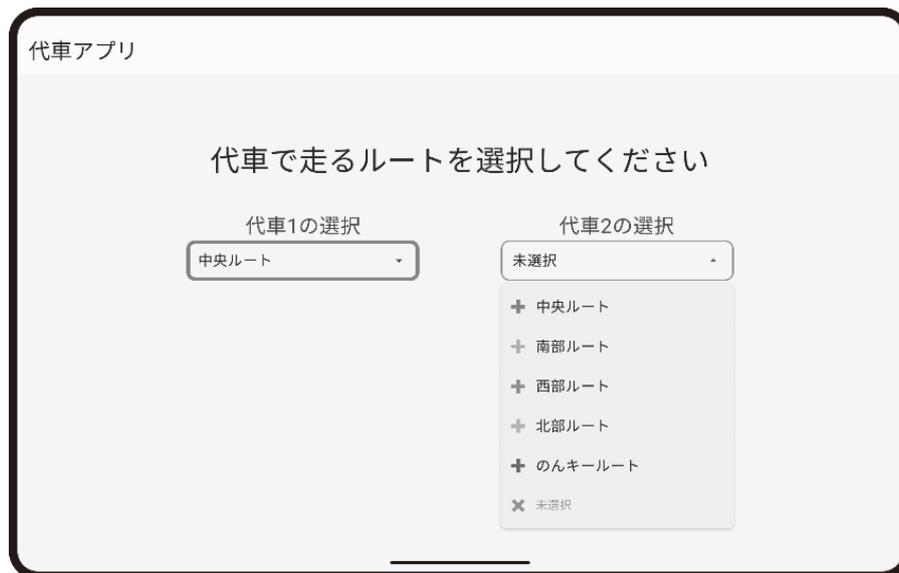


図4 バス運営者が利用する代車の切り替えシステム

#### ④ 耐環境性能の向上

耐環境性能向上を目的に、いくつかの取り組みを行った。まず、直射日光による影響を軽減するため、透明なケースから色付きケースに変更した。また、ケースの側面に通気性を確保するための穴を開けた。さらにラズベリーパイにファンを取り付けたことで、CPUの平均温度をファンなしの57.3℃から43.3℃まで下げることができた。モバイルルーターの膨張問題については、USB SIM ドングルに置き換えることで解決した。また、シリアル変換器が外れることで再認識が困難になる問題については、接着剤で固定することで対処した。

#### ⑤ 乗降人数取得方式の改良

乗降人数の取得方式についても改良を行った。以前はバス内にカメラを2台設置して人数を取得していたが、現在ではカメラ1台でYoLov8を活用する方式に変更した。この変更により、プログラムの無駄を省き、効率的でシンプルな設計に改良することができた。

### 4. 活動の成果

本システムは安定した運用を実現しており、継続的に利用者にサービスを提供できている。また、利用者数が月ごとに増加しており、12月時点では1か月で2000人以上の利用を達成した。これにより、システムの有用性と需要の高まりを確認することができた。

### 5. 今後の活動計画

今後の活動として、「のっティバスどこ」のiOS版リリースを予定している。これにより、より多くのユーザーにサービスを提供し、利便性の向上を図る。また、代車切り替えシステムのアプリ実装と、それに合わせて「のっティバスどこ」の機能をアップデートする。これらの取り組みにより、システム全体の柔軟性と使いやすさをさらに向上させることを目指す。

## 6. 活動に対する地域からの評価

野々市市建設部都市整備課の方から「利用しやすいよう、改良いただいたことで、バス乗客の多くに利用されており、バス利用者には欠かせないシステムとなっています。」と頂きました。





# お薬から見る健康づくり



## — 高齢者医療費抑制に向けた医薬品適正使用の推進 —

### 「おくすり」問題

- ◆ 高齢者の増加に伴い、重複投薬や他剤投薬などの問題が顕在化  
→ 副作用リスクの増加など深刻な不利益をもたらす
- ◆ 国の施策として医薬品の適正使用や医療費抑制が求められている

医薬品の適正使用を推進することで、地域住民の健康をサポートし、健康なまちづくりに寄与することを目指す

今年度は活動を拡大し「おくすりサロン」を白山市でも実施！  
→ 多剤投薬や重複投薬への取り組みをより広い範囲に展開した

白山市・野々市市  
×  
金沢大学



### ② 研究活動

#### ✓ 野々市市国保データベース (KDB)

国民健康保険、後期高齢者医療、介護保険、特定健診などに関する情報を含む大規模データベース

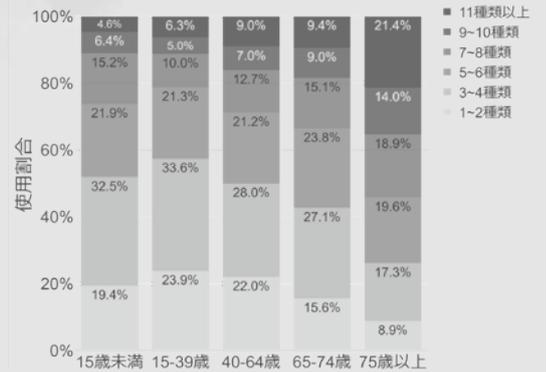
地域の健康・医療・介護・福祉に関する課題は多い...



KDBデータの解析により...

課題を明らかにし、具体的な解決策を提案！

#### 加齢に伴う薬剤数の変化 (2023年度)



- ◆ 加齢に伴い、服用している薬剤数が増加  
→ 多剤投薬の現状が明らかになった

◆ 今後はリスク要因や改善策を明らかに！

### ① 地域活動

- ✓ 野々市市内 8カ所・白山市内 2カ所においておくすりサロンを実施  
地域高齢者など延べ 149名 (12月末現在) が参加！



学生によるおくすり×クイズで楽しく学べる環境を！

学生と高齢者の交流の場！



多剤投薬のリスクなどについての講話も実施



- ✓ 「おくすりサロン」などで活用するキャラクターの作成
  - ・ 地域住民に医薬品の適正使用など健康意識を高めてもらう
  - ・ 金城大学短期大学部美術学科の学生提案のキャラクター案から投票により採択



提案されたキャラクター案について協議の様子



キャラクターシルエット

次年度以降の活動で活躍する予定なので、お楽しみに！

### 今後の目標

- ① おくすりサロンの継続開催 (野々市市・白山市)  
地域住民の医薬品適正使用に関する意識向上
- ② KDBデータを活用した研究の発展
  - ・ 解析結果をおくすりサロンにフィードバック
  - ・ 地域の保健事業や行政政策に活用  
→ 持続可能な健康づくりの体制を構築する



### 金沢大学医薬保健研究域薬学系 臨床薬学研究室

担当教員：菅 幸生，石田 奈津子

担当学生：竹中 リナ，柴田 祥士弘，高垣 皓一，藤森 麻弥，山内 彩椰，

浦山 睦，瀬山 春佳，瀧本 悠晴，宮浦 菜奈，

井波 楓怜，岸野 結衣，前田 音羽，吉原 和花南



## 1. 活動の要約

本活動は、医薬品の適正使用を推進し、高齢者医療費の抑制や地域住民の健康意識向上を目指して実施されたものである。野々市市および白山市の地域サロンにおいて、高齢者を対象とした「おくすりサロン」を開催した。本サロンでは、教員による多剤投薬や重複投薬のリスクに関する講話や、お薬手帳の活用方法を中心とした個別相談を実施した。また、ゼミ学生が参加者と交流しながら「おくすり〇×クイズ」を行い、楽しく学べる場を提供した。これにより、地域住民にとっては健康について学ぶ機会を、学生にとっては地域の健康問題を考える実践の場を提供することができた。さらに、啓発活動の一環としてキャラクターを作成中であり、次年度以降の活動での活用を予定している。

一方で、野々市市との共同研究として、国保データベース（KDB）を活用した研究を開始した。年齢や性別、地区ごとの医薬品使用状況を分析し、多剤投薬や重複投薬の具体的なリスク要因を明らかにすることで、データに基づいた地域施策の提案を目指している。この研究成果を「おくすりサロン」などの地域活動に反映し、住民への情報提供をさらに充実させることで、より効果的な啓発と実践的な介入を実現する。

これらの取り組みを通じて、地域住民の健康意識向上と生活の質の改善を図り、持続可能な健康づくりの基盤を築くことを目標としている。

## 2. 活動の目的

近年、医療サービスの多様化や複数の医療的介入を必要とする高齢者の増加に伴い、重複投薬や多剤投薬などの薬物療法に関連する問題が顕在化している。特に高齢者では、医療費の増大に加え、多剤投薬や重複投薬が副作用リスクの増加や服薬アドヒアランスの低下など、深刻な不利益をもたらすため、地域行政にとっても重要な課題となっている。2020年4月から本邦で実施されている「高齢者の保健事業と介護予防の一体的実施事業」においても、これらの課題は対処すべき重要なテーマとされているが、石川県では十分な取り組みが進んでいないのが現状である。

このような背景を踏まえ、当ゼミでは2022年度から野々市市と協働で「くすりと健康プロジェクト」を展開している。本活動では、薬剤師の経験を有する教員と学生が中心となり、「おくすりサロン」の開催など地域住民と連携した活動や、KDB データを活用した研究を通じて、野々市市における医薬品の適正使用を推進し、住民の健康支援と健康なまちづくりへの貢献を目指している。今年度はさらに活動を拡大し、「おくすりサロン」を白山市でも実施することで、多剤投薬や重複投薬の改善・解消に向けた取り組みをより広い範囲に展開することを目的とした。

## 3. 活動の内容

### <地域活動>

2024年度は、引き続き野々市市内の地域サロンにて「おくすりサロン」を開催した。本サロンでは、教員が多剤投薬や重複投薬のリスク、お薬手帳の役割、医薬品適正使用における薬局や薬剤師の活用方法について講話を行い、個別相談も実施した。また、ゼミ学生による「おくすり〇×クイズ」を通じて、楽しく学べる場を提供した。さらに、野々市市が包括連携協定を締結している企業の協力を得て、骨強度測定も行った。今年度は新たに白山市の地域サロンでも「おくすりサロン」を開催し、活動範囲を拡大した。

また、地域住民の医薬品適正使用に対する意識をさらに高めるため、次年度以降の「おくすりサロン」などで活用するキャラクターを金城大学短期大学部美術学科の学生に依頼し、作成を進めた。



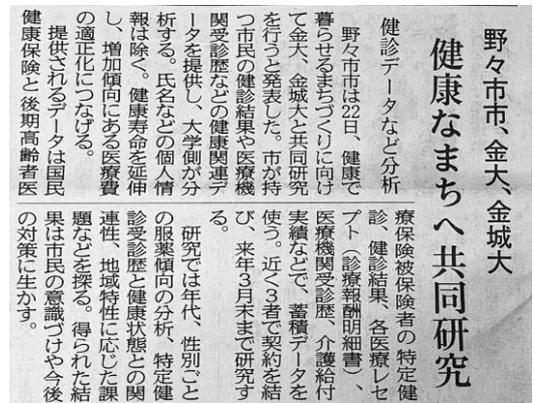
おくすりサロンの様子

<研究活動>

2024年10月に野々市市と共同研究契約を締結し、KDBデータの解析を開始した。

国保データベース（KDB）システムは、国民健康保険・後期高齢者医療、介護保険、特定健診などに関する情報を含む大規模データベースで、市町村が効率的かつ効果的な保健事業を実施するための支援を目的としている。当ゼミでは、地域の健康・医療・介護・福祉に関する課題を明らかにし、具体的な解決策を提案することを目的に研究を進めてきた。

本研究では、多剤投薬や重複投薬の実態を把握し、そのリスク要因や改善策を明らかにすることを目指している。また、データ解析結果を基に、医薬品の適正使用を促進するための保健事業の提案を検討している。



2024年10月23日(水) 北國新聞朝刊

4. 活動の成果

1) おくすりサロンの実施

野々市市内8カ所と白山市内2カ所、合計11カ所（予定含む）でおくすりサロンを開催し、12月末現在で地域高齢者など延べ149名が参加した。本年度のおくすりサロンには10名のゼミ学生が参加し、「おくすり〇×クイズ」の進行、会場設営、参加者対応などを担当した。

2024年度に開催したおくすりサロン

日時	開催市	場所	参加者人数
2024年4月19日	野々市市	押野公民館	33名
7月23日	野々市市	押越コミュニティセンター	15名
9月4日	野々市市	郷公民館	
10月3日	野々市市	二日市町会館	
10月16日	野々市市	あすなろ団地内集会場	
11月27日	野々市市	あやめ会館	
12月2日	野々市市	柳町集会所	
12月23日	白山市	米永町研修センター	14名
2025年1月30日	白山市	美川和波町東地区公民館	—
2月4日	野々市市	野々市市女性センター	—

## 2) おくすりサロンキャラクターの作成

地域住民に医薬品の適正使用など健康意識を高めてもらうため、本活動用のキャラクターを作成した。金城大学短期大学部美術学科の学生が提案したキャラクター案の中から、当ゼミ教員・学生、連携ゼミ教員、野々市市職員の投票によりキャラクターを決定した。このキャラクターは今後一部修正を行った後、次年度以降の活動で使用する予定である。

## 3) KDB を活用した研究の実施

2024年11月よりKDBデータの本格的な解析を開始した。まずは年代ごとの使用薬剤数を集計したところ、年齢の上昇に伴い薬剤数も増加し、後期高齢者の約半数が7剤以上を使用していることが明らかになった(図1)。この結果から、後期高齢者を中心に「おくすりサロン」の実施などを通じて医薬品の適正使用を推進することの重要性が示唆された。

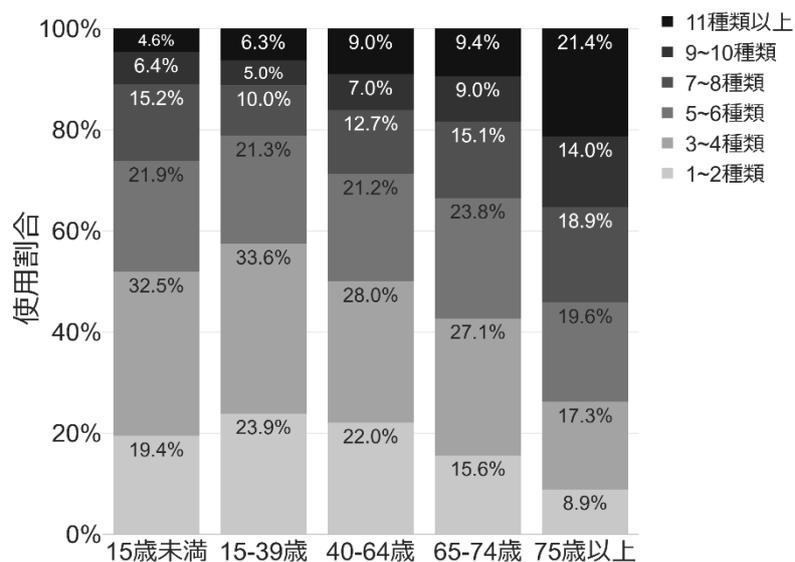


図1 野々市市における年齢別使用薬剤数(2023年度)

また、2025年3月13日に第1回KDB分析報告会を野々市市役所で開催し、解析結果の報告と今後の展望に関する意見交換を行う予定である。

## 5. 今後の活動計画

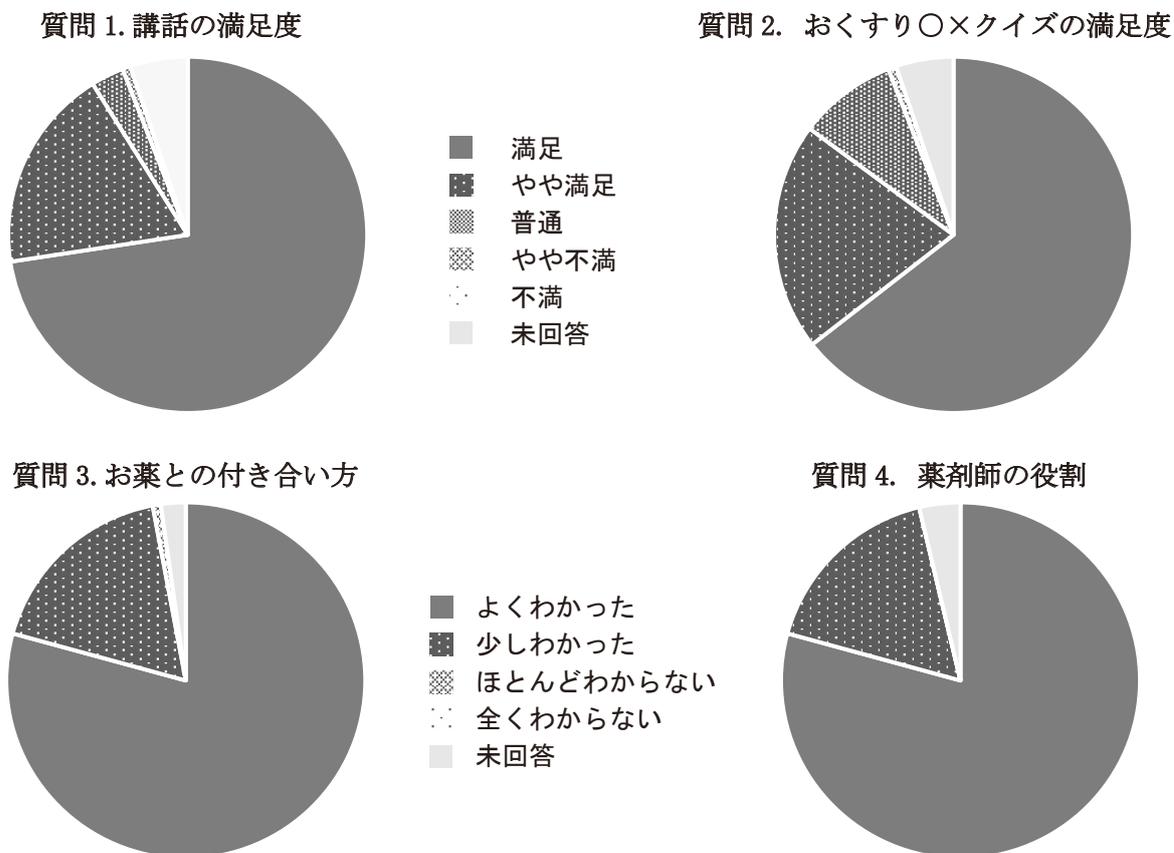
2025年度以降、「おくすりサロン」を野々市市および白山市内で継続的に開催し、多剤投薬や重複投薬のリスクに関する啓発活動を地域全体に広げる。また、地域住民の医薬品適正使用への意識向上を図るため、今年度採択されたキャラクターを活用し、パンフレットやポスター、デジタルコンテンツ等を制作し、活動を強化する。

野々市市では、KDBデータを活用した研究を継続し、年齢や性別、地区ごとの医薬品使用状況を明らかにする。この情報を「おくすりサロン」の内容に反映させることで、より効果的な住民啓発を実現する。また、多剤投薬や重複投薬の具体的なリスク要因を解明し、データに基づく地域施策や介入方法の開発を進める。さらに、今後は後期高齢者医療広域連合などとも連携を図りつつ、研究成果を地域の保健事業や行政政策に活用し、高齢者の健康維持と医療費抑制に貢献する。

これらの取り組みを通じて、地域住民の健康意識向上と生活の質の改善を図り、持続可能な健康づくりの体制を構築することを目標とする。

## 6. 活動に対する地域からの評価

2024年度おくすりサロンに参加した野々市市民にアンケートを実施し、下記回答を得た。



また、本活動について野々市市および野々市市地域包括ケアセンターの方から以下の声を頂いた。

- 地域の高齢者にクイズを通して、薬の服用タイミングや処方せんの期間など広く様々な知識を楽しく教えてもらうことができました。また持参したお薬手帳を見せて、相談している方もおり、自分の身体について理解を深める機会となりました。
- 服薬情報をはじめ健康に関するデータを分析していただくことで、住民の健康寿命の延伸や、医療費の適正化に寄与していただけることと期待しております。すでに、過去から現在にかけての服薬量の減少など、わかりやすい比較データが得られてきているとのことで、分析結果の地域住民へのフィードバックなども模索していきたいところです。

## 金沢への外国人観光客に白山手取川ジオパークへ足を延ばしてもらうための 具体的な計画立案

指導教員 北陸学院大学 教授 富岡和久  
 助教 木村ゆかり  
 英語教育研究支援センター ブリジット・ホージー  
 英語教育研究支援センター イアン・ローレンス

参加学生	4年	西優莉	水嶋千景	星野絢子	政田ふうか	平八起
		浅井純奈	大石喜己	大澤翔生	萬澤楓	川口陸斗
		葛谷康介				
	3年	角井千那	市谷美桜			
	2年	佐藤公一朗	宮村一咲花	米澤葵	今川華世	若泉統子
		加藤将晃				
	1年	村田さつき	矢谷佳須美			

白山ジオサークルの活動にご指導・ご協力くださいました、白山手取川ジオパーク推進協議会  
 スーザン・メイ様、村井壮志様、前琴美様に心より感謝いたします。



北陸学院大学  
 白山ジオ Hakusan Geo  
 インスタグラム

# 金沢への外国人観光客に白山手取川ジオパークへ足を伸ばしてもらうための具体的な計画立案

北陸学院大学 白山ジオサークル

## □活動概要

北陸学院大学の「白山ジオ」は2023年4月に設立された学生サークルで、「英語」「観光」「地域活性化」「自然」「こども」「異文化」に関心がある1～4年生21名で構成されている。2023年度は地域課題研究ゼミナール支援事業「地域課題発掘枠」に採択され、金沢への外国人観光客に白山手取川ジオパークへ足を伸ばしてもらうための調査に取り組んだ。2024年度は、前年度の調査で明らかになったことを踏まえて具体的な誘致計画の立案を行った。



@HAKUSAN\_GEO\_MISSION

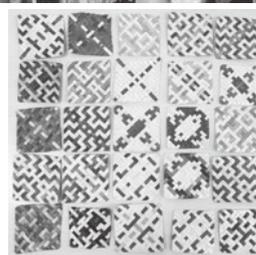
## □今年度の活動

- ①SNS（インスタグラム）によるジオパークの魅力発信・旅行サイトでの英語による投稿
- ②認知度調査
- ③Enjoy!白山ジオ 世界ジオパーク認定1周年記念イベント



## ④石川県指定伝統工芸「檜（ひのき）細工」のブランディング

- ⑤自然体験モニターツアー企画サポート
- ⑥ジオパーク特産品の販売
- ⑦ジオパークでの各種イベントでのボランティア
- ⑧環白山広域観光推進協議会が運営する観光サイト「ぐるっと白山」で地元ライター
- ⑨白山市教育委員会主催「感性のびのびジオ・サタデー」のサポート
- ⑩その他（ラジオ番組出演、「白山手取川ジオパーク公認観光ガイド養成講座」参加）



## □今後の目標及び活動

・国内外のジオパークで活動している大学との交流

☆来年度に継続

・認知度調査 ・SNS活動 ・ジオパーク特産品の販売

## 1. 活動の要約

北陸学院大学の「白山ジオ」は2023年4月に設立された学生サークルで、「英語」「観光」「地域活性化」「自然」「こども」「異文化」に関心がある、子ども教育学科、幼児教育学科、初等中等教育学科、栄養学科、社会学科の1～4年生21名で構成されている。2023年度は地域課題研究ゼミナール支援事業「地域課題発掘枠」に採択され、金沢への外国人観光客に白山手取川ジオパークへ足を延ばしてもらうための調査に取り組んだ。2024年度は、前年度の調査で明らかになったことを踏まえて具体的な誘致計画の立案を行った。

連携する地域団体は、白山手取川ジオパーク推進協議会である。初めに、同推進協議会から現状のヒアリングを行い、年間を通して活動計画や進捗状況などを定期的に報告し、必要に応じて助言をいただきながら活動に取り組んだ。また、2023年度の活動で協力団体だった、白山市観光連盟、いしかわ自然学校、ANA ホリデイ・イン金沢スカイにも継続してご支援をいただいた。

主な活動としては、2023年度に引き続き(1) SNSでのジオパークの魅力発信と英文旅行サイトでの投稿、周辺エリアからのアクセスの提案、(2) 認知度調査、(3) 世界ジオパーク認定記念イベントの実施、(4) 檜細工のブランディング、(5) 自然体験モニターツアーの企画サポートを行った。さらに、(6) 学内でのジオパーク特産品の販売、(7) ジオパーク内の地域団体が主催する各種イベントでのボランティア、(8) 観光サイト「ぐるっと白山」で地元ライターとして記事の取材および執筆、(9) 「感性のびのびジオ・サタデー」のサポート、(10) その他のPR活動に取り組んだ。

## 2. 活動の目的

白山手取川ジオパークは2023年5月24日、国内で10番目にユネスコ世界ジオパークに認定された。2024年3月の北陸新幹線延伸により、北陸への外国人観光客も増加している。しかながら、自然豊かなジオパークでは、公共交通機関の利便性が低く、観光客の誘致においてわかりやすい移動方法の周知が課題となっている。そこでJR金沢駅から10分程の松任駅への電車での移動、小松駅や小松空港からレンタカー・タクシーを利用した鳥越への移動、福井県勝山市からカーシェアで30分の白峰への移動など、多様な交通手段を用いたアクセス方法の紹介を行なう。

また、地域の要望に従い、同ジオパークのPR活動への貢献を目指すとともに、地域経済の活性化促進のため、学生メンバーが地域を訪れ、地域の方から白山手取川ユネスコ世界ジオパークの魅力を教えていただき、学生が自分たちの言葉でそれぞれの切り口からジオストーリーを語ることにより、対外的に多様な情報発信を行なうことを目指す。

教育効果として、ジオパークという保護・教育・持続可能な開発が一体となった地理的領域で、自然と人間とのかかわりについての理解を深めることで、持続可能な未来について思い描き行動することができるようになる。

## 3. 活動の内容

主な活動内容は下表のとおりである。

	活動内容（実施日・学生の参加人数）
(1)	SNS 発信のためのジオパーク取材：下野園地、レストラン手取川（4/14・5名）、おかえり祭り（美川地域）（5/18・5名）、西山高山植物園（6/15・2名）、ろあん・越原・クゥーイ（6/21・4名）アクセス3ルート（小松、福井、岐阜）調査（8/7-8・12名）
(2)	認知度調査：しいのき迎賓館（6/9・11名＋高校生7名）、小松空港台湾人観光客対象（11/17・5名）、Geo English 認知度調査英会話の練習（4/26・6名、6/21・4名）
(3)	「Enjoy! 白山ジオ 世界ジオパーク認定1周年記念イベント」：会場しいのき迎賓館下見（5/29・4名）、

	イベント当日 (6/9・11名)、羽咋市役所訪問 (7/5・4名)
(4)	檜細工ブランディング:材料調達 (7/31・3名)、横町うらら館で講習 (7/16・4名)、スーザン氏講習 (7/17・7名)、ANA ホリデイ・イン金沢スカイ打ち合わせ (1/17・2名)、吉田酒造店 絵本配布 (1/18-19・6名)
(5)	自然体験モニターツアー:打ち合わせ (1/17・2名)、イベント当日 (2/17、26・各3名予定)
(6)	ジオパーク特産品の販売:ジオスイーツ販売 (6/13・5名)、大学祭向け調査 (7/13・3名)、大学祭での販売 (10/25-26・16名)
(7)	<地域団体主催のジオパークでの各種イベント>吉野谷まつり実行委員会主催「吉野谷 月と宴まつり」:打ち合わせ (8/22・1名)、テスト (9/2・2名)、会場清掃 (9/16・1名)、当日ボランティア&ジオツアー&ジオ謎解き (9/21・11名)、白山吉野地域復興協議会主催「工芸の里フェスタ」ボランティア (11/3・6名)、白山吉野谷観光協会主催「五感で楽しむ 吉野工芸の里 J A Z Z ナイト」ボランティア (11/23・8名)
(8)	環白山広域観光推進協議会運営の観光サイト「ぐるっと白山」地元ライター取材:白山ワイナリー (10/13・2名)、浅野太鼓 (11/15・1名)、たまごのゆめ・瀬波カフェ (11/16・4名) 牛首紬 (11/28・1名)
(9)	白山市教育委員会主催「感性のびのびジオ・サタデー」サポート:白峰 (5/25・1名)、鶴来 (6/22・2名)、美川 (10/19・4名)、鳥越 (11/19・2名)、吉野谷 (1/25・2名予定)、白峰 (2/8・2名予定)
(10)	その他:越原甘清堂ガラス窓「夏のジオパーク」イラスト描き (6/2・3名)、ラジオ出演 (7/26・3名)

(1) SNS (インスタグラム) でのジオパークの魅力発信と旅行サイトでの英語による投稿

松任や美川などの平野部の魅力発掘および発信、周辺エリアからのアクセスの提案として、岐阜ルート(白山白川郷ホワイトロード)、小松ルート(小松天満宮、小松駅&小松空港、サイエンスヒルズ小松)、勝山ルート(越前大仏、平泉寺白山神社、勝山駅&えち鉄カフェ、Hutte café and restaurant、カーシェア)を設定した。

(2) 認知度調査

2024年度は2回の認知度調査を実施した。1回目の6月9日は、しいのき迎賓館で20名の外国人の回答を、2回目の11月17日は小松空港の国際線出発ロビーで台湾人観光客16名の回答を得た。また、4月から、認知度調査に必要な英会話を練習するためのGeo Englishという勉強会を開催した。ネイティブ教員の支援のもと、教育学部の学生がレッスン内容を考案した。白山手取川ユネスコ世界ジオパークのみどころを英語で説明できるようになった。



第1回認知度調査



第2回認知度調査



Geo Englishの様子



Geo English教材

(3) Enjoy! 白山ジオ 世界ジオパーク認定1周年記念イベント

6月9日に白山手取川ユネスコ世界ジオパークの特産品9種類と「きりまんじゃろコーヒー」を販売した。

イベント前後に新聞記事で取り上げられ(5/25 北陸中日:「魅力発信 広い視点で」、6/11 北陸:「白山ジオの魅力伝え 世界認定1周年を記念」、6/11 中日:「世界認定1年 認知度は」)、各種ウェブサイトでも情報発信ができた(いしかわスタイル(10万人登録)、Odekake navi、Kanazawa (+北陸) English Speakers(5,800人登録)、白山市LINE(23,347人登録)。また、「一里野高原ホ

テルろあん」のジビエ丼のキッチンカー出店など、地域の事業者にもご協力いただいた。

(4) 石川県指定伝統工芸「檜（ひのき）細工」のブランディング

学生が檜細工の作り方や歴史について学び、2025年1月に、ANA ホリデイ・イン金沢スカイのご協力を得て、ラウンジでのコースター展示や檜細工の歴史について説明するミニ絵本の配布を予定している。また、白山の水と関わりが深い地酒メーカーの吉田酒造店では、酒類購入者にコースターとミニ絵本を配布するPRイベントを実施した。絵本は日本語・英語で書かれており、檜細工が盛んだった旧尾口村深瀬出身である本学職員の近岡尚美氏、檜細工作家の香月久代氏、スーザン・メイ氏に監修いただいた。原稿の作成および挿絵はすべて学生による。



檜細工の練習



スーザン氏による檜細工の講習



檜細工のコースターと絵本



2025/1/10 北國新聞

(5) 自然体験モニターツアー企画サポート

2025年2月に冬のジオパークを満喫する「カンジキ」ハイキングモニターツアーが開催されることになった（主催：白山市観光連盟、協力：白山手取川ジオパーク推進協議会、ANA ホリデイ・イン金沢スカイ、北陸学院大学）。これまでの自然体験での学びをもとに、学生3名がモニターツアーのサポートスタッフとして参加する予定。

(6) ジオパーク特産品の販売

6月には昼休みに学内で、10月には大学祭でジオパーク特産品を販売した。白山ジオサークルのInstagramも紹介し、フォローしてくれた方には「堅豆腐ショコラ」をプレゼントした。

(7) ジオパークでの各種イベントでのボランティア

9月から11月にかけて、吉野工芸の里でライトアップなどの各種イベントが行われた（主催：吉野谷まつり実行委員会、白山吉野地域復興協議会、白山吉野谷観光協会）。地域の要望に応えるかたちで学生がボランティアスタッフを担当した。ジオガイドの研修を受けている学生がミニジオツアーを実施し、ジオパークについて学ぶことができる「謎解き」を制作および提供した。



ジオガイドツアー



ジオ謎解き



ジオ謎解きに参加した子供たち



イベントボランティア

(8) 環白山広域観光推進協議会が運営する観光サイト「ぐるっと白山」で地元ライター

これまでのInstagramでの取材および投稿の経験を活かして、白山周辺の見どころを紹介する地元ライターとして、白山ワイナリー（福井県大野市）、カフェ、伝統工芸（石川県白山市）の記事の取材および執筆を担当した。

(9) 白山市教育委員会主催「感性のびのびジオ・サタデー」のサポート

「感性のびのびジオ・サタデー」に小学生の参加者の見守り役として、子ども教育学科と初等中等教育学科の学生4名が参加した。子ども向けのジオパークの楽しみ方について学んだ。

(10)その他

ジオパーク特産品の販売でご協力くださった越原甘清堂（鶴来町）のショップ窓にジオパーク関連のイラストを描いた（6/3 北國：「学生が魅力発信 和菓子店に初夏の風物」）。また、エフエム石川のラジオ番組「Student Jam R」に学生3名が出演し、サークル活動について紹介した。さらに、石川県の大学ガイドブック「イシカレ 2024」、日本ジオパークネットワークの機関誌「GEOPARK magazine」Vol. 12 で白山ジオが紹介されることになった。学生1名が2024年6月～11月全13回の「白山手取川ジオパーク公認観光ガイド養成講座」に参加した。



2025/6/3 北國新聞



ラジオ番組出演



イシカレ 2024

4. 活動の成果

今年度は、部員 21 名全員がそれぞれの得意もしくは興味のある分野で活動に携わることができたおかげで、サークルとしての地域貢献力が少しずつ高まったように感じられる。まず、白山手取川ユネスコ世界ジオパークへの海外誘客という課題について、アクセスの紹介など具体的な提案を含んだ英語での情報発信と、これまで調査ができていなかった台湾人観光客を対象とした認知度調査ができた。さらに、地域団体の白山手取川ジオパーク推進協議会と連携し、地域の団体や事業者の要望に応えながら、イベントでのボランティアを通して地域住民の方との交流を深め、微力ながらも金沢市内のホテル ANA ホリデイ・イン金沢スカイと白山市をつなぐ役割を果たせた。こうした実践の場を与えていただけたのは、地域の方の温かいご理解とご協力のおかげであり、部員および顧問一同、心から感謝している。

5. 今後の活動計画

SNS による英語での情報発信、認知度調査、檜細工のブランディングなど、地域の要望をヒアリングしながら来年度も継続したい。また、PR 活動における成功事例など学ぶために、県外のジオパークで活動している大学や海外のジオパークと連携している大学等との交流も検討したい。

6. 活動に対する地域からの評価

白山手取川ジオパーク推進協議会専門員のスーザン・メイ氏からは、「今年は白山ジオの活動が広がり、さらに進化したように見られます。最初には様々な会議を通して、ジオパークのニーズや課題を把握した上で、自分たちのやりたい活動と上手くマッチングして進めたため、目標を意識した活動に繋がり、もっと総合的なジオパーク活動になったと思います。また、様々な機関と協力して、自分たちの強みとそれぞれの機関の強みを重ねることで、サークルだけで、機関だけでできる活動を越えた活動が多くでき、地域に大きく貢献したと思います。学生にとっては、今年はコミュニティ、英語、自然、子供教育、観光等、多くの分野を楽しく学ぶ年だったでしょう。」との評価をいただいた。

「加賀立国 1200 年」を契機とした地域の歴史PRと学びの場創出

指導教員	金沢学院大学 准教授 戸根比呂子					
参加学生	4 年	青木宥佳 鳥越真由 横井里奈	草間智輝 中谷幸奈	塩井悠仁 又多隆介	田村望咲 宮村杏菜	土肥駿亮 山谷一水
	3 年	大澤耕史 小林光成 豊島伊織 法土莉子	織田惟吹 小林大晃 中川剛志 松田亜斗夢	上條智也 高柴ひかる 中島美優 大江寧音	神村勇翔 滝澤広大 中野芽楓	小倉謙 竹松孝真 東山颯真
	1 年	大野理桜	白江瑞希	山崎美鳴		

活動にご参加、ご協力くださいました、

「南加賀遺跡魅力発信委員会」

のみなさまに感謝申し上げます。

# 「加賀立国1200年」を契機とした地域の歴史PRと学びの場創出

(金沢学院大学戸根ゼミ 連携団体：小松市)



## 活動目的

小松市では古代加賀立国1200年となる2023年を機に、能美市とともに、関連する歴史文化の普及啓発を進めてきた。地域住民も、「加賀立国1200年遺跡魅力発信委員会」を結成し、地域の歴史をPRするための活動を行ってきた。

そこで金沢学院大学の考古ゼミも活動に参加することで、地域の歴史をより積極的に発信していくことになった。特に、加賀立国の前時代にあたる古墳時代に注目し、小松・能美に広がる一大古墳群を、古代のにぎわいの場を育んだ遺跡と捉え、古墳群を中心に活動を行うこととした。2024年度は、加賀立国1200年を一過性のイベントに終わらせないよう、今後の展開も見据えて事業を実施した。

## 活動①

### 南加賀こふんカード集めの実施



第1図 完成した古墳カード

#### 【活動内容】

昨年度の古墳群活用案を踏まえ、より効果的と判断した「古墳カードin南加賀」(今回「南加賀こふんカード集め」に改称)の実現に向けて企画・編集を行った。グループごとに作成した企画案に、小松・能美両市からの要望を加え、今年度は4古墳でスタートした。

#### 【成果】

10月20日より「南加賀こふんカード集め」のイベントを開始した。前週に学園

祭でチラシ配布・パネル展示によるイベントの周知を行い、初日には能美ふるさとミュージアムの古墳関連イベント会場にて学生自身が配布を行い、一定の集客を得ることができた。

今後古墳の種類を増やし、同じ古墳でもレアカードなどのバリエーションを増やすことで再来訪を期待できる。また、カード集めを楽しみながら古墳に対する学習効果も期待できる。



第2図 完成したチラシ

## まとめ

- ・SNSや学園祭での情報発信・現地説明会の開催・新聞報道により、「加賀立国1200年」以後も地域住民らが古墳群へ足を運ぶ機会を設けることができた。
- ・発掘調査の実施・報告書の刊行により、今後の活用・学術的検討に耐える成果を提供することができた。
- ・考古学を専攻する学生と地域住民の協働による、遺跡でのフィールドワークが実現し、調査成果が地域に還元され、役立ったことを実感する得難い機会となった。

【参加学生】計32名 青木有佳・草間智輝・塩井悠仁・田村望咲・土肥駿亮・鳥越真由・中谷幸奈・又多隆介・宮村杏菜・山谷一水・横井里奈(以上4年生)、大澤耕史・織田惟吹・上條智也・神村勇翔・小倉謙・小林光成・小林大晃・高柴ひかる・滝澤広大・竹松孝真・豊島伊織・中川剛志・中島美優・中野芽楓・東山颯真・法土莉子・松田亜斗夢・大江寧音(以上3年生)、大野理桜・白江瑞希・山崎美鳴(以上1年生)

## 活動②

### 河田山9号墳の発掘調査

#### 【活動内容】

2024年の調査は6日間行った。今回の調査では、9号墳の東辺の周溝を確認するための発掘を行い、古墳の規模を把握した。

また、昨年度、調査が不十分であった箇所(箇所)の測量調査も行い、25cm間隔で標高45.000～47.450mの等高線を引き、測量を行い図化した。

#### 【成果】

発掘調査の結果、東辺の周溝と思われる溝を確認した。昨年度の西辺周溝も併せて考えると、墳丘規模は一辺が約13mと推定できた。



第3図 発掘調査の様子



第4図 土層断面を図化している様子



第5図 現地説明会の様子

しかし、斜面の途中に周溝があることは不自然であり、さらに東で古墳の裾が見えてくる可能性もあり、この場合、一回り大きい古墳となる。

また、新たに石材が2箇所露出していることを確認した。12号墳と33号墳の石室と同じ凝灰岩という石材であることから、横穴式石室に用いた石材の可能性が一層高まった。

なお、調査には地元住民による遺跡魅力発信委員会のメンバーも参加し、学生と住民の協働による調査となった。

## 来年度の計画

- ・古墳群活用策の「南加賀こふんカード」集めについて、配布状況・改善点の検証、新たな古墳でのカード作成、収集枚数に応じた景品の検討などを行う。
- ・発掘調査の継続、現地説明会での公開、報告書の刊行、活用案の提案を継続的に行う。

## 1. 活動の要約

本事業では小松市・能美市に所在する古墳を題材に、地域の歴史PRのための活動を行った。昨年度提案していた両市内古墳群の活用策のうち「南加賀こぶんカード集め」について、企画の整理とカード案の作成を進め、10月より試行することができた。また、小松市指定史跡である河田山9号墳の発掘調査を実施し、加賀国府の地盤となった河田山古墳群の基礎データを作成した。成果は現地説明会で報告したほか、ゼミのX（旧Twitter）等を通じて情報発信した。

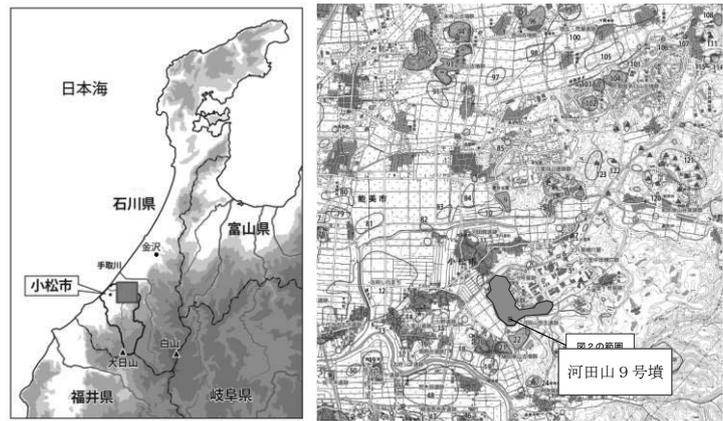


図1 主な活動場所

## 2. 活動の目的

小松市では加賀立国1200年となる2023年を機に、能美市とともに、関連する歴史文化の普及啓発を進めてきた。そして地域住民からも協力を得て、「加賀立国1200年遺跡魅力発信委員会」（その後「南加賀遺跡魅力発信委員会」に改称）を結成し、地域の歴史をPRするための活動を行ってきた。そこに、金沢学院大学の考古学ゼミも活動に参加することで、地域の歴史をより積極的に発信していくこととなった。特に加賀立国の前時代にあたる古墳時代に注目し、小松・能美に広がる一大古墳群を、古代のにぎわいの場を育んだ遺跡と捉え、古墳群を中心とした活動を行うこととした。

2024年度は、加賀立国1200年を一過性のイベントに終わらせたくないよう、今後の展開も見据えての事業実施を念頭に置いた。

## 3. 活動の内容

今年度は、古墳群活用策として「南加賀こぶんカード集め」の企画・編集、古墳活用の基礎データ作成のための河田山9号墳の調査の継続、現地説明会等による古墳群の周知、の3点に取り組んだ。

### ①「南加賀こぶんカード集め」の企画・編集（5～9月）

昨年度の活用策提案を踏まえ、より効果的であると判断した「古墳カード集め in 南加賀」（企画化の過程で「南加賀こぶんカード集め」に変更）の実現に向けた企画・編集を行った。

5～7月にはグループごとに企画案の整理、対象古墳の選定、カード案の作成等を進めていき、小松市・能美市職員同席のもと、発表会を行った（7/11）。

企画案の段階では、古墳をイメージしたキャラクターの創設や手書き風のカードとする案、カードをランダムに配布する案、古墳の種類によって「得点」や「ランク」をつける案、カードと併せてスタンプも集める案なども挙げられた。最初にカード配布を実施する古墳については、小松市河田山古墳群の特色の1つである「切石積横穴式石室」を見学することができる河田山12号墳と、県内最大級の前方後円墳である能美市秋常山1号墳が相応しいと、ほぼ全てのグループで意見が一致した。

これらの企画案は、両市職員よりいただいた講評を踏まえ、8～9月の企画編集会議でブラッシュアップしていった。両市からの要望もあり、小松市矢田野エジリ古墳、能美市和田山1号墳も追加した4古墳で今年度はスタートすることとした。将来的にはカード集めの特典としての景品配布なども想定し、スタンプも押印するという制度とし、10月より、チラシ及びカードの配布を開始している。

なお、アンケートでは「埴輪でライトアップ」が1位だったが、

- ・実際に埴輪を作成・焼成したが、予想以上に作成に時間がかかった（大学生でも4～10時間程）。

- ・設置を検討していた河田山古墳群で埴輪が出土していない。
  - ・小松市内で埴輪が出土した古墳（矢田野エジリ古墳）は、墳丘が残っていない。
  - ・イベント当日のみの集客となり、一過性となる可能性が高い。
- といった事情から、今回は実現を断念した。

## ②河田山9号墳の平板測量調査・発掘調査の実施（10～11月）

昨年度の調査により、西側周溝の一部が再確認できたこと、墳丘の測量調査が完了したことから、今年度は東側周溝の調査による墳丘規模の確認を目的とした。発掘調査は考古学の学びを活かしたフィールドワークとして、学生と小松市職員のほか、南加賀遺跡魅力発信委員会のメンバーも加わり、学生と住民の協働による調査が実現した（10/26、11/4・9・10・23・24）。

調査にあたっては、小松市より、地域住民・関連部局（文化振興課・緑化公園課）との連絡調整、休憩や道具置場の提供（加賀国府ものがたり館、手洗いあり）、関連遺跡報告書・測量データの提供等を得た。

## ③活動を通じた古墳群の周知（随時）

活動状況は、ゼミの SNS（X：旧 Twitter）や本学学園祭、現地説明会という形で情報発信をしたほか、随時、新聞報道等で取り上げてもらい、古墳群の周知へとつなげた。

## 4. 活動の成果

### <活動結果のまとめ>

- ・SNS や学園祭での情報発信、現地説明会の開催、新聞報道等により、各方面からの周知活動を進めることで、「加賀立国 1200 年」以後も、古墳群の活用イベントをとおして地域住民らが古墳群へ足を運ぶ機会を設けることができた。
- ・河田山9号墳の発掘調査の実施、調査成果報告書の刊行により、今後の活用や学術的検討に耐える成果を提供できた。
- ・考古学を専攻する学生と地域住民の協働による、遺跡でのフィールドワークが実現し、調査成果が地域に還元され、役立ったことを実感する得難い機会となった。

### <事業の成果>

## ①「南加賀こふんカード集め」の実施（10月20日～）

カード集めイベントの第1弾を開始することができた。前週には学園祭にてチラシ配布・パネル展示によりイベントを周知し、初日（10/20）は能美ふるさとミュージアムでの古墳関連イベントの会場でブースを設けて学生自身がカードを配布した。来場者からは、「古墳の中が見られて貴重な体験ができた」「久しぶりに古墳に足を運ぶ機会になった」といった反応も聞くことができた。

翌日以降は、小松市埋蔵文化財センター、小松市加賀国府ものがたり館、能美ふるさとミュージアムの各施設においてカード配



図2 古墳カード集めの企画・カード案発表会



図3 古墳カード集め企画編集会議



図4 古墳カードの配布



図5 河田山9号墳発掘調査



図6 河田山9号墳現地説明会



図7 「南加賀こぶんカード集め」のちらし

布を行っていただいている。

今年度は試行期間として、比較的に見学しやすく、市内でも著名な古墳4カ所を選定したが、今後、古墳の種類を増やし、同じ古墳でもレアカードなどのバリエーションを増やすことで、再来訪が期待できる。また、カード集めを楽しみながら、古墳に対する学習効果も期待できる。

### ②河田山9号墳の発掘調査

発掘調査により、東側周溝の一部とみられる落ち込みを確認した。これまでの地形測量調査から推定していたとおり、1辺約13mの方墳であることを再確認した。ただし今回の調査では断定することができず、もう一回り大きな墳丘規模(15m前後)である可能性も残されたため、来年度以降、北東隅等での調査を継続する必要がある。また調査中に行った墳丘の清掃により、昨年度に加えてさらに、横穴式石室の一部と見られる石材を確認した。

調査成果は、下記③のとおり現地説明会を実施したほか、現在、調査成果の報告書を作成中である。

### ③活動を通した古墳群の周知

現地説明会当日(11/23)はあいにくの天候であったが、加賀国府ものがたり館内で解説後、雨の止み間に現地を見学いただくことができた。参加者は約30名であった。現地では、見学者より学生へ直接質問をする場面などもあり、見学者からは、「奈良や大阪だけでなく身近にもこれほど素晴らしい古墳があることに気付くことができた」、学生からは、「自分たちがやってきたことに対して興味を持ってもらえることの素晴らしさに気付いた」といった感想が挙げられた。

これらの取り組み状況については、新聞でも取り上げてもらい(計1回)、地域の活動として周知することができた。昨年度より始めたX(旧Twitter)でも、当初は10件程度のアクセスであったが、最近の情報発信に関しては毎回300件近いアクセスがあり、相応の周知に役立てることができている。

#### <貢献事項>

- ・これまでの計画を元に「南加賀こぶんカード集め」のイベントを実行に写し、地域住民が実際に古墳を訪れることで、古墳を活用するという機会を作ることができた。
- ・河田山9号墳の発掘調査により、今後の活用策の検討に耐える、学術的な調査データを提供した。
- ・現地説明会・学園祭・SNSや新聞社を通した情報発信により、古墳群や地域の取り組みを周知した。

### 5. 今後の活動計画

上記のとおり、遺跡の現地での活動は、学生の学びの場としても、地域の歴史PRの観点からも、効果的であることを確認できた。事業は4カ年計画であるため、最終年度はこれまでの成果を総括していくとともに、以後、活動が継続できるような仕組みや体制作りについても検討していきたい。

今年度は古墳群の活用策を実行に移すことができたが、その後の配布状況や改善点について、検証が必要と考えている。また、継続的に古墳群を活用していくためにも、新たな古墳でのカード作成や、カードの収集枚数に応じた景品の検討など、さらなる活用や再訪を狙った展開につなげていきたい。

また、河田山9号墳の範囲内容等確認のための発掘調査も継続していきたい。調査成果は、現地説

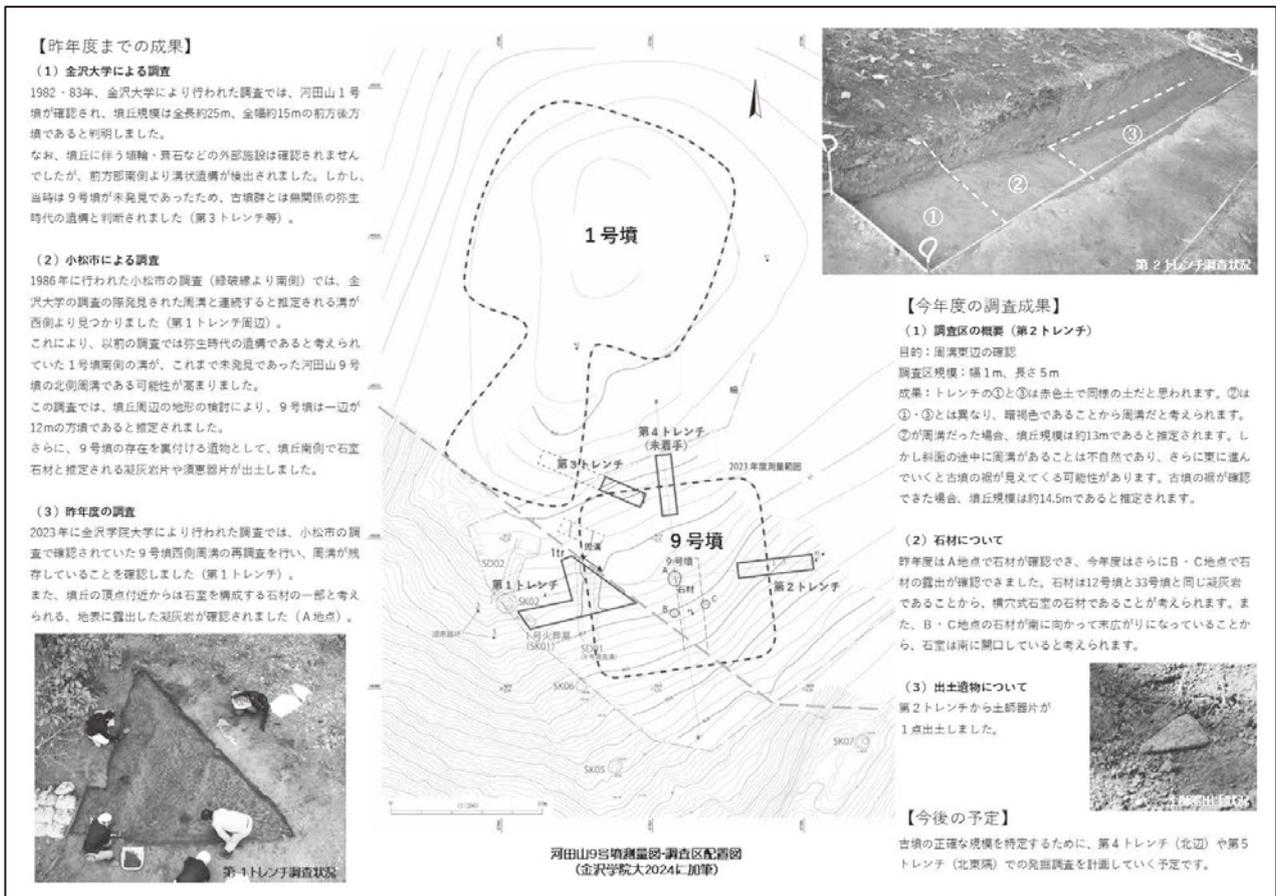


図8 現地説明会で配布した説明資料

明会での公開や、調査報告書としての刊行、これらを踏まえた活用案の提案等を通し、地域住民が古墳群を知るきっかけとなるような仕掛けづくりを継続的に行う。

## 6. 活動に対する地域からの評価

小松市担当者より、下記のとおり評価をいただいた。

昨年度に「加賀立国 1200 年」記念を迎えましたが、その機運を継続させるため、小松市、能美市、地元の歴史団体等が連携して新たに「南加賀遺跡魅力発信委員会」を結成しました。

地域課題研究ゼミナールとしての大学連携活動は3年目となり、具体的な取り組みを行えるようになってきています。地域の歴史PRでは議論を重ねて古墳カードの企画を実現してくれました。企画発表会に参加しましたが、自由でおもしろい発想ばかりで、完成度の高いカードに仕上がったと感じています。今後、対象古墳を増やしてより達成感をもたせる仕掛けや、単にカードを集めるだけではないクイズ企画やモニターツアーなどと連動させた展開が期待できそうです。

古墳調査については、学生の皆さんが主体となり、得られた成果が古墳の新たな価値づけにつながることはとても嬉しいです。今年度は、上記委員会が声かけした市民有志の遺跡なぞとき調査隊も調査に参加し、一緒に現地作業を行うことができました。調査隊の皆さんには、活動1年目の古墳測量調査でも学生と一緒に現地作業に参加してもらいましたが、実際の現地作業に携わることでより遺跡や古墳への関心度が高くなったように感じます。今回の調査参加者にも同様の傾向が見られ、今後もこの輪を広げていくことが課題だと思っています。

昨年度のアクティブフォーラムにおいて、①もう少し大きな視点でみんなが来たいと思う取り組みの実行、②SNSでの効果的な発信や3D等の最新技術の活用、③市民参加を促す機会創出などの課題があがっていましたが、今年度はその課題の一部に向き合えたと思いました。また次年度は計画最終年度となりますが、更なるステップアップを期待したいです。

既存の地域の医療体制では解決しきれないヘルスケア課題解決

指導教員	金沢大学 教授 米田隆 准教授 米谷充弘				
参加学生	4年	新村祥吾	石崎明珠		
	3年	西優香			
	2年	熊代悠生	石井りん	高藤遼征	南雲歩
		福岡美佑	藤澤菜々子	藤田捺希	森田千尋
		佐藤未彩桜			林優衣
	1年	小川さくら	奥秋瑛	志村成琉	古川耕太郎
		石川あかり	寺島侑那	福田菜々美	奥村美玖
		森下優子	松本紗綾	藤井美羽	

本プログラムに後援いただきました、金沢大学融合学域様、石川県立看護大学様に、感謝の意を表します。また、本プログラムの活動に共感し多大なサポートをいただきました、北陸の中学校・高等学校の先生方、大学の教員の皆様、医療機関の皆様に御礼申し上げます。

詳しい活動内容は、本プログラムのHPや各種SNSにてご紹介しております。随時更新していきますので、ぜひご覧ください。

↓本プログラムのHP(左)とInstagram(右)





# 既存の地域の医療体制では解決しきれない ヘルスケア課題が存在する

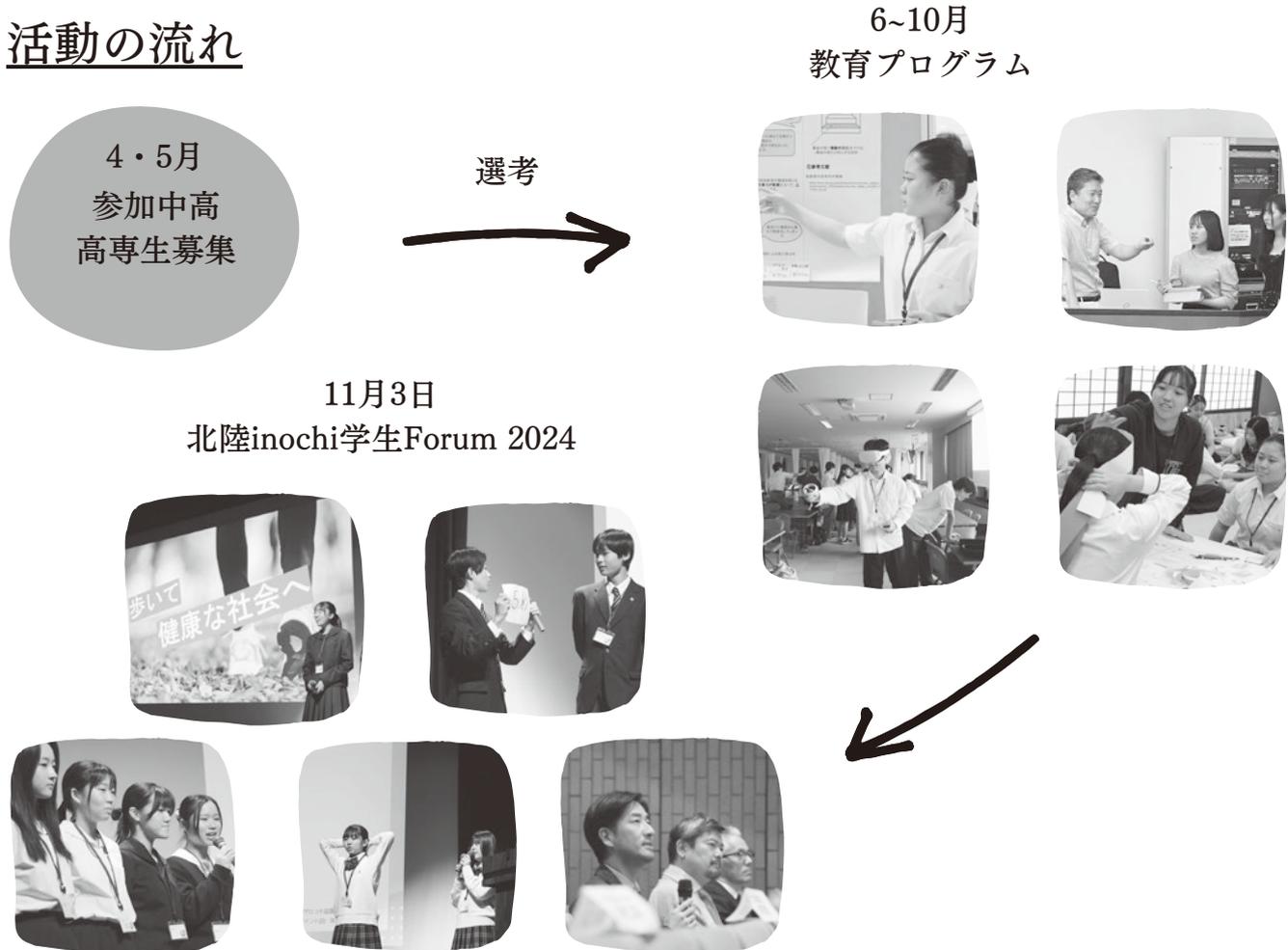


金沢大学 教授 米田 隆、准教授 米谷 充弘

## 活動概要

「ロコモティブシンドローム対策で、生涯自由な生き方を。」をテーマとし、北陸圏の中学/高校生を対象とした課題解決アイデアを創出するプログラムを運営。今年度は北陸圏の高校生32名、大学生26名で活動終了の11月まで計10回の教育プログラムを金沢大学教職員、石川県内・県外の実業家、金沢大学附属病院医師、西能病院/整形外科センター西能クリニック職員などの協力のもと実施。

## 活動の流れ



## 今後の目標

医療従事者が介入できない生活領域に専門性を持たない学生のアイデアにより介入し、救えるはずの命を取りこぼさない社会を実現していく。また、プログラムを通して、将来のヘルスケアや様々な領域を担っていくイノベーション人材を増やし、若者のちからでいのちを守る社会を創っていく。

### ロコモティブシンドローム

運動器の障害のために立ったり歩いたりするための身体能力（移動機能）が低下した状態をいう。

日本におけるロコモティブシンドロームの人口は予備軍も含めると4700万人と推定。

### inochi Gakusei Innovators' Program

中高生を対象に、ヘルスケア課題に対する課題解決プログラムを提供し、業界のトップランナーや医学生からのメンタリング、医療従事者へのヒアリングを通して、毎年異なるテーマに取り組んでいます。

## 1. 活動の要約

活動範囲を北陸 3 県に拡大し、北陸圏の中学/高等学校 14 校から 17 チーム 55 名の中高生にご応募いただき、最終的に計 10 チーム 32 名がプログラムに参加。活動終了の 11 月まで計 10 回の教育プログラムを金沢大学教職員、石川県内・県外の実業家、金沢大学附属病院医師、西能病院／整形外科センター西能クリニック職員などの協力のもと実施。11 月 4 日には北陸inochi 学生Forum2024 を石川県教育会館で開催し、約 100 名の市民の方々にご来場いただいた。仁愛女子高等学校のチームが優勝し、全国大会であるinochi WAKAZO Forum 2024 に出場。プログラム終了後も、数チームがアイデア実現のために活動を継続している。

## 2. 活動の目的

国民の健康目標を定めるものに「健康日本 21」がある。2013 年より開始した「健康日本 21（第二次）」の中での目標がロコモティブシンドロームの認知向上であったのに対し、2024 年より実施される「健康日本 21（第三次）」ではロコモティブシンドロームの減少を目指すように変化し、具体的な行動が求められるようになった。ロコモティブシンドロームは高齢者の疾患と捉えられることが多いが、「子どもロコモ」や「がんロコモ」といった切り取り方もあり、日本におけるロコモティブシンドロームの人口は予備軍も含めると 4700 万人と推定されている。高齢化という側面のみならず、将来の介護や寝たきりのリスクを軽減するためにも、早期の予防や発見への取り組み、適切なトレーニング、栄養改善の実施が必要だと考えた。こうした医療従事者が介入できない生活領域に対し専門性を持たない学生のアイデアで介入していき、救えるはずの命を取りこぼさない社会を実現していく。また、プログラムを通して、将来のヘルスケアや様々な領域を担っていくイノベーション人材を増やしていく。

## 3. 活動の内容

今年度は前述のとおり「ロコモティブシンドローム」をテーマに設定し、中高生と大学生が 5 人程度のチームを組み、テーマに関係する課題解決アイデアを創出するプログラムを運営した。

年始より運営大学生のリクルート、事前研修として課題解決アイデア創出過程の実践、整形外科医師や看護師、薬剤師、理学療法士などのロコモティブシンドロームに関わる医療従事者へのヒアリングなどを行った。また、4 月より参加中高生のリクルートを開始し、6 月より 17 チーム（55 名）の参加者とプログラムの事前体験。7 月より 10 チーム（32 名）とプログラムを本格的にスタートした。以下が実施した計 12 回の教育プログラムの概要である。

- 6/30 kick-off（場所：金沢大学宝町キャンパス）  
チームメンバーの顔合わせ、医師によるロコモティブシンドロームの基調講演
- 7/15 課題発見 DAY（場所：長土塀青少年交流センター）  
2名のロコモ専門家をお招きしてチーム別の課題決定をサポート
- 7/28 アイデア DAY（場所：長土塀青少年交流センター）  
専門家による解決策創出に関する講義と評価
- 8/4 プロトタイプ DAY（場所：金沢学生のまち市民交流館）  
実証実験で用いるプロトタイプ作成
- 8/17 アイデアお披露目会（場所：長土塀青少年交流センター）  
5名のゲストをお招きしたポスターセッション
- 9/8 中間コンペ（場所：金沢大学角間キャンパス）  
スライドを用いたプレゼンテーションによる中間発表

- 9/21 Step up DAY (場所：石川県立看護大学)  
AR、VR、医療用ロボットなどの先端医療技術の体験
- 9/22 関西北陸合同ピッチDAY (場所：京都大学)  
関西で活動する中高生との意見交換
- 10/14 プレゼン DAY・鼓舞される会 (場所：IT ビジネスプラザ武蔵)  
プレゼンテーションの専門家による「伝わるプレゼン」の実践的講義
- 11/3 北陸inochi 学生 Forum2024 (場所：石川県教育会館)  
プログラム参加チームによる最終成果発表・コンペティション
- 11/24 inochi WAKAZO Forum (場所：大阪 Nakanoshima Cross)  
4 チームが全国大会に出場 (1 チーム登壇、3 チームポスター発表)

以上の教育プログラムを通して学び、得た経験をもとに各チームがロコモティブシンドロームを解決するアイデアを創出した。創出過程においては、各中高生チームにメンターの大学生が伴走し、週1回程度のメンタリングを行った。医療従事者や当事者へのヒアリングを通して潜在的な課題・ニーズを発見し、プロトタイプを用いた実証実験も行った。北陸 inochi 学生Forum2024 で最優秀賞を収めた仁愛女子高等学校のチームは全国大会に出場し、ロコモチャレンジ！ 推進協議会委員長 大江隆史先生やStanford Biodesign Advisory Director/Japan Biodesign 池野文昭先生など日本トップレベルの専門家の方々に高評価をいただいた。また、先端医療技術体験やプレゼンテーション実習、中高生・大学生間の交流によって、課題解決にとどまらない、広い視野を持った中高生の育成を目指した。



↑ アイデア創出(左)とポスター発表の様子(右)



↑ 地域住民へのヒアリング(左)と VR 体験の様子(右)

#### 4. 活動の成果

##### (1) 地域住民の健康意識向上

北陸inochi 学生Forum には約 100 名の地域住民が来場。中高生のプレゼンテーションを通して、ロコモティブシンドロームの危険性や若いうちからの予防の大切さを多くの地域住民に周知する機会となった。

(2) 知名度の向上

応募数が昨年度の 13 チーム 34 名から 17 チーム 55 名に、参加数が 7 チーム 17 名から 10 チーム 32 名に、参加学校が 5 校から 14 校にそれぞれ増加した。また、エフエム石川のラジオ番組に 2 回出演したり、団体運営 SNS (X、Instagram) のフォロワー数も 810 から 948 に増加したりと、より多くの地域住民に知っていただけるようになった。



↑エフエム石川「Students Jam R」出演

(3) 協力組織と地域の拡大

今年度の教育プログラムでは、計 24 名のゲストをお招きし、よりよい課題解決や社会実装のためのサポートをしていただいた。コンペティションでは、医療、イノベーション、行政など多分野の専門家にお越しいただき、様々な角度からの評価によってさらなるブラッシュアップを図ることができた。

また、今年度は小松市や福井県鯖江市等の新規学校からも応募があり、プログラムに参加する地域の幅も広がっている。

(4) 教育ノウハウの横展開

本プログラムは今年で五年目を迎え、これまでに 101 名の中高生が参加している。修了生の中には東京大学に入学したり医学科に推薦入試で入学した生徒もおり、修了後も本プログラムでの知識や経験を生かして様々な分野で活躍している。今年度は運営大学生が地域の高校に出向いて約 70 名に出前授業を行い、蓄積した教育ノウハウをさらに多くの中高生に広めた。



↑大学生による出前授業

## 5. 今後の活動計画

### (1) 新規ヘルスケアテーマでの運営

来年度取り組むべきヘルスケアテーマや現在の医療のトレンドを考慮し、次年度テーマを決定。今年度同様、大学生が伴走しながら中高生が主体となって課題解決を行うプログラムを運営する。

### (2) 質の高いプログラムやメンタリングの提供とクリティカルなアイデアの創出

協力組織や協力者の拡大、大学生教育の充実で、より質の高いプログラムやメンタリングを提供する。こうした教育プログラムに並行して、当事者へのヒアリングの増やすことで潜在的で当事者のニーズがある課題を解決できるアイデアを創出する。

### (3) 活動継続チームのサポートと社会実装

これまでのプログラムを修了し活動を続けているチームへのサポートを充実させることで、アイデアを社会に実装し苦しむ人々を実際に救う。

## 6. 活動に対する地域からの評価

以下に、Forum に来場した方々からいただいたご意見を抜粋して紹介する。

- もっと認知度が上がり、若者ならではのアイデアを発信でき、世の中を良くするための原動力の一つになってほしい。
- 中高生が前のめりに自分のアイデアをプレゼンしてくれたことが嬉しかった。
- 審査員長がおっしゃっていたように、「日本も捨てたものじゃない」と感じた。「私も自分にできることをやろう」と、背中を押された一日だった。
- 素晴らしい先生方と優秀な大学生の方々。もっともっとメディアで宣伝、取材、新聞掲載などあればいいなと思った。
- ぜひ、製品化まで実施してほしいと思った。皆さん素晴らしいアイデアで、社会実装に値すると思うと同時に、実際のビジネスを立ち上げる経験もしてほしいと思う。
- 学生ができることに限界はないと思った。高校生の子供に、大学生になったら参加したら？と声をかけた。



# 女性活躍の推進に関する実践

齊藤実祥※1 平子紘平※1 寒河江雅彦※2  
小竹由夏※3 岩脇芽生※4 松本莉奈※4 吉尾知佐子※4

※1 金城大学総合経済学部 ※2 金沢大学融合研究域  
※3 金沢大学大学院人間社会環境研究科 ※4 金沢大学経済学類

令和6年度実施

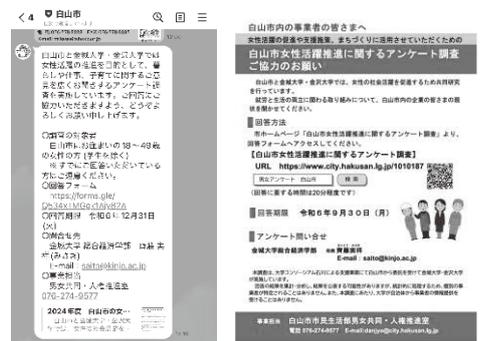
## ①活動の目的

白山市は「住みよさランキング2023」で全国5位と、優れた生活環境を有する地方都市である。近年は若い子育て世帯の白山市への転入が多く、人口面から自然増と社会増のバランスの取れた人口政策が重要な課題となる。そこで、同市では生活環境の整備と向上、市内企業では働き方の多様性や支援の充実が求められる。しかしながら、昨年度の「女性活躍の推進に関する調査」で、共働き率の高さに反する家事・育児の女性への偏りが分かった。昨年度から引き続き、3年計画で実態調査、具体的施策の提案、施策の社会実装を目指す。本年度は、女性市民の生活面・仕事面・子育て面の問題や要望を既存統計資料の整理、市民向けと企業向け調査で多角的に深掘りする。

## ②活動内容

女性の労働や昇進への意欲に関する実態や、企業が女性活躍を推進するために苦労していること、工夫していることを明らかにしたいといった課題が白山市から挙げられた。そこで、昨年度から継続して既存の統計資料から情報の抽出と女性向けのアンケート調査を行った。加えて、新たに企業向けアンケート調査を行った。また、女性と企業が抱える課題やニーズを深く掘り下げるため、それぞれに対してのヒアリング調査を進めている。

(下図：市民・企業向けアンケート調査)



## ③活動成果

女性向け・企業向けアンケートと女性向けヒアリング調査の結果から、一部抜粋して記載する。分析結果から、白山市において女性活躍を更に推進するうえで解消すべき3つの問題点が明らかになった。

### ①家庭における家事・育児役割の女性側への偏り

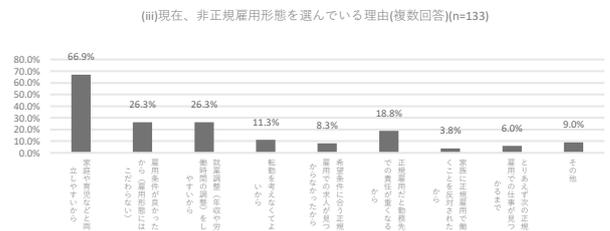
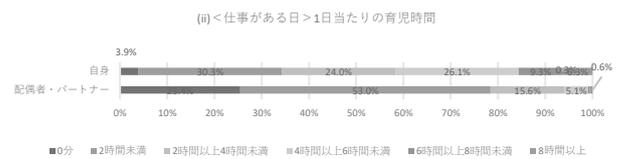
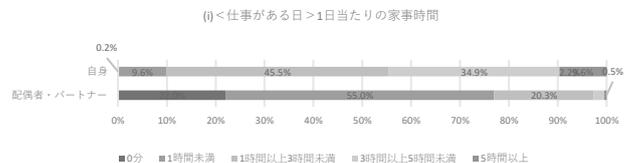
市民向けアンケートの結果から、共働き率が90.7%であるものの、女性市民の多くはフルタイムでの労働に加えて、家庭での家事・育児で1日の大半を費やし、自身の余暇や睡眠時間等が十分に取れない状態であると考えられる。

### ②労働時間と労働形態の柔軟性の低さ

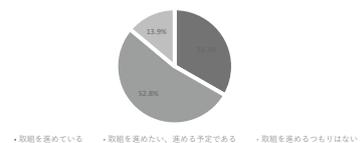
女性向けアンケートの結果から、回答者自身のうち非正規雇用は30.7%で、配偶者・パートナーは1.7%であった。非正規雇用の理由は「家事や育児と両立しやすいから」が66.9%で最も高い。つまり、仕事と生活の両立のため非正規雇用を選択している女性が一定数おり、正規雇用のまま柔軟な働き方による両立は難しいことが示唆される。

### ③各ライフステージでの社会で働く女性のロールモデル不足

企業向けアンケートの結果から、平均勤続年数は男性が13.7年、女性が11.3年である。企業の86.1%が女性の継続就業への取組に前向きである。一方で、女性が結婚・出産等といったライフイベントをきっかけに一時的に離職又は転職するケースが未だ見られる。この理由の一つは、家庭・育児と仕事を両立している女性のロールモデル等が不足しており、両立への不安が払拭できないことが挙げられる。



(iv) 【企業向けアンケート】女性の継続就業に向けた取組を進めていると考えているか(n=36)



## ④今後の展望

今後は本活動の分析結果から明らかになった問題点の解消に向けて、継続したより精緻な調査分析及び施策の提案を進めていきたい。例えば、成果の自治体へのフィードバック、白山市独自の施策提案、大学と企業連携でのリスクリング機会の創出である。

## 1. 活動の要約

今年度の活動では、昨年度の「女性活躍の推進に関する調査」で共働き率の高さに反する家庭内における家事・育児時間の女性への偏り等が明らかになったことを踏まえて、白山市に住む女性の生活面・仕事面・子育て面に関する実態を更に深く調査した。昨年度からの継続で既存統計分析と市民向けアンケート調査を行った。また、新規で企業向けアンケート調査と、女性・企業向けヒアリング調査を実施した。調査結果から白山市において女性活躍を推進するうえでの課題を明らかにし、その解消に向けた施策の提案につなげる。

## 2. 活動の目的

白山市は「住みよさランキング 2023」で全国 5 位と、優れた生活環境を有している。近年は若い子育て世帯の白山市への転入が多く、これら人口の維持・増加が重要な課題となる。そこで、自治体では生活環境の整備と向上、市内企業では働き方の多様性や支援の充実が要求される。しかしながら、昨年度の「女性活躍の推進に関する調査」で、共働き率の高さに反する家事・育児時間の女性への偏り等が分かった。昨年度から引き続き、3年計画で実態調査、具体的施策の提案、施策の社会実装を目指す。本年度は、女性の生活面・仕事面・子育て面の問題や要望を既存統計の分析、市民向けと企業向けの調査で多角的に深掘りする。

## 3. 活動の内容

白山市の関係部局との打ち合わせにおいて、女性の労働や昇進への意欲に関する実態や、企業が女性活躍を推進するために感じている課題や工夫していることを明らかにしたいことが挙げられた。そこで、昨年度から継続して既存統計資料の分析と女性向けアンケート調査を行った。加えて、新たに企業向けアンケート調査を行った。また、女性と企業が抱える共通の課題やニーズを深く掘り下げるため、女性と企業それぞれに対してのヒアリング調査を進めている。2月末～3月ごろ(予定)に報告会を実施し、女性活躍推進に関わる市民・企業の実態及び問題点を整理し、白山市へフィードバックする。

## 4. 活動の成果

女性向け及び企業向けアンケートと女性向けヒアリング調査の結果から、一部抜粋して活動の成果を記載する。調査結果の分析から、白山市において女性活躍を更に推進するうえで解消すべき 3 つの問題点が明らかになった。

- ①家庭における家事・育児役割の女性側への偏り
- ②労働時間と労働形態の柔軟性の低さ
- ③各ライフステージ<sup>\*1</sup>での社会で働く女性のロールモデル不足

### ①家庭における家事・育児役割の女性側への偏り

女性向けアンケートの結果から、共働き率は 90.7%であり、全国の 68.5%(総務省「2020 年度労働力調査」)を大きく上回っている。回答者の 1 日当りの実労働時間(希望時間と実際の時間)を見ると、希望時間では割合が高い順に「6 時間以上 8 時間未満」が 53.1%、「4 時間以上 6 時間未満」が 30.0%、「8 時間以上」が 11.2%である。実際の時間では割合が高い順に「6 時間以上 8 時間未満」が 46.6%、「8 時間以上」が 34.7%、「4 時間以上 6 時間未満」が 15.4%で、希望時間よりも長く働いている者が多い

<sup>\*1</sup> 本報告でライフステージとは、女性の大きなライフイベントとして結婚、出産・育児、配偶者・パートナーの移動に伴う転勤・離職が主なものである。

(図1)。回答者と配偶者・パートナーとの1日当りの家事時間を比較すると、1時間以上である割合が回答者自身は90.0%、配偶者・パートナーは23.0%である(図2)。1日当りの育児時間では、2時間以上である割合が回答者自身は65.7%、配偶者・パートナーは21.6%である(図3)。また、育児休暇の取得状況について、回答者自身の73.2%が休暇取得しているのに対して、配偶者・パートナーでは25.7%の取得率に留まる(図4)。したがって、家庭での家事と育児の役割が女性側に偏っており、女性の多くはおおそフルタイムでの労働に加えて、家庭での家事と育児で1日の大半を費やし、自身の余暇や睡眠時間等が十分に取れない状態であると考えられる。

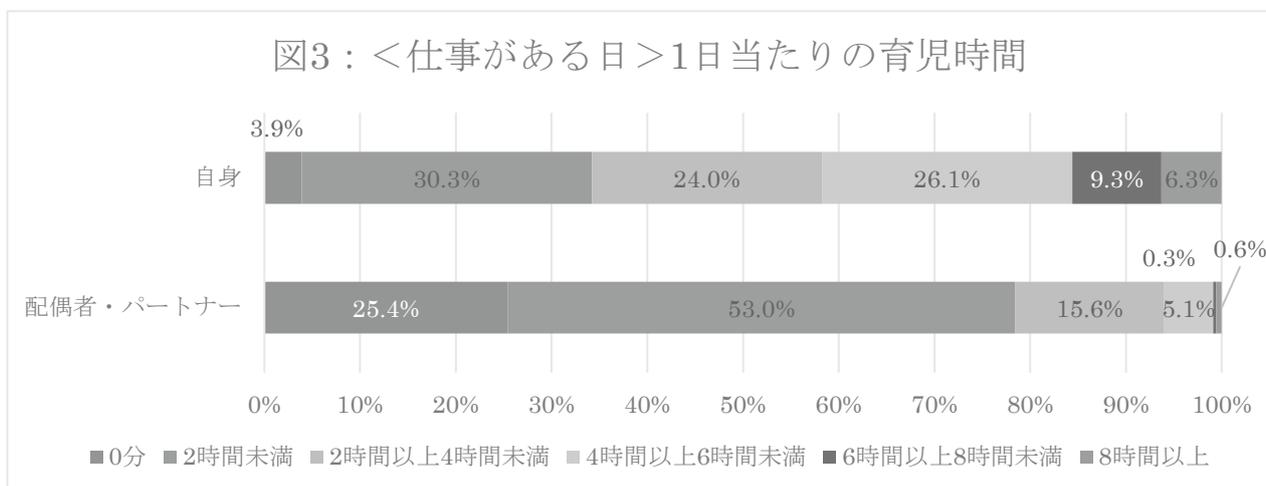
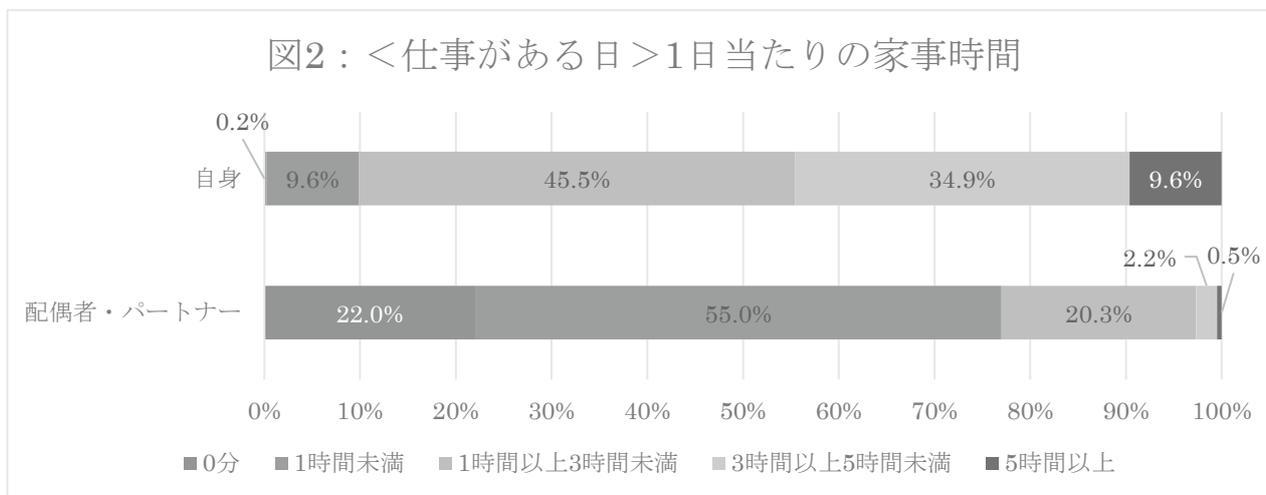
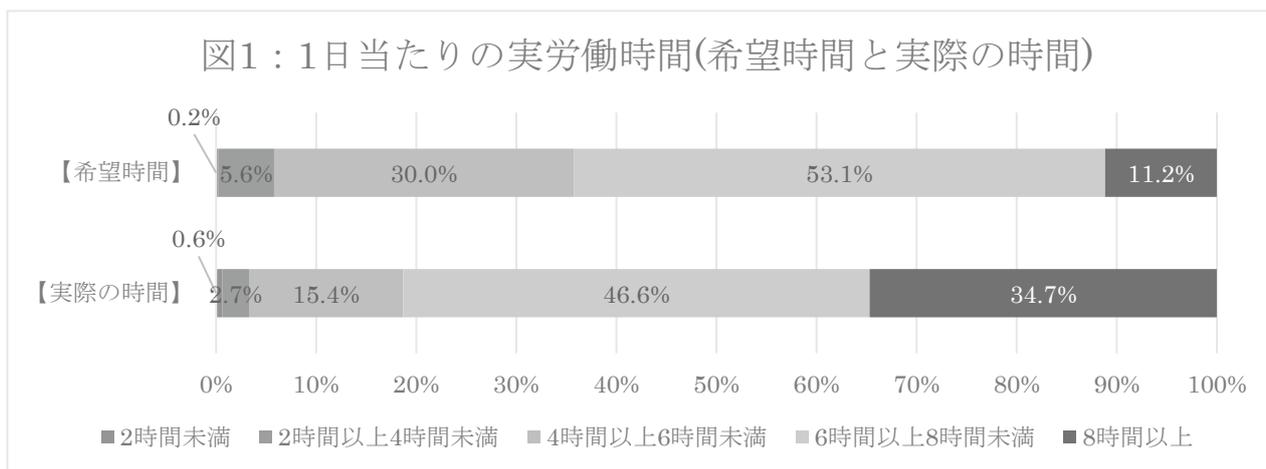
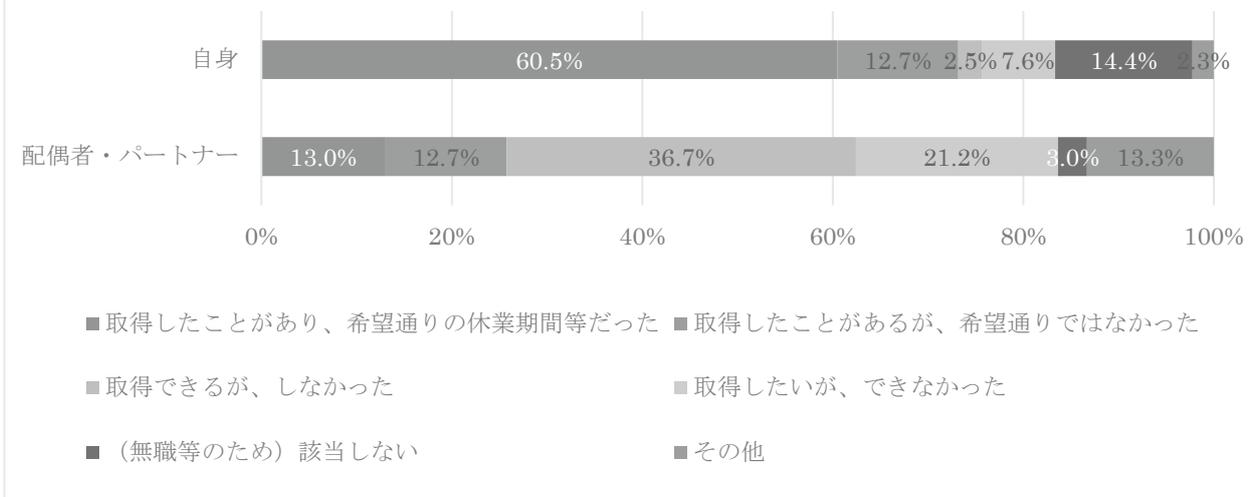


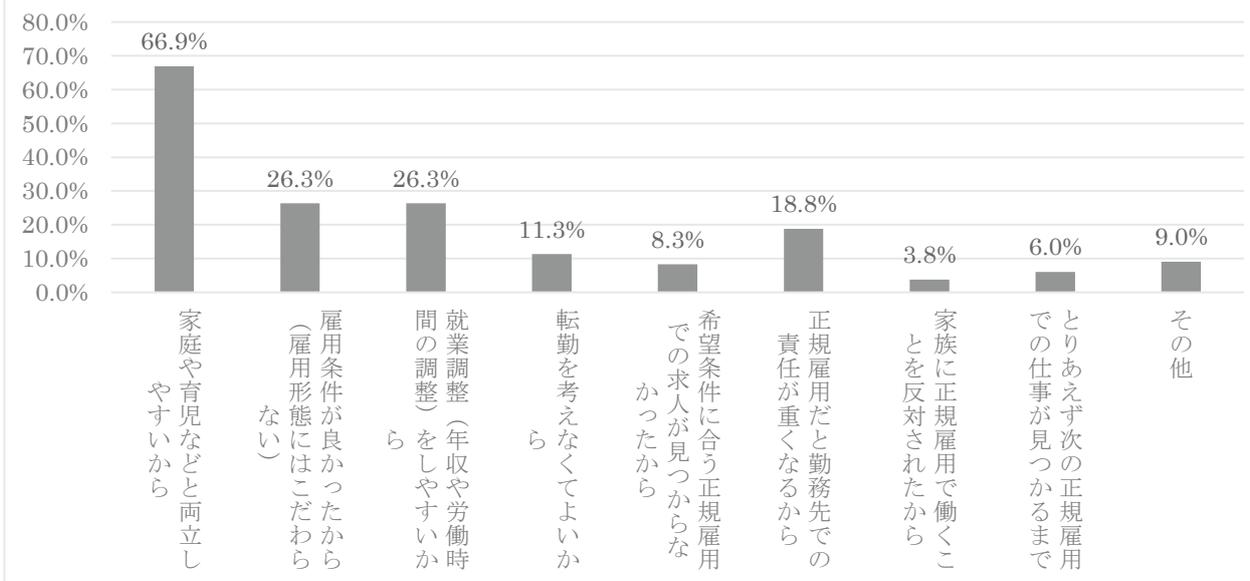
図4：育児休暇の取得状況



②労働時間と労働形態の柔軟性の低さ

女性向けアンケートの結果から、非正規雇用(契約社員、嘱託社員、派遣社員、パート・アルバイト)の割合が回答者自身は 30.7%で、配偶者・パートナーは 1.7%であった。非正規雇用である回答者について、現在の雇用形態を選んだ理由では「家事や育児などと両立しやすいから」が 66.9%で最も高い(図 5)。つまり、労働と家事・育児の両立を目的として非正規雇用を選択している女性が一定数いると考えられる。企業でテレワーク勤務や時間短縮勤務等を制度として設けていても形骸化している場合があり、正規雇用では柔軟な働き方が未成熟で家庭との両立は難しいことが示唆される。

図5：現在、非正規雇用形態を選んでいる理由(複数回答可)(n=133)

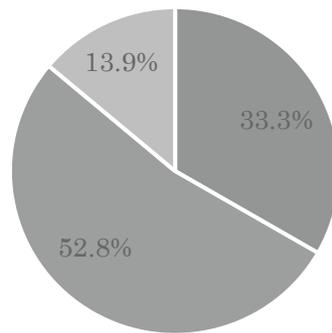


③各ライフステージでの社会で働く女性のロールモデル不足

企業向けアンケートの結果から、平均勤続年数は男性が 13.7 年、女性が 11.3 年であり、女性の方が 2 年ほど短かった。女性の継続就業に向けては、86.1%が取組を進めている又は進める予定である

(図 6)。女性の継続就業に前向きな企業は多いものの、女性が結婚・出産等といったライフイベントをきっかけに一時的に離職又は転職するケースは未だ見られる。この理由の一つには、家庭・育児と仕事の両立をしている女性のロールモデル等が不足しており、両立への不安が払拭できないことが挙げられる。多くの場合、仕事から離れることでキャリアは一度リセットされ、その後の給与面・スキル面で不利になる。加えて、地方都市においてはスキルアップやリスキリングによるキャリアアップの機会が少ないことが問題である。

図6：【企業向けアンケート】女性の継続就業に向けた取組を進めていこうと考えているか(n=36)



■ 取組を進めている ■ 取組を進めたい、進める予定である ■ 取組を進めるつもりはない

## 5. 今後の活動計画

今回の活動におけるアンケートとヒアリング調査結果から明らかになった3つの問題点①家庭における家事・育児役割の女性側への偏り、②労働時間と労働形態の柔軟性の低さ、③各ライフステージでの社会で働く女性のロールモデル不足の解消に向けて、自治体に対してより正確な実態把握のための調査及び施策の提案を行う予定である。具体的には以下の通りである。

- ・実態調査結果の白山市民・企業へのフィードバック
- ・他自治体での成功モデルを基にした女性活躍推進のための白山市独自の施策提案
- ・大学と企業の連携によるスキルアップ・リスキリング機会の創出

## 6. 活動に対する地域からの評価

女性・企業向けアンケート調査の自由回答やヒアリング調査で寄せられた女性や企業の声の一部抜粋・編集して掲載する。

- ・白山市は子どもの医療費が18歳まで無料で、自然の豊かさと買い物等での高い利便性の両方が揃っているなど、育児・生活するための環境が整っている。
- ・生活と就労環境の整備(子どもの遊び場や病児保育の充実、女性の就労環境を改善するための企業への啓蒙活動等)を更に進めていくことと、市民への積極的な情報発信を白山市に期待している。

## 観光資源としての手取キャニオンロード自転車道とその可能性の再発見

指導教員 金城大学短期大学部 教授 矢澤建明

参加学生 2年 竹林英悟 山下楓 中川優輝 井上敬人 白崎結佳  
中谷叶芽 長谷悠依 山崎真央

本ゼミナール活動にご協力くださいました、e-CRUTTTO の越村浩史さま、石川県サイクリング協会理事長の岡本勇さま、白山市鳥越瀬木野在住の瀬川亮太さま、石川県道路整備課の大代昇平さま、白山市観光連盟の舟津能子さま、白山市鳥越市民サービスセンター所長の東陽一さま、白山ジオライド推進協議会会長の長壮一さま、GEORIDE HAKUSAN 実行委員会の皆さま、サイクリングガイドの皆さま、私たちのつたないアンケート調査にご協力いただいたすべての方々に感謝申し上げます。

# 観光資源としての手取キャニオンロード自転車道とその可能性の再発見

金城大学短期大学部 矢澤ゼミ

山下楓・井上敬人・中川優輝・竹林英悟・白崎結佳・中谷叶芽・長谷悠依・山崎真央

## はじめに

白山市の手取キャニオンロード自転車道は、白山手取川ジオパークの「川と峡谷のエリア」をそのまま体験できる素晴らしい自転車道である。しかし、観光地としての認知度は低く、サイクリストも単にサイクリングに来るだけで、せっかくの観光資源が生かされていない。白山市鶴来のレンタサイクルショップ e-CRUTTTO 様からの問題提起に対し、より良い観光資源としての活用を目指すため、学生を中心に下記の活動を実施した。

## 活動内容

### ①「旧加賀一の宮駅前」手取キャニオンロード美化活動



白山ジオライド推進協議会さまに協力し、4/20、6/8、10/26と手取キャニオンロード美化活動を行った

### ②手取キャニオンロード周辺の独自調査、イベント参加



GEORIDE HAKUSAN へのイベント協力(中止⇒独自にルート試走)、他にも手取キャニオンロードルート外の見どころ調査を行った



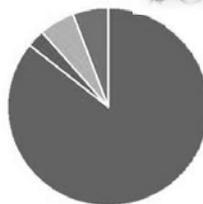
### ③e-CRUTTTOさまのツアー体験



e-CRUTTTO さまの協力で、2回のサイクリングツアーを実施



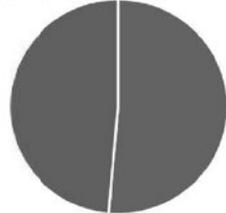
### ④手取キャニオンロード利用者へのインタビュー調査



手取キャニオンロードを知っていますか？



車止めポールはどう感じましたか



### ⑤北陸鉄道利用調査、インバウンドニーズ調査



金沢市にし茶屋街付近で出会った海外の方、鶴来駅で出会った方12名にインタビューを行った。

- ・白山手取川ジオパークの知名度 = 0%
- ・手取キャニオンロードの写真を見た好感度 = 100%

### ⑥車止めポール問題について意見交換



石川県サイクリング協会理事長の岡本さま、石川県道路整備課の大代さま、白山市瀬木野在住の瀬川さま、白山市鳥越支所の東さま、にお話を伺った。  
最終的には警察ということになり、石川県警に電話をさせていただいたが、結局は手取キャニオンロードができた当時の地元からの要望では？ということになり、かつ当時の記録が残っていないとの話であった。

## 今後の目標

(1) 手取キャニオンロードの車止めポール・止まれ表示問題

現状で車最優先となっている状況が安全なのかと考えると、別の解決策があるように思われる。ひきつづき協議をしていってほしい。

(2) 学生考案のサイクリングツアー実施

絶景を重視したサイクリングツアー案を策定したので、次年度のゼミ学生には e-CRUTTTO さまと連携して実現してほしい。

## 1. 活動の要約

金城大学短期大学部ビジネス実務学科では、最終学年である2年生は少人数でのゼミナールが必修となっており、矢澤ゼミでは毎年地域課題について取り組んでいる。特に白山ろくの手取キャニオンロード活性化は長年のテーマであった。今回は、学生が体験したサイクリングツアーを元に学生目線の意見・アイデアを出し、サイクリストへのアンケート、金沢でのインバウンド調査、サイクルイベントなどへの参加、地元の方との意見交換を行った。

## 2. 活動の目的

白山市の手取キャニオンロード自転車道は、白山手取川ジオパークの「川と峡谷のエリア」をそのまま体験できる素晴らしい自転車道である。しかしながら、観光地としての認知度は低く、サイクリストも単にサイクリングに来るだけでせつかくの観光資源が活かされていない。本学でも、授業やゼミナール活動で毎年のように利用させてもらっている手取キャニオンロードをハード面・ソフト面において、より良いものにしていきたいと考えていた。そのような中、2024年4月1日よりオープンした鶴来駅前のレンタルサイクルショップ e-CRUTTTO さまからお声掛けをいただき、学生目線での協力をしたいというのが活動の目的である。

## 3. 活動の内容

	日付	活動内容	学生参加人数
1	4/20(土)	旧加賀一の宮駅手取キャニオンロード美化活動 (6/8、10/26)	7
2	6/8(土)	e-CRUTTTO ツアー1 (明神壁トレッキング)	2
3	6/29(土)	サイクリングルート・周辺観光地の下見 (鳥越一向一揆歴史館など)	8
4	7/7(日)	e-CRUTTTO ツアー2	7
5	9/12(木)	白山市観光連盟サイクリングツアー参加の方にインタビュー	2
6	10/9(水)	サイクリングガイドとの会議	8
7	10/13(日)	ほくてつ電車まつり・サイクリングガイド体験	5
8	10/15(火)	サイクルトレイン体験・インバウンド調査	4
9	10/21(月)	手取キャニオンロード・e-bike 環境調査	7
10	10/23(水)	サイクリング協会会長の講話・打ち合わせ	8
11	10/26(土)	サイクリストへのアンケート調査 (手取キャニオン)	7
12	11/2(土)	GEORIDE HAKUSAN (雨天のため中止)	8
13	11/3(日)	GEORIDE HAKUSAN コース走行	1
14	11/21(木)	サイクリングガイドオンラインミーティングに参加	1
15	11/26(火)	石川県庁道路整備課訪問	4
16	12/11(水)	地元の方との会議	8
17	12/20(金)	金沢でのインバウンドニーズ調査	4
18	1/14(火)	白山市鳥越支所訪問	2
19	1/14(火)	白山ジオライド推進協議会会長訪問	2
20	2/6(木)	金城大学短期大学部ビジネス実務学科産学連携ゼミナール発表会	8
21	2/22(土)	大学コンソーシアム石川「地域課題研究ゼミナール支援事業」報告会	8

(1) 白山ジオライド推進協議会「旧加賀一の宮駅前」手取キャニオンロード美化活動

4/20(土)、6/8(土)、10/26(土)に白山ジオライド推進協議会と協力して金名線の廃線駅跡「旧

加賀一の宮駅前」の手取キャニオンロード美化活動を行った。

(2) 手取キャニオンロード周辺の独自調査、イベント参加



白山ろくや手取キャニオンロード、白山手取川ジオパークについて理解を深めるため独自で周辺の見どころ調査を行った。まずは、本学集中授業「アウトドア演習（手取キャニオンロードサイクリングが含まれる演習）」になるべく多くのメンバーが参加し、手取キャニオンロードのサイクリングを体験した。また、6/29に手取

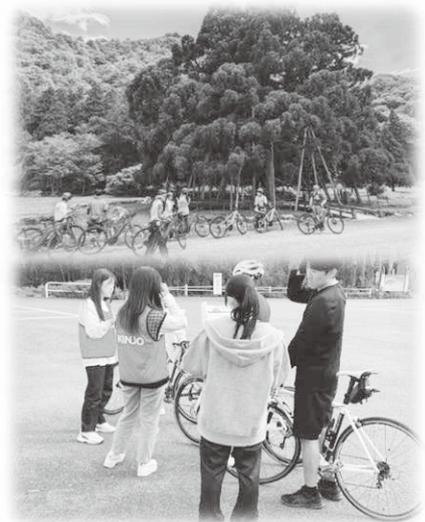
キャニオンロードのルート外である一里野や鳥越一向一揆の里、獅子吼高原を視察した。

さらに、手取キャニオンロードを含むはじめての本格的サイクルイベント「GEORIDE HAKUSAN」にエイド協力員として、さらには参加者として参加をする予定であったが、残念ながら悪天候で中止となってしまった(11/2)。選手として参加予定だった学生が、実際のコースを自転車で走って検証も行った(11/3)。

(3) e-CRUTTTO さまのツアー体験

独自調査と並行して、e-CRUTTTO さまのツアーを体験させていただいた。

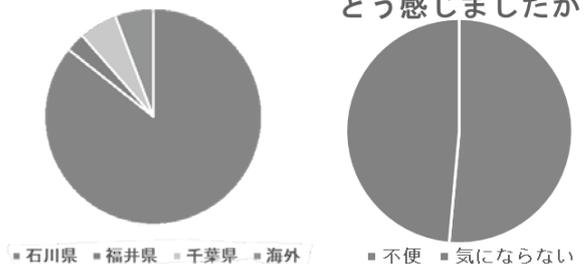
- ① 6/8. 過去の先輩の活動から、鳥越城の眺望に興味があったが、2022年豪雨・2024年能登震災の影響で立ち入りができない状況だった。その点をサイクリングガイドの提案で、同様の眺望が楽しめる、明神壁トレッキングを含むツアーを我々向けに作っていただいた。
- ② 7/7. 一般向けに提供されている、スタンダードな「滝めぐりコース」に7名で参加させていただいた。たまたま、一般の方の参加がなく我々だけだったことから金城学園の白山美術館もツアーコースに入れていただいた。白山ろくのことをよく知らない人は マップ情報を元に単に手取キャニオンロードを走るだけだが、サイクリングガイドのおかげで手取キャニオンロード以外のコース案内していただいた。



(4) 手取キャニオンロード利用者へのインタビュー調査

前述の「GEORIDE HAKUSAN」の大会参加者に「手取キャニオンロード」についてのアンケート調査をする予定であったが、悪天候で中止となり、想定していたアンケート数が激減してしまった。しかし、10/26をはじめとしてさまざまな場面でサイクリストに声をかけ、35名の方からお話を聞くことができた。県内からサイクリングを楽しむ方が多いこと、車止めポールについては半数以上の方が不便と感じていた。

車止めポールはどう感じましたか



## (5) 北陸鉄道利用調査、インバウンドニーズ調査

手取キャニオンロードへのアクセスとして金沢から鶴来を結ぶ北陸鉄道関連についても調査をした。まずは「ほくてつ鉄道まつり」に協力し、アンケート調査と鶴来駅近辺のミニサイクリングツアーガイドの補助を行った。ミニサイクリングツアーの集客はあまりよくなく、鉄道ファンとサイクリングは必ずしも結びつかないと感じたが、北陸鉄道は自転車をそのまま電車に乗せて運べる「サイクルトレイン」という

サービスを行っていることから可能性はあると感じた。金沢側終点である野町駅近くには観光客が数多く訪れる「にし茶屋街」があり、現地でのインバウンド調査として外国人の方にアンケート調査を行った。白山の知名度は皆無だったが、手取キャニオンロードの写真を見た意見は全員好意的だった。



## 海外の方 12名にインタビュー

- ・白山手取川ジオパークの知名度 = 0%
- ・手取キャニオンロードの写真を見た好感度 = 100%

サービスを行っていることから可能性はあると感じた。金沢側終点である野町駅近くには観光客が数多く訪れる「にし茶屋街」があり、現地でのインバウンド調査として外国人の方にアンケート調査を行った。白山の知名度は皆無だったが、手取キャニオンロードの写真を見た意見は全員好意的だった。

## (6) 車止めポール問題について意見交換



さまざまな活動から、手取キャニオンロードのハード面の課題である「車止めポール」と「止マレ」表示が連続する点について、石川県サイクリング協会理事長、石川県道路整備課、地元在住の方、白山市鳥越支所所長、石川県警といった方々と意見交換を行った。後述のとおり、すぐにも問題が解決するわけではないが、問題提起にはなると考えている。

## 4. 活動の成果

## (1) 手取キャニオンロードが抱える課題

上記の活動から、以下の3点を課題として挙げる。

- ① 手取キャニオンというほど峡谷の近くを走らない（学生としての感想）
- ② 自転車道上の車止めポール、止マレ表示の多さ、外国人向けの表記不足
- ③ 地元のサイクリストばかり（逆に地元の人しか知らない穴場なのでは？地元には強い人気）

## (2) 課題の解決策

上記の解決のため、以下のことを提案する。

- ① 「キャニオンというほど峡谷の近くを走らない」という点については、自転車道にしばらくは走れないツアールートを設定し、サイクリングガイドによる紹介をすることで解決できると考えた。手取キャニオンロード近辺に精通しているサイクリングガイドは、穴場となっている絶景を案内することができる。私たちの活動でも明神壁というほとんど知られていない場所のトレッキングを体験させていただき、絶景を堪能することができた。本来であれば、鳥越城に電動アシスト自転車で登って見たかったが、2022年豪雨・2024年能登震災の影響で登ることができない中、サイクリングガイドの提案でこのようなツアーを組んでいただくことができた。
- ② 自転車道上の「車止めポール」および「止マレ」表示が連発する問題については、手取キャニオンロード設置時の経緯を知っている方がほとんどいないこと、すでにあるものを変えるということについては地元、行政、警察といった方々がおたがいの顔色をうかがって動きがにぶいという現状から、非常に厳しいものがある。この点については、声をあげ続けていくしかできない。ただし、

安全のためにもサイクリングガイドツアーの推進が、現状の妥協点と考える。実際、白山市観光さまのガイド付きサイクリングツアーを体験されたご夫婦にアンケートを取らせていただいたが、大変に好意的な意見だった。

- ③ 地元のサイクリストばかりという点については、魅力の発信をしていくほかない。アンケート調査を行った日には、2時間程度で30名を超えるサイクリストと遭遇することができた。それほど地元で愛されているわけだから、県外や国外の方に知られば必ず話題となる。サイクリングガイドツアーが望ましいということから、学生目線でのツアー案も考案した。手取キャニオンロード周辺は、当然白山手取川ジオパークの「山と峡谷」のエリアであることから見どころが満載であるが、若者には「絶景」が心に響くはずだと考え、絶景にこだわったツアー案としてみた。このツアーを実施することによって手取キャニオンロードがよりメジャーでディープな場所になることが考えられ、さらに SNS を積極的に発信し国内外問わず知名度を上げていき、観光資源の有効化を図ることができるだろう。

**学生目線で考えたサイクリングツアー案**

- |                  |                               |
|------------------|-------------------------------|
| • 9:00 e-CRUTTTO | • 13:30 不老橋 (絶景)              |
| • 10:00 白山比咩神社   | • 14:00 綿ヶ滝 (絶景)              |
| • 11:00 鳥越城 (絶景) | • 15:00 下野園地                  |
| • 12:00 一揆そばで昼食  | • 16:00 獅子吼高原ゴンドラ (絶景) 島集落・軽食 |
| • 13:00 御仏供杉     | • 17:00 e-CRUTTTO             |

**5. 今後の活動計画**

本年度のゼミナール学生は卒業することになるが、引き続き来年度のゼミナール学生にもこの活動を継続して行ってほしいため以下の点をあげる。

- (1) 手取キャニオンロードの車止めポール・止マレ表示問題

この問題については、安全第一というしほりがあるため、落としどころを見つけるのが難しいが、現状で車最優先となっている状況が安全なのかと考えると、別の解決策があるように思われる。ひきつづき関係者の方と協議をして行ってほしい。

- (2) 学生考案のサイクリングツアー実施

絶景を重視したサイクリングツアー案については、考案した時期が冬であったため、試走や実施が不可能であった。次年度のゼミ学生には e-CRUTTTO さまと連携して実現してほしい。

- (3) GEORIDE HAKUSAN への協力とアンケート調査

残念ながら中止となってしまった、GEORIDE HAKUSAN サイクルイベントが、次年度5月に開催されるとお聞きした。手取キャニオンロードを利用したはじめての本格的サイクルイベントにぜひ協力し、かつサイクリストたちへのインタビュー調査も実施してほしい。

**6. 活動に対する地域からの評価 (レンタサイクルショップ e-CRUTTTO 越村浩史さまより)**

矢澤ゼミ学生の皆様、矢澤先生にはこの度の地域課題研究において甚大なご協力を頂き深く感謝いたします。手取キャニオンロードは地域に根づいた観光資源であり、周辺のジオスポットと関連つけることで更に楽しさが増すと感じています。手取キャニオンロードの走行に関する課題や、利用者・インバウンドへのインタビューなど幅広い活動は正に学生様目線の素晴らしい活動になったと思います。また、皆様には暑い時期のツアー参加、ツアーへのフィードバックや新たなツアー構想の提案などを頂き嬉しい限りです。頂いた提案の実現に向けて、今後もご協力頂きたく思います。ありがとうございました。

# 地域課題発掘枠



## 念仏踊り（地域のお宝）の保存と継承

指導教員 北陸大学 講師 伊藤梢  
教授 福江充

参加学生 3年 興石啓 石黒有加 竹内歩 宮崎良菜 中村菜月  
2年 新家莉子 松本明日風 和田彩花

### 謝辞

三谷文化保護協会、三谷公民館、三谷地区および東原町の皆様には、活動中大変お世話になりました。活動へのご協力に深く感謝申し上げます。

# 念仏踊り（地域のお宝）の保存と継承

地域課題発掘枠No. 2 3

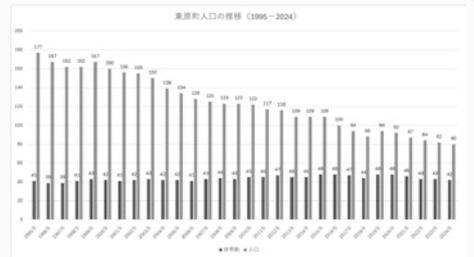
北陸大学 福江・伊藤ゼミナール

(興石啓・石黒有加・竹内歩・中村菜月・宮崎良菜・新家莉子・松本明日風・和田彩花)

連携団体：三谷文化保護協議会（金沢市）

## 活動目標

三谷地区東原町はこの30年で人口が半減し、少子高齢化も伴って地域に根ざした信仰を基盤とした祭礼や伝統芸能の持続が困難となっている。東原町の念仏踊りは金沢市歴史文化遺産（通称：地域のお宝）に認定された特色ある地域文化である。本研究は、この東原町に長く受け継がれてきた東原念仏おどりの継承の現状を明らかにし、抱える問題の解決の糸口を地域の方々との協働によって見出そうとするものである。



## 活動の目的

- 「知る」一向一揆に源流を持つ地域の信仰と念仏踊りの起源について郷土史家から学んだ上で、地域の人々への聞き取り調査を元に継承の現状を把握する
- 「記録する」毎年の盆踊りで踊られてきた念仏踊りへの参与観察と画像・動画での記録
- 「発信する」SNS用PR動画・踊り方のマニュアル作成

## 活動の内容（調査のみ抜粋）

- 7月13日 三谷公民館にて郷土史家による歴史講座参加
- 7月25日 三谷公民館にて念仏おどり練習会参加
- 8月1日 念仏おどり練習会参加・代表者インタビュー
- 8月3日 三谷地区夏祭り参加および動画撮影
- 11月16日 東原地区集会所にて地域住民4名に聞き取り調査
- 12月15日 東原地区朝市訪問

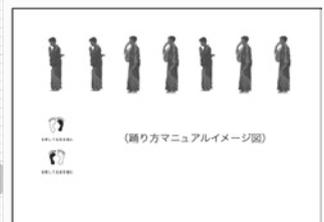
## 活動の成果

### 「知る」「記録する」活動から見える地域の課題

聞き取り調査と参与観察から明らかになったことは以下の通りである。東原念仏おどりは一時途絶えていたが、1970年代に学術調査を背景に復興し、以来「上演」機会が増えたことで舞台向けのフォーメーションや歌のアレンジを加えながら再普及が進められた。しかし、人口減少により東原町内の夏祭りは平成初期に廃止され、現在は三谷地区全体の盆踊り大会で継承されている。講習会や本番の観察では、高齢者が主な参加者であり、若者の姿はほとんど見られず、踊りの輪が広がりを見せることもなかった。このことから、若い世代が踊りの輪に加わるきっかけ作りが大きな課題であることが明らかとなった。

### 課題を踏まえ「発信する」

東原町に若い世代が少なく、踊りの継承が困難となっているが、人口減少を根本的に解決するのは難しい。そこで、三谷地区全体に継承範囲が拡大していることを活用し、盆踊り大会にやってくる帰省中の若者が興味を持ち「踊ってみたい」と思えるきっかけを作る必要があると考えた。そのために、若者がアクセスしやすいSNS向けのPR動画を作成し、紙媒体で配布でき、かつ二次元バーコードで動画を確認できる踊り方マニュアルを用意する取り組みを進めている。PR動画は盆踊り大会で撮影した記録動画を基に縦長形式で1分程度に編集し、CD音源を若者が馴染みやすいようにアレンジしたものを使用している。これらを通じて発信力を高め、踊りの輪を広げることを目指している。



## 今後の活動計画

三谷文化保護協会では東原念仏おどりの上演機会を今後も増やしていく予定である。継承の担い手の範囲も東原町外に拡大していることから、初めて踊りに触れる人や盆踊り大会で年に一回しか踊る機会がなかった人々も今後継承者となることが期待されるため、上述の動画および踊り方マニュアルを活用し、継承の一助としたい。

## 1. 活動の要約

本プロジェクトは、過疎や少子高齢化によって地域文化の継承が困難となっている現状を踏まえ、金沢市東原町に伝わる伝統文化「東原念仏おどり」の継承の問題点を明らかにし、地域住民と協力して解決策を模索することを目的とする。活動では、地域の信仰や念仏おどりの起源について学ぶとともに、盆踊り大会や練習会の観察・記録を行い、踊りの現状や課題を把握した。調査の結果、踊りは1970年代に復興を遂げたものの、人口減少と高齢化により若い世代の参加がほとんどなく、踊りの継承が危ぶまれていることが明らかになった。

この課題に対し、若者が興味を持つきっかけを提供するため、SNS 向けの PR 動画や踊り方を紹介するマニュアルを作成し、地域の伝統文化を広く発信し継承の輪を広げる取り組みを進めている。

## 2. 活動の目的

過疎や少子高齢化によるコミュニティの持続可能性の消失は、日本各地の自治体が抱える問題である。本プロジェクトが対象とする金沢市東の山間部、富山との県境に位置する三谷地区では、市街地からほど近いにも関わらず、深刻な少子高齢化と住民の減少により、地域に根ざした信仰を基盤とした祭礼や伝統芸能の継承が困難となっている。

三谷文化保護協会では、三谷地区内東原町に伝わる「東原念仏おどり」が金沢市歴史文化遺産（通称：地域のお宝）に認定されたことを契機として踊りの上演の機会を増やしている。しかしながら恒常的な踊り手の数は少なく、継承が危ぶまれる状況であることに変わりはない。

東原町は2025年1月現在で世帯数41、人口81名の集落である。金沢市「町丁別人口・世帯数」のデータによれば、東原町の人口は1995年から2024年までの30年で171名から80名へと半減していることがわかる（図1＊データは各年度全て4月の数値）。また金沢市「町丁別・年齢5歳階級別人口」によれば、年代別の人口構成は10歳未満0名、10代2名、20代1名、30代2名、40代10名、50代4名、60代15名、70代27名、80代13名、90代7名と、非常に少子高齢化が進んだ集落であることがわかる（2024年時点）。

本プロジェクトは、この状況を踏まえて、東原町に長く受け継がれてきた念仏踊りの継承の現状と問題点を明らかにし、抱える問題の解決の糸口を地域の方々との協働によって見出すことを目的としている。

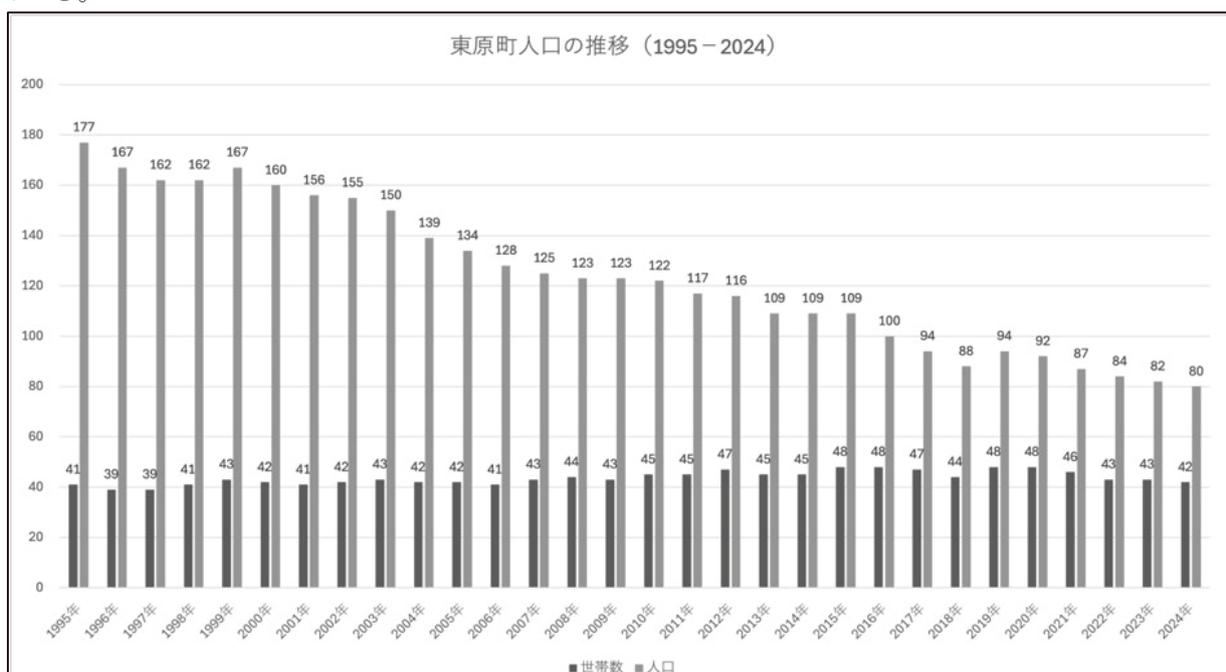


図1 東原町の人口および世帯数の変遷（金沢市「町丁別人口・世帯数」より作成）

### 3. 活動の内容

本プロジェクトでは、「知る」「記録する」「発信する」の三本柱での活動を行った。「知る」の第一段階として、一向一揆に源流を持つ地域の信仰と念仏踊りの起源について学ぶため、三谷文化保護協会代表の中田氏からレクチャーを受け、また三谷公民館で実施された歴史講座に参加した。次に、現在踊りの継承の主軸を担う東原町の林証子氏に念仏おどりの歴史と現状に関する聞き取りを行った。さらに林氏からの紹介により、かつて念仏おどりを踊ったことがある 80 代の住民 3 名への聞き取り調査を行った。次に、毎年三谷小学校で開催されている盆踊り大会で踊られてきた念仏おどりの練習会および盆踊り大会の参与観察（「知る」と、その画像・動画による記録を行った（「記録する」）。以上より抽出した地域の課題を基に、その解決の一助として PR 動画と紙媒体での踊り方のマニュアルを作成した（「発信する」）。

表 1 活動記録（フィールド調査および全体での活動のみ）

日付	内容	参加学生数
6月24日	中田氏より念仏おどりの概要についての講座	7名
7月9日	課題発見のためのワークショップ	7名
7月13日	三谷公民館 歴史講座 参加	5名
7月25日	盆踊り講習会 参加	2名
8月1日	踊り手への聞き取り・盆踊り講習会 参加	6名
8月3日	三谷地区 納涼盆踊り大会 参加・撮影	8名
10月20日	薬師谷公民館での念仏おどり披露 見学	1名
11月16日	東原町集会所にて地域住民への聞き取り調査	3名
12月15日	東原町朝市 訪問	2名



図 2 三谷地区納涼盆踊り大会（2024年8月3日）



図 3 東原町集会所での聞き取り調査  
（2024年11月16日）

### 4. 活動の成果

#### 「知る」「記録する」活動から見える地域の課題

聞き取りの結果、東原の念仏おどりは長らく途絶えていたが、1970年代に学術調査を背景とした復興と再普及を果たしていたことがわかった。また、復興後は「上演」という形で踊られることも多く、本来櫓の周りで踊るものを舞台踊り用に新たにフォーメーションを考案したり、口伝を発掘した歌を

民謡として歌いやすいようにアレンジしたりと、復興と再普及は変化と共にあったことがわかった。

以降、東原町の中心部にある八幡神社で毎年8月の夏祭りに念仏踊りが踊られていたが、人口減少に伴い平成初期に東原町での盆踊りは廃止となる。これを残念に思った当時の三谷公民館館長が三谷地区全体の盆踊り大会で踊ることを提案した結果、現在は三谷地区盆踊り大会の定番曲となっている。

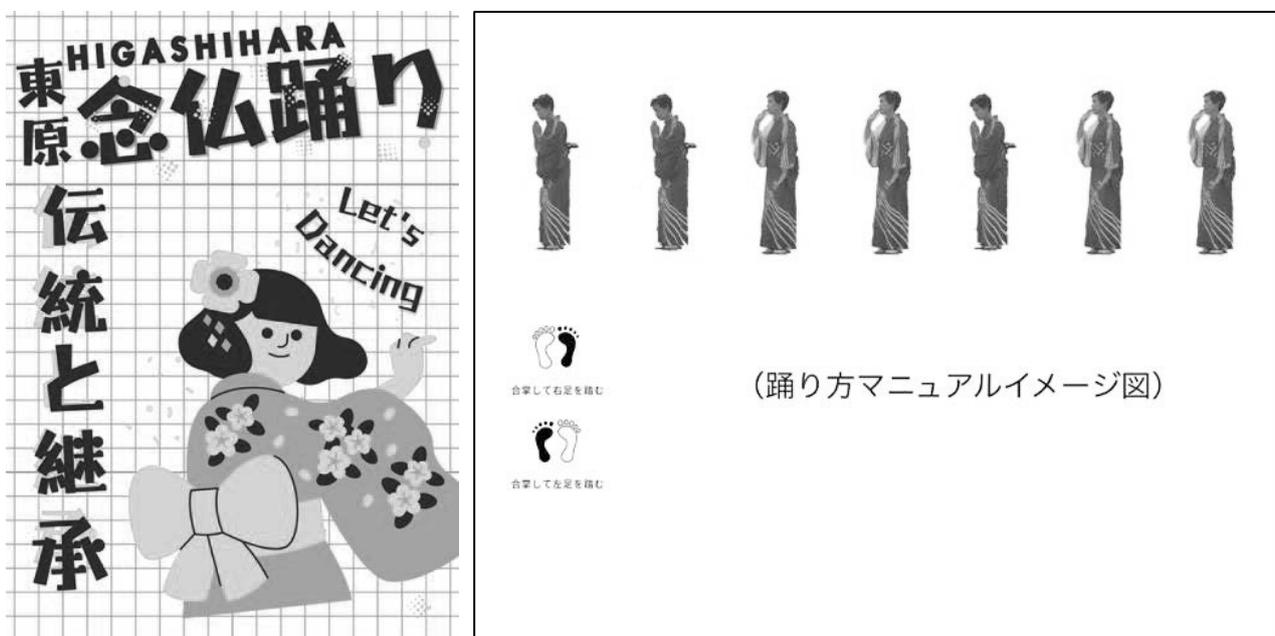
7月25日と8月1日に参加した盆踊り・念仏おどり講習会に参加していた地域の方々にとっては、やはり念仏おどりは「夏祭りでいつも行われている盆踊り」という認識のように見受けられた。他方で、講習会の参加者は高齢の方が多く、10代～20代の若者の姿はほとんど見られなかった。

本番の盆踊り大会には講習会に参加していない方も多く訪れており、盆踊りの時間になると講習会に未参加の方も盆踊りに参加していたが、やはり若い世代の参加がほぼなく、私たちと同年代の地元住民の方に出会う機会もなかった。また、踊りの輪に入る人たちは初めから最後までほとんど変わることがなく、踊りの輪が広がっていくことも見受けられなかった。

### 課題を踏まえ「発信する」

継承をする若い世代が東原町にいなければ踊りを継続していくことは困難であるが、人口減少を根本から解決することは難しい。そこで、東原町から三谷地区に継承範囲が拡大したことを利用し、盆踊り大会が行われる夏の休暇で帰省する若い世代が「楽しい・知りたい・面白い」そして「踊ってみたい」と思えるようなきっかけ作りを手助けする必要があると考えた。

そこで、若い世代が触れやすいSNSに適したPR動画の作成と、盆踊り大会に来た人が踊り方を確認したり、いつでも踊りを見返したりできるような動画への案内機能（二次元バーコードによる）を備えた踊り方マニュアルを作成した（マニュアルは報告書作成時点では製作中）。PR動画は盆踊り大会で撮影した記録動画を素材に、SNS投稿に対応できるような縦長の形式で1分程度の尺に納め、かつてCD収録された音源にアレンジを加えたものを使用している。今後は以下に記すようにこれらを活用した発信と踊りの輪の拡大を図りたい。



踊り方マニュアル（イメージ図）

### 5. 今後の活動計画

冒頭で記したように、三谷文化保護協会では東原念仏おどりの上演機会を今後も増やしていく予定である。継承の担い手の範囲も東原町外に拡大していることから、初めて踊りに触れる人や盆踊り大

会で年に一回しか踊る機会がなかった人々も今後継承者となることが期待されるため、上述の動画および踊り方マニュアルを活用し、継承の一助としたい。

また、助成期間終了後も東原町との活動を継続し、後述するように今後は念仏おどりのみならず、人口が減少する中で失われていく過去の記憶の掘り起こしと継承につながるようなゼミ活動を計画している。

## 6. 活動に対する地域からの評価

集会所で東原町会長様を含めた地域の方々に活動に関してお話ししたところ、念仏おどりのことのみならず、かつての暮らしの様子や使われなくなってしまった言葉など、東原町そのものの記憶の掘り起こしに対して非常に興味を持っていただいた。

また、三谷文化保護協会の中田様からは当初より「発信」こそ不得手とするところなのでぜひやっていただきたいとお声をいただいている。今後も東原町の方々と共に、都市近郊の山間部の暮らしや歴史についての記憶を次世代に継承する活動を続けていきたい。

家庭で始めるエシカル消費の推進

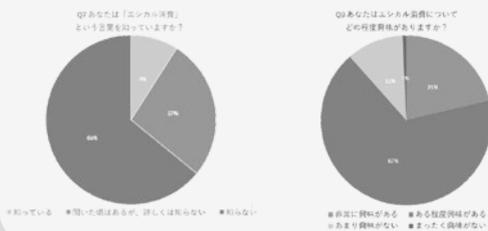
指導教員	北陸大学 教授 志田義寧					
参加学生	4年	石川里奈 山崎愛奈	島谷啓汰	田中大誠	平口夏菜	福村莉央
	3年	荒井夢生	石下安奈	大矢翔太	中出彩斗	中林真子
		西岡春喜	松村隼斗	南野市太郎	森唯人	今坂紗来
		山本咲希	山本隼吾	米田瑛哉	渡邊希樂	渡辺康生
	舒柏涵	張銘耀	潘九恒	馮 鈺	李澤宇	
	安達亜矢	水野あい				
2年	高橋優太郎	瀧中健司	竹原彩加	松瀬遥都	橋本隆之介	
1年	岡部好花	小宮理央				

## 家庭で始めるエシカル消費の推進

SDGs（持続可能な開発目標）に深い関わりを持つ「エシカル消費」の周知を図るために、学習カードゲームを開発、市民向けワークショップを開催しました。また、エシカル消費に関する市民向けアンケート調査も実施。エシカル消費の普及状況を調べるとともに、普及を妨げている要因を探りました。

### 1 アンケート調査の実施

白山市在住・通勤の461人が回答



エシカル消費を「知っている人」は9.1%にとどまった一方で、エシカル消費の概要を説明した上で、その関心度を聞いたところ、88.5%が「興味がある」と回答。一方、生活水準はエシカル消費の意識に影響を及ぼしていなかった。この結果から、やはり周知不足がエシカル消費の足かせになっていることが分かった。

### 2 学習カードゲームの開発



#### ゲームのルール

エシカル消費にプラスの緑色カードとマイナスの赤色カード、ゲームを盛り上げるための黄色カード等で構成。場に置いたカードによってエシカルポイントが増減する。地球のライフがゼロになる前に、10エシカルを貯めたプレイヤーが勝ち。一定のエシカルを貯めるとライフは回復する。

### 3 ワークショップの開催



#### 参加者の声（要約）

「子ども3人を連れて参加。子どもは家でも頂いたカードゲームをしたり、教えて頂いたマークを見つけたりしては喜んでいます。今回、楽しく知ることによって子どもの視野がこんなにも広がるのだなと実感しました。また楽しく知識を入れていきたいです」

次年度は小学校低学年向けカードゲームの開発にチャレンジ！

## 1. 活動の要約

SDGs（持続可能な開発目標）に深い関わりを持つ「エシカル消費」の周知を図るために、学習カードゲーム（図1）を開発、市民向けワークショップを開催した。

また、エシカル消費に関する市民向けアンケート調査も実施。エシカル消費の普及状況を調べるとともに、普及を妨げている要因を探った。

## 2. 活動の目的

近年、人間の活動によって地球温暖化が進んでおり、異常気象の原因となっている。このまま温暖化が進めば、食糧危機や生態系への悪影響など、地球の存続が危ぶまれる事態に発展しかねない。それを防ぐために私たちにできる取り組み、それがエシカル消費である。マイバッグを持ち歩く、環境に配慮した商品を選ぶ・・・日々の暮らしの中で、私たちにできることは沢山ある。しかし、各種アンケート調査をみると、エシカル消費を知っている人はわずかで、その周知は大きな課題となっている。

そこで、本活動では、①市民向けアンケート調査を通じて、エシカル消費の普及を妨げている要因を明らかにする、②楽しみながら学べるコンテンツを開発する、③市民向けワークショップを開催しエシカル消費の普及を目指すことを目的とした。

## 3. 活動の内容

SDGs（持続可能な開発目標）は一般に広く知られているが、この目標に個人の行動からアプローチする「エシカル消費」についてはあまり知られてないのが現状である。本活動に取り組んだ3年ゼミと同好会「メディア・コミュニケーション・ラボ」も同様の状況にあったため、まずエシカル消費に関する勉強会から始めた。

次に、市町村を中心とする地方自治体がエシカル消費の普及を目指してどのような施策を実施しているかを調査した。この結果、エシカルマルシェやエシカルレシピコンテスト、エシカル消費に関する映画鑑賞、エシカルファッションショーなどさまざまな取り組みを実施していることが分かった。

いずれのイベントにも共通しているのが「勉強会」という堅苦しい形式ではなく、市民が気軽に参加できるイベントにしていたことである。このため、私たちの方向性も「楽しく学べる」内容を目指すことにした。

6月20日（木）、学生グループは白山市消費生活センターを初めて訪問し、担当者にこれまでの取り組みや課題等についてヒアリングした（図2）。

この場で「発展途上国の人たちが可哀想という気持ちだけではエシカル消費は続かない」「自分の行動が自分に跳ね返ってくるという意識を持ってもらうことが必要」などの問題意識を共有した。

このため、イベント後も意識を持ち続けてもらう仕掛けをつくる必要があるという結論に至った。

7月以降はイベント内容の検討に時間を費やした。その中でもっとも意見が多かったのが、エシカ

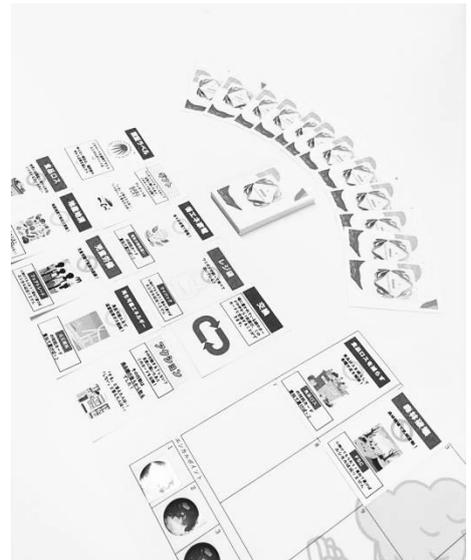


図1 開発した学習カードゲーム



図2 白山市役所でのキックオフ大会

ル消費を学べるゲームの開発である。ゲームであれば「楽しく学べる」という方向性を満たせる上、参加者にゲームを配布して家庭でも遊んでもらうことでイベント後も意識を持ち続けてもらえるはずである。議論の過程ではボードゲームやweb アプリゲームの開発などの案も出たが、最終的にはゲームの自由度が高いカードゲームの開発に落ち着いた。そして9月にβ（ベータ）版が完成した。

同時並行で、アンケート調査の設計も行った。アンケートで明らかにしたいのは、①エシカル消費の認知度、②エシカル消費を知らない人は、内容を知ったら実践するか、③エシカル消費を妨げている要因があるとするなら、どのようなものか、④生活水準とエシカル消費との間に関連性はあるか・・・などの点である。これらを明らかにするために25項目からなるアンケート調査を作成した。

そして、10月17日（木）に白山市役所を再び訪問。担当者にゲームを体験してもらったところ、「面白い。市内の中学校等にも配りたい」と高く評価していただいた。

11月30日（土）、道の駅めぐみ白山でワークショップを開催（図3）。午前と午後の2部制にして、計23人の市民の方にご参加いただいた。当日の様子は、北國新聞と北陸中日新聞に掲載された<sup>1</sup>。参加者の声については「6. 活動に対する地域からの評価」をご覧ください。

なお、カードゲームは12月6日（金）～8日（日）に開催された「2024 学都いしかわ」まちなか芸術祭（大学コンソーシアム石川主催）にも出品している。

一方、アンケート調査は白山市が運用するLINEで10月16日に配信。12月末を締め切りとし、最終的には461人から回答を得た。白山市の人口は11万人程度であり、許容誤差を5%とすると十分なサンプル数が集まったと言える。表1は活動内容をまとめたものである。



図3 ワークショップ案内チラシ

5月	白山市役所訪問（教員）、活動内容のすり合わせ
6月	白山市役所訪問（教員・学生）、勉強会・自治体施策調査
7月	アンケート調査の設計・作成、学習カードゲームのアイデア出し
8月	学習カードゲームのアイデア出し
9月	学習カードゲームβ版完成
10月	アンケート調査実施（12月末まで）、白山市役所で学習カードゲームβ版披露
11月	道の駅めぐみ白山でワークショップ開催
12月	「2024 学都いしかわ」まちなか芸術祭に学習カードゲーム出品
1月	アンケート調査分析、報告書作成

表1 活動内容

#### 4. 活動の成果

ここでは、ワークショップで使用したカードゲームのルールと、アンケート調査の結果について説明する。これまでカードゲームのルールについては触れなかったが、ルールづくりはワークショップ

<sup>1</sup> 2024年12月1日付北國新聞 <https://www.hokkoku.co.jp/articles/-/1591581>  
2024年12月3日付北陸中日新聞 <https://www.chunichi.co.jp/article/994663>

の成否に関わる重要な要素であり、もっとも時間をかけた部分でもある。

複雑なルールにしたらゲームは面白くないし、二度と手に取ってもらえない。かといって単純にし過ぎると、メッセージが伝えられないリスクがある。エシカル消費の精神をカードにどう反映させていくか、まさに腐心した点でもある。

ルールづくりでこだわったのは以下の5点である。

- ① ゲームをスムーズに行うために、カードの情報量（文字数）はなるべく少なくする
- ② エシカル消費と反エシカル消費的な行動を直感的に理解できるようにする
- ③ エシカル消費を意識しないと地球が滅亡に向かっていく要素を盛り込む
- ④ 自分の行動（カード）だけでなく、他人の行動にも関心を持ってもらう要素を盛り込む
- ⑤ ゲームを盛り上げるために「運だめし」の要素を取り入れる



図4 エシカル消費学習カードの一例

そして、完成したカードゲームの概要は以下の通りである。カードはエシカル消費にプラスの緑色カードとマイナスの赤色カード、ゲームを盛り上げるための黄色カード等で構成（図4）。

手札は2枚。場に置いたカードによってエシカルポイントが増減する。地球のライフは5からスタートし、1周ごとに1減る。

何もなければ5周で地球は滅亡するが、一定のエシカルポイントを貯めるとライフは回復する。地球のライフがゼロになる前に、10 エシカルを貯めたプレイヤーが勝ちとなる。

これが基本的なルールであるが、場に置かれたカードにも関心を持ってもらうために、例えば場にある「電気の無駄遣い」に自分が持つ「省エネ家電」を重ねればエシカルが2倍もらえるといった仕掛けもつくった。ワークショップは参加者全員から「非常に満足」「役にたった」という評価をいただいた。

一方、調査アンケートに関しては、エシカル消費を「知っている人」は9.1%にとどまり、「聞いたことはあるが、詳しくは知らない」「知らない」は90.9%にのぼった。次にエシカル消費の説明をした上で、その関心度を聞いたところ、「非常に興味がある」と「ある程度興味がある」が88.5%にのぼった（図5）。

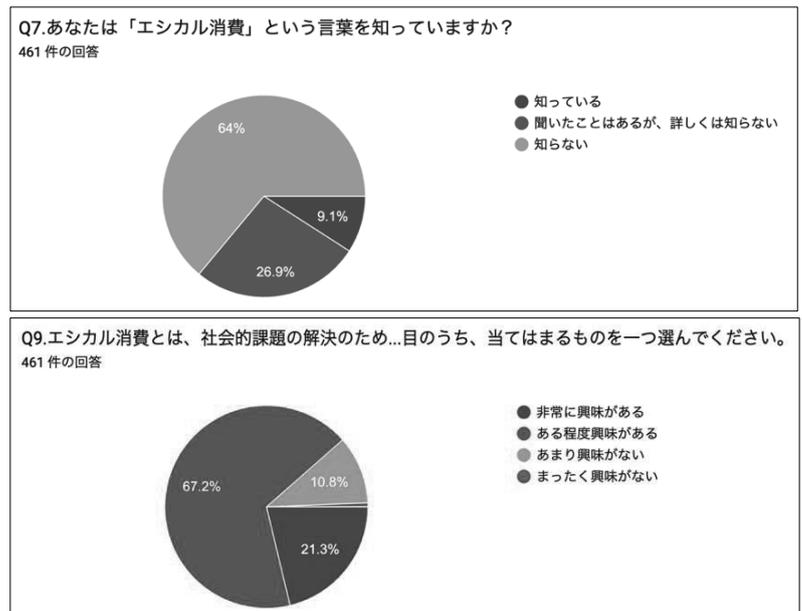


図5 エシカル消費の認知度や関心度

この結果から、市民はエシカル消費のことを知らないが、知ったら興味を持ってもらえる可能性が高いことが分かった。

生活水準とエシカル消費との関係については、明確な関連性は見られなかった。生活にゆとりがある人はそうではない人に比べ、エシカル消費に意欲的との仮説を立てていたが、有意な差はなかった。この結果、エシカル消費を妨げている要因は、やはり周知不足という結論に至った。

## 5. 今後の活動計画

来年度も白山市と共同でエシカル消費の普及活動に取り組む方向で話を進めている。具体的には、カードゲームをβ版から完成版にバージョンアップさせるとともに、新たに小学校低学年向けのカードゲームを作成する予定である。これは、ワークショップ参加者のほとんどが子連れだったことを踏まえ、子どもがより直感的に理解できるゲームを開発する必要があると判断したためである。また、今年度1回だったワークショップを数回開催することも検討したい。

## 6. 活動に対する地域からの評価

活動に対する地域からの評価については、道の駅めぐみ白山で開いたワークショップ（図6）参加者の感想をもって代えさせていただきたい。この声が今回の活動の成果を物語っていると判断している。以下、感想。

「子ども3人を連れて参加しました。上2人は小学3年生、年長児だったのですが、家に帰ってからも頂いたカードゲームをしたり、教えて頂いたマークを見つけたりしては喜んでいます。少し難しいかな？と思って参加しましたが、子どもは楽しいと思えたらそ

れを少しずつ覚えていくのかなと感じました。親の私は勝手に難しいと先入観を持っていたのですが、子どもにとっては難しいという感覚はなく、どんなに難しくても好きなことはするしゲームも興味があったら難しくてもやりますよね。（略）今回、楽しく知ることによって子どもの視野がこんなにも広がるのだなと実感しました。家で教えると勉強感が強くなって「そうなんだ」だけで終わりそうですが、イベントで子どもたちにも「あの時、大学生のみなさんとエシカル消費について遊んで楽しかったなあ」と楽しい記憶が残るのでとても良かったです。（略）まだまだ行動できないこともありますが、知っているか知らないかだけでも違うと思いますので、またカードゲームをしてエシカル消費について楽しく知識を入れていけたらいいなと思っております。（略）」



図6 道の駅で開催したワークショップの様子

# 復興課題粹



## 被災高齢者等の健康管理

指導教員 石川県立看護大学 教授 垣花渉  
講師 佐能唯

参加学生 4年 中島いまり 山崎瑛仁 加藤月菜 光澤早弥花

本活動は、垣花渉ゼミナールの中島いまり、山崎瑛仁、加藤月菜、光澤早弥花が中心的な役割を担うとともに、活動を支援したいと申し出のあった以下の学生によって行われた。

4年	宮崎可奈子	田中佐和	林ゆりな	松浦吏歩	細川和愛
	森夏希	八日市遥奈	矢口実夏	尾田和輝	久保川力有
	菰池真麻	高橋愛結	西森筒哉		
3年	高幸紀心	中村真彩子	鹿野朱里	竹中那琉世	門田莉子
	石川真愛	矢口雅	神近瑞歩	下南智也	木村彩乃
	清水幸紀	堂前更紗	宮下莉子	森蔦朋	中川泉月
2年	竹内咲季	高本彩乃	高未琴	俵茉衣香	寺山咲良
	大西萌加				
1年	小川さくら	中橋伊織	田丸佳歩	寺本彩加	大門湮奈
	森田ほの香				

### 令和6年能登半島地震で被災されたみなさま、支援に関わるみなさま

このたびの震災により被災されたみなさまへ、心よりお見舞い申し上げます。  
被災地で復旧・復興活動にご尽力されているみなさまへ、深い敬意を表しますとともに、被災地の一日も早い復旧・復興を、心からお祈り申し上げます。  
私たちゼミも、微力ながら被災地の支援に関わり続けたいと思っております。

謝辞：

次の各種団体のみなさまに感謝申し上げます。

- ・ 穴水町役場 子育て健康課
- ・ 穴水町住吉公民館
- ・ 石川県立穴水高等学校
- ・ 松本市炊き出し隊 みらい
- ・ 光塩ネットワーク @特定非営利活動法人ホープ 地域活動支援団体
- ・ フットセラピー SPIRO
- ・ NPO 法人 海津市防災士会
- ・ 末日聖徒 イエス・キリスト教会

# 被災高齢者等の健康管理



石川県立看護大学 垣花渉 ゼミナール

能登半島地震で被災した住民が抱える課題に、「人と人のつながりの再興」があった。ゼミは行政や住民と連携し、被災高齢者の健康を支援する活動を起ち上げた。活動はゼミ主体で始まったが、活動の成功をきっかけに住民主体のものへ移行した。その過程で、住民同士のつながりは再興され、地域に活気が戻り始めている。

## 【活動内容】

### ◆ 避難所生活の実態把握(2月)



図1. 段ボールで作られた避難スペース

図2. 血圧測定や体調把握

ゼミは、地震の発災から50日後、穴水町B地区の避難所を訪れた。段ボールベッドを敷いた避難スペースで約20人が共同生活をしていた(図1)。ゼミは穴水町の保健師から依頼を受け、B地区の避難所およびその周辺地域において、住民の健康を支援する活動にあたった。避難所では、血圧測定、体調把握、薬の服用確認、洗髪、および話しの傾聴の役割を担った(図2)。

### ◆ 生活不活発病を防ぐ文献研究(3月)

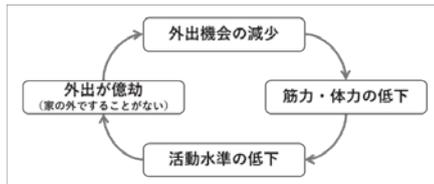


図3. 外出の減少が生活不活発病を招く仕組み



図4. 筋力強化の体操指導

文献から被災者の身体活動を促すことの重要性を認識、筋力強化の体操を避難者と一緒に行った(図4)。

### ◆ 健康チェック・健康講話(4月)



図5. 筋肉量の測定

図6. 身体活動を促す健康講話

学生は、高齢者のサルコペニアを診断するために、握力、10m歩行速度、筋肉量、およびフレイル・インデックスを測定した(図5)。教員は、座り続ける生活が生活機能の低下を招くこと、家事など日常生活で身体を動かす機会を意識的にもつことを講義した(図6)。

## 【活動成果】

### ◆ 住民主催、ゼミ共催で開かれた復興文化祭



### ◆ ニュースポーツによる交流(6月)



図7. モルックを住民と学生と一緒にプレイ

図8. モルックを終えて住民と学生で会食

モルックは誰でも楽しめるスポーツであり、公民館に笑顔と歓声があふれた(図7)。会食会では、再会を喜ぶ話が弾んだ(図8)。

### ◆ 祭りによる交流(7月)



図7. お抹茶でおもてなし

図8. ハンドマッサージによる傾聴

七夕や復興支援の祭りを学生と住民の協働で開催した。祭りをとおして住民同士の再会が図られた。

### ◆ 健康づくりによる交流(8~10月)



図9. リラクゼーションのためのストレッチ体操

図10. 教員による健康教育

住民は少しずつ元気を取り戻し、健康づくりの企画や運営にも関わることができるようになった。学生と住民の交流の場が賑やかになってきた。



図10. 学生による介護予防体操

## 1. 活動の要約

能登半島地震で被災した住民が抱える課題に、「人と人のつながりの再興」があった。ゼミは行政や住民と連携し、被災高齢者の健康を支援する活動を起ち上げた。活動はゼミ主体で始まったが、活動の成功をきっかけに住民主体のものへ移行した。その過程で、住民同士のつながりは再興され、地域に活気が戻り始めた。次年度の課題は、地域の潜在的な力を引き出す環境を整えることである。

## 2. 活動の目的

私たちゼミは、研究者・専門職者・学生と住民が協働する参加型の地域健康づくりを15年以上にわたって展開している。得た知見は、「研究者や専門職者は地域やコミュニティがもつ潜在的な力を引き出すとともに、それを発揮する条件や環境をつくること（以後、コミュニティ・エンパワメント）が住民の健康を維持・増進させる」である。2024年能登半島地震の被災地に最も近い高等教育機関にある私たちゼミは、上記の知見を生かして住民の健康の回復・維持に寄与することを活動の目的とした。

## 3. 活動の内容

### (1) 避難所生活の実態把握

ゼミは、地震の発災から50日後の2月20日、穴水町B地区の避難所を訪れた。避難者は、指定避難所の小学校の教室を間借りし、段ボールベッドを敷いた避難スペースで約20人が共同生活をしていた（図1）。ゼミは穴水町の保健師から依頼を受け、B地区の避難所およびその周辺地域において、住民の健康を支援する活動にあたることになった。

避難所では、血圧の測定、体調の把握、薬の服用の確認、洗髪、および話しの傾聴の役割を担った（図2）。血圧測定では、血圧手帳の値よりも高い値を示す者がほとんどであった。被災者の話しでは、家屋の倒壊や病院の閉鎖により常備薬が底をつき、薬の服用が滞っているとのことであった。余震が不安で夜中に何度も目を覚まし、睡眠を満足に取れないと話していた。

被災者の運動不足を解消するため、保健師を中心に被災者へラジオ体操や筋力強化の体操を促していた。保健師の話では、定期的に運動に取り組む避難所とそうでないところがあるとのことであった。被災者の話しでは、一日の行動は食べる、テレビを見る、寝るしかないということであった。余震が続き、道路の地割れが至るところにあるため、外出は容易でなく仲間と会うこともままならないということであった。

### (2) 震災と生活不活発病の関係に関する文献研究

高齢者の場合、災害に伴い運動や生活活動が不活発になると、こころと身体の機能が低下して動けなくなること（以後、生活不活発病）が知られている。

生活不活発病の発生メカニズムを、図3に示した。



図1. 段ボールで作られた避難スペース



図2. 学生による血圧測定や体調把握

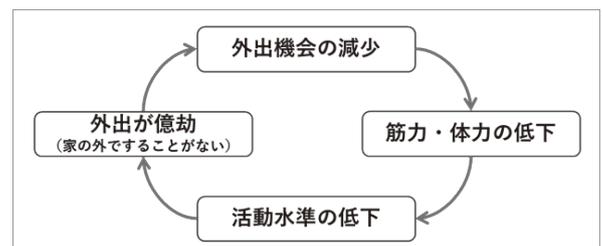


図3. 外出の減少が生活不活発病を招く仕組み

震災でコミュニティが崩壊し、住環境や家族構成が大きく変化すると、被災者の外出が減り、筋力や体力の低下を招く。その結果、被災者の活動水準は低下し、外出が億劫になり、住民の交流の場が失われ、ますます外出の機会が減るという悪循環を引き起こす。したがって、生活不活発病の予防には、外出を促す個人への支援とともに、地域やコミュニティの活動力を回復させる支援が重要となる。

震災により滞ったサロン活動（住民同士が交流を図りながら、保健の専門職者が健康または日常生活に関する相談に応じる機会）の再開を研究者が支援した取組<sup>1</sup>では、住民同士のつながりを復活させたことが健康を害した個人の発見および支援に役立った。被災地でのサロン活動を調査した研究<sup>2</sup>は、サロン活動に参加した高齢者の生活活動量、栄養状態、およびQOLは一般高齢者のそれらとほぼ同等に保たれたことを明らかにした。その理由を調査研究は、サロン活動を住民主体で行ったことにより、住民同士の交流が保持され、介護予防としての運動が促進されたためであると推察した。

### (3) “健康カフェ” 起ち上げ

ゼミは、避難所生活の実態把握とともに文献研究を行った結果、被災したコミュニティへの支援の重要性を認識した。そのために、B地区の避難所を頻回に訪れ、被災高齢者の健康チェックおよび体操指導にあたった（図4）。そのなかで、ゼミはコミュニティ・エンパワメントが被災高齢者の健康を回復・維持させるという研究仮説を立てた。

コミュニティ・エンパワメントの構築には、地域やコミュニティとの信頼関係が不可欠である。ゼミは、被災者の話しを傾聴するとともに、住民への健康支援策について保健師と意見交換を重ねた。その過程で、B地区のサロン活動が震災を機に滞っていることを知った。ゼミはB地区の公民館と連携し、学生が被災者との交流をとおして心身のケアにあたること（以後、健康カフェ）をサロン活動に代わるものとして起ち上げることを提案した。



図4. 筋力強化の体操の指導

### (4) 健康チェックおよび健康講話

4月29日と30日に、第1回健康カフェを開催した。学生は、高齢者のサルコペニアを診断するために、握力、10m歩行速度、筋肉量、およびフレイル・インデックスを測定した（図5）。教員は、座り続ける生活が生活機能の低下を招くこと、家事など日常生活で身体を動かす機会を意識的にもつことを講義した（図6）。「スモールチェンジ・アプローチ」（毎日続けられる小さな行動から始め、それを継続できるようになったら行動の量や質のレベルを少しずつあげ、自己効力感を高める健康法）を、資料を用いて説明した。併せて、身体を動かすことを促すために、参加者へ歩数計を貸し出した。学生は、行動変容を参加者へ促すために、行動目標を立てることを支援した。そして、1ヶ月にわたり行動の記録をつけることを伝えた。最後に研究者は、座って行える筋力アップ体操に参加者と一緒にいき、体操の継続を働きかけた。被災地で住民の健康づくりが始まったことを、NHKの全国版ニュースが報じた。



図5. 筋肉量の測定



図6. 身体活動を促す健康講話

### (5) 健康支援活動の模索

5月になり、B地区の避難所は閉鎖され、避難所から仮設住宅

へ移動した人もいれば、被災した自宅へ戻ることを余儀なくされた人もいた。公民館で頻りに開催されていた交流行事は、震災から途絶えたままであった。ゼミは、住民と会話するなかで、震災により人のつながりが切れてしまっている寂しさを口にする高齢者と何人も出くわした。教員は、住民の様子を見聞きするなか、安定しない生活環境により住民の関心は健康づくりにまで及ばないことを感じ取った。ゼミは、健康支援活動を推進するうえで、「住民同士の交流の再興」がB地区に潜む喫緊の課題であることを認識した。

2回目以降の健康カフェでは、住民同士の交流を図る内容へ切り替えた(図7・8)。モルックは老若男女に関係なく楽しめるスポーツであり、学生と高齢者は一緒にプレーした。大広間に笑顔と歓声があふれ、高齢者はプレーに熱中した。

月に1回ほどの健康カフェをくり返した結果、企画や運営の役割に住民も少しずつ関わるよう変容した(表1)。昼食の炊き出し、指圧やマッサージ、減塩指導、スタンプラリーなどに住民ボランティアが参画したことにより、これまでの健康カフェよりも賑やかとなった。

表1. 健康支援活動の内容を記したプロセス評価表

時期	イベント	参加者数	住民および学生の動き	教員による支援
4月下旬	第1回健康カフェ	学生10人 教員1人 住民32人	住民の行動変容への働きかけ(学生)、健康教育を体験(住民)	健康講話、筋力強化の体操を指導、歩数計を配布
5月下旬	仮設住宅訪問	学生2人 教員1人 住民2人	暮らしの様子を聞き取り・健康カフェ参加を呼びかけ(学生)	暮らしの様子を聞き取り
5月下旬	活動報告	学生4人 教員1人	避難所訪問や健康カフェの取組を大学の講演会で報告(学生)	
6月上旬	第2回健康カフェ	学生7人 教員1人 住民20人	健康測定・モルックを指導(学生)、会食会を体験(住民)	ニュースポーツ体験を提案
7月上旬	第3回健康カフェ	学生14人 教員1人 住民約70人	健康測定・七夕の飾りつけ・お茶会・体操(学生、住民)	筋力強化の体操指導、健康講話
7月中旬	復興イベント	学生約40人 教員2人 住民150人	屋台・受付・ハンドマッサージ、子ども縁日、お茶会(学生、住民)	健康測定、活動的は生活を助言
8月中旬	第4回健康カフェ	学生3人 教員1人 住民13人	健康測定・かき氷のふるまい・体操(学生、住民)	ストレッチ体操を指導、健康講話
8月下旬	子ども支援イベント	学生5人 住民100人	イベント支援(学生)	
10月上旬	第5回健康カフェ	学生4人 教員1人 住民22人	会場設営(住民)、健康測定・健康講話・ハンドマッサージ(学生)	参加者の表情やしぐさを見守り



図7. ニュースポーツによる住民交流



図8. ハンドマッサージによる傾聴

11月上旬	第6回 健康カフェ	学生5人 教員1人 住民100人	会場設営・司会進行・各種演出(住民)、健康測定・介護予防体操、脳トレゲーム(学生)	参加者の表情やしぐさを見守り
-------	--------------	------------------------	---	----------------

#### 4. 活動の成果

健康カフェの継続による成功体験をきっかけに、公民館職員や住民から活動への前向きな意見が出るようになった。震災で延期となった町の文化祭に代わるイベントをB地区で開きたい、という意見があがった。公民館職員は文化祭の企画案とチラシをつくり、地域団体や住民へ参加を呼び掛けた。

青年団と子供会は連携し、地元で伝わる獅子舞を披露することを決めた。食生活改善委員は、100食分の炊き出しを担当することになった。公民館職員、学生、地域団体の代表者は会議を重ね、文化祭の企画を練り上げた。文化祭では、公民館職員と学生が司会を務め、地域団体は練習を重ねた歌・舞踊・踊りの技を披露した。参加した子どもから高齢者まで100名の笑顔が会場にあふれた(図9)。



図9. 住民主体の文化祭 (a. 学生による介護予防体操、b. 大人による民謡披露、c. 子どもによる獅子舞)

#### 5. 今後の活動計画

震災で崩れかけたコミュニティは少しずつではあるが元に戻りつつ、地域として良い方向に向かってきていると感じられた。コミュニティが整うことで、次第に、住民の日常生活も、少しずつであるが、戻っていくのではないかと考えられる。今後も引き続きB地区と関わるなかで、B地区独自の支援方法を模索していきたい。

また、「一緒に活動をしたい」という前向きで被災地のことを思いやる支援者の声を大切に、「支援の和」を広げていきたい。

#### 6. 活動に対する地域からの評価

ゼミの皆様には発災まもなくして、地区の実態把握に携わっていただき、避難所の様子や対応が必要な住民の情報を共有する等のご支援をいただいた。

また、少しずつコミュニティが整いつつある中でも、月1回の健康カフェでゼミの皆様と会い、健康づくりの知識を習得するのを心待ちにしている住民の様子が窺えた。ゼミの皆様の今後の活動予定に感謝申し上げたい。(穴水町子育て健康課 黒田のりこ)

#### 引用・参考文献

1. 本谷亮, 2013, 東日本大震災被害者・避難者の健康増進, 行動医学研究 19(2), 68-74.
2. 大和田宏美, 村上賢治, 森永雄ら, 2021, 被災地域在住高齢者の生活活動量とサルコペニアおよびQOLに関する調査研究, 研究紀要青葉 seiyo 13(1), 65-74.

キリコ祭り（秋祭り）の文化の継続・継承

指導教員 石川県立大学 准教授 長野峻介  
金沢大学 博士研究員 小林秀輝

参加学生 石川県立大学  
大学院 澤田真優  
4年 小林優椰 野田龍斗 松本爽楽  
3年 黒田雄斗 城ヶ端扶  
1年 竹内隆晟 高橋柊生

珠洲市粟津地区のみなさんに心より感謝申し上げます

**がんばろう能登！ がんばろう石川！**

# キリコ祭り(秋祭り)の文化の継続・継承

石川県立大学 澤田 真優・小林 優椰・松本 爽楽・野田 龍斗・黒田 雄斗・城ヶ端 扶・竹内 隆昆・高橋 柊生  
指導教員 石川県立大学 長野峻介 金沢大学 小林秀輝

## 背景

- キリコ祭りは、能登半島の約200地区で開催され、生活に祭りが溶け込み、それぞれ地区独自の形態で行われる多様性などが、高い文化的な価値として、日本遺産にも認められている
- これまでの歴史の中で祭りを変化させながら、それぞれの地域の独自性をつくりあげてきた
- しかし、過疎化や高齢化によって祭りの維持が年々困難になってきており、「縮小」や「廃止」も選択肢として、新たな祭りの変化を迫られている
- 粟津地区では、これまで大学生の祭りへの参加を受け入れるなど先進的な取り組みを行い、地区の若手粟津自彊団を中心に、祭りの“継続”を選び、その方法を模索している
- ただし、担ぎ手として学生が祭り当日に参加するのみで、学生と地域との関係が限定的なものである、など課題がある

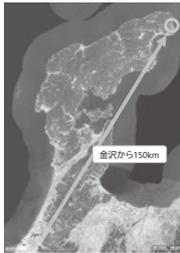
## キリコ祭り

- 能登半島一円で、7～10月に開催
- 「キリコ」と呼ばれる巨大な灯籠(御神灯)を担いで練りまわる。最大のもので約2t、高さ15m
- 能登半島全体 約200地区で開催
- あばれ祭り(能登町)、輪島大祭(輪島市)などが有名であり、地区ごとに意匠や趣向に特徴がある
- 日本遺産に認定:「灯(あかり)舞う半島 能登～熱狂のキリコ祭り～」



## 珠洲市三崎町 粟津地区

- 能登半島 最先端の静かな農村集落
- 約60世帯
- トキの放鳥モデル地区のひとつ
- 粟津の片姫神社の秋季祭礼としてキリコ祭りを毎年9月12日に開催
- 過疎化・高齢化の最先端



## 粟津自彊団

- 古くから地区に存在する組織
- 団長をはじめ10数人の組織
- 高校卒業後～40代まで地域住民
- 昔は選ばれた人のみ所属、地域の後継者を育成する場
- 祭りを中心とした地区行事の運営を担う



## 令和6年1月1日 能登半島地震

- 能登半島地震により粟津地区は家屋の倒壊など極めて甚大な被害を受けており、今後の祭りの開催を見通すことが難しくなった
- この先、長期に及び避難生活や転出者の増加などが予想され、地域コミュニティが危機に瀕している
- 奇跡的にキリコ自体は損壊を免れたが、祭りは地域コミュニティの繋がりを強めるソーシャル・キャピタルとして重要なものであり、地域コミュニティの復興のためには祭り文化や精神を継承することは欠くことではない



## まとめ

- 能登半島地震により甚大な被害が出た粟津地区では、今年度の祭りで神輿渡御、キリコ巡行が中止された。祭り文化の継承が危機に瀕する中で、祭り本番とは異なる場ではあるものの、お囃子を演奏・披露し、粟津地区や祭り文化を継承・発信する機会を持つことができた。
- 本年度の活動および、これまで3年間の活動成果によって蓄積しとりまとめたアーカイブ資料やノウハウ、テキストを活用することで、今後も学生が祭り本番や祭り文化を発信する機会に関わることができ、地域の方々の祭り文化の継承を支援することができるようになった。
- 能登半島地震や豪雨災害の被害は甚大であり、今後の粟津地区の復興には長い時間を要することが考えられる。祭りは地域コミュニティの繋がりを強めるソーシャル・キャピタルとして重要なものであり、地域コミュニティの復興のためには祭り文化や精神を継承することは欠くことではない。粟津地区や地域コミュニティの復興に寄与するために、今後も地域と学生が連携した支援活動を継続していきたい。

## 目的

- キリコ祭りの文化継承のため、大学の持つ人的・物的資源を活用して
  - 外部人材と継続的・発展的に連携する仕組み作り
  - 祭りのアーカイブ化、ノウハウの蓄積・継承

## オンラインによる勉強会

- 珠洲と石川県立大学とをオンラインツールで結び、定期的を実施
- 粟津地区やキリコ祭りについてのレクチャー、これまで粟津地区の祭りに参加した経験のある学生による経験談、現地活動の準備等を行った
- 実施日:6/13、6/27、7/11、7/25、8/8、8/29



## 粟津片姫神社秋季祭礼に参列

- 片姫神社秋季祭礼に参列した。例年、神輿とキリコが地区内の家々を巡る神輿渡御・キリコ巡行が執り行われるが、能登半島地震の影響で中止となった
- 片姫神社での神事のみとなり、学生は地域住民の方々とともに参列し餅をお供えし、祭礼の終了後は直会をいただいた
- 実施日:9/12



## 被災した水田で稲刈り支援活動

- 9月に発生したはる奥能登豪雨により、粟津地区では稲刈り直前の水田が冠水する被害が生じた。
- 地震の被害で排水性が低下しぬかるんだ水田では機械による稲刈りができない状況であったため、人力での稲刈り作業の支援活動を行った
- 実施日:9/26、9/27



## お囃子の稽古

- 大学祭でのお囃子のステージ披露にむけて、キリコ祭りの太鼓と篠笛のお囃子の稽古を重ねた
- これまでに撮影したお囃子や祭りの動画資料を用いて稽古した。また、篠笛の演奏には学生が制作した塩ビパイプ製の篠笛を用いた
- 実施日:10/7、10/10、10/11、10/15、10/17、10/18、10/22、10/24、10/25



## 大学祭でお囃子のステージ披露 および粟津産新米の販売

- 石川県立大学の大学祭において、祭りのお囃子をステージ披露した
- 粟津自彊団のメンバーとともに太鼓を叩き篠笛を奏で、学生は稽古の成果により堂々とした演奏ができ、自彊団はさらにリズムカルで迫力ある演奏を披露、ステージは好評を博した
- また、粟津のキリコ祭りを撮影した写真のパネル展示とともに、粟津産の新米の販売を行った
- 実施日:10/26、10/27



## お囃子の稽古テキストの作成

- 大学祭でのステージやそれまでの稽古をふりかえり、お囃子各曲の構成や稽古手順、学生が気づいた稽古のポイントなどをテキストとしてまとめた。
- 実施日:11/8、11/22



## 地域と外部人材との連携のために

- 本活動は粟津自彊団の尽力によるところが大きい
- 地域と外部人材との継続的な連携には、地域側に外部人材の受け入れに理解があること、そして実際に受け入れの経験とノウハウを蓄積していくことが重要
- 粟津地区自彊団の濱山隆浩さんからのコメント
  - 地震の影響で神輿渡御がなく練習の成果を地区では披露できなかったが、県立大学の大学祭で自彊団の団員と学生が太鼓と篠笛の演奏で共演できて良かった。今年または来年以降で祭りがある際は珠洲に来て参加してもらいたい。また成果を使って、いろいろな人に珠洲の粟津で行われている祭りに関する事を伝えてもらいたいです。



## 1. 活動の要約

本活動では、珠洲市三崎町栗津地区のキリコ祭り（秋祭り）の文化の継続・継承をテーマとし、外部人材と継続的に連携する仕組み作りと祭りのアーカイブ化を目的としている。今年度は活動3年目であり、栗津地区の方々の意向を踏まえながら、祭り文化の継承と地域コミュニティの復興に寄与するため、次のような活動を実施した。

オンラインツールを活用して学生が地域住民と交流して地域や祭りについて学ぶ機会の創出、片姫神社秋季祭礼への参列、9月に発生した奥能登豪雨で被災した水田での稲刈り支援活動、これまでに撮影したお囃子や祭りの動画資料を用いたお囃子の稽古、大学祭での学生と地域の方々によるお囃子のステージ披露および栗津産新米の販売、お囃子の稽古テキストの作成などが含まれている。

能登半島地震の影響で今年度の祭礼では神輿・キリコの巡行は行われなかったが、学生が祭り文化を学び習得し、地域の方々と一緒に披露することができ、祭り文化を絶やさず継承するためのアーカイブ資料、ノウハウ、テキストをとりまとめることができた。

## 2. 活動の目的

能登各地に残るキリコ祭りは日本遺産にも認定されており高い文化的価値を認められているが、将来への継承が課題となっている。本活動が対象とする珠洲市三崎町栗津地区のキリコ祭りも、過疎化や高齢化によって祭りの維持が年々困難になってきている。

栗津地区では、地域外から大学生の祭りへの参加を受け入れるなど先進的な取り組みを行い、地区の若手を中心に祭りの継続方法を模索しているが、学生と地域との関係が祭り当日を中心とした限定的なものである等、様々な課題がある。

そこで、祭りの継承のため、外部人材と継続的に連携する仕組み作りと祭りのアーカイブ化を、大学の持つ人的・物的資源を活用してサポートすることを本活動の目的とする。

## 3. 活動の内容

活動3年目である本年度の主な活動は以下のとおりである。

### ・オンラインによる勉強会

栗津地区と石川県立大学とをオンラインで結び、勉強会を定期的実施した。勉強会では、栗津地区やキリコ祭りの概要について栗津地区の担当者からレクチャーを受けたり、これまで栗津地区の祭りに参加したことのある学生に経験談を話してもらったり、現地活動の準備等を行った。

実施日：6/13、6/27、7/11、7/25、8/8、8/29

### ・栗津片姫神社秋季祭礼に参列（写真1）

毎年9月12日に開催される栗津地区の片姫神社の秋季祭礼に参列した。例年、神輿とキリコが地区内の家々を巡る神輿渡御・キリコ巡行が執り行われるが、能登半島地震の影響で中止となった。そのため、片姫神社での神事のみとなり、学生は地域住民の方々とともに参列し榊をお供えし、祭礼の終了後には直会をいただいた。

実施日：9/12

・9月に発生した奥能登豪雨で被災した水田での稲刈り支援活動（写真2）

令和6年1月の能登半島地震につづき9月には奥能登豪雨が発生し、栗津地区では稲刈り直前の水田が冠水する被害が生じた。地震の被害で排水性が低下しぬかるんだ水田では機械による稲刈りができない状況であったため、人力での稲刈り作業の支援活動を行った。

実施日：9/26、9/27

・お囃子の稽古

大学祭でのお囃子のステージ披露にむけて、キリコ祭りの太鼓と篠笛のお囃子の稽古を重ねた。これまでに撮影したお囃子や祭りの動画資料を用いて稽古した。また、篠笛の演奏には学生が制作した塩ビパイプ製の篠笛を用いた。

実施日：10/7、10/10、10/11、10/15、10/17、10/18、10/22、10/24、10/25

・大学祭でお囃子のステージ披露および栗津産新米の販売（写真3、4）

石川県立大学の大学祭において、祭りのお囃子をステージ披露した。栗津自彊団のメンバーとともに太鼓を叩き篠笛を奏で、学生は稽古の成果により堂々とした演奏ができ、自彊団はさらにリズムカルで迫力ある演奏を披露しステージは好評を博した。

また、栗津のキリコ祭りを撮影した写真のパネル展示とともに、栗津産の新米の販売を行った。

実施日：10/26、10/27

・お囃子の稽古テキストの作成

大学祭でのステージやそれまでの稽古をふりかえり、お囃子各曲の構成や稽古手順、学生が気づいた稽古のポイントなどをテキストとしてまとめた。

実施日：11/8、11/22



写真1 祭礼への参列



写真2 豪雨で被災した稲刈り作業支援



写真3 大学祭でのお囃子ステージ



写真4 栗津産新米

#### 4. 活動の成果

能登半島地震により甚大な被害が出た栗津地区では、今年度の祭りで神輿渡御、キリコ巡行が中止された。祭り文化の継承が危機に瀕する中で、祭り本番とは異なる場ではあるものの、お囃子を演奏・披露し、栗津地区や祭り文化を発信する機会を持つことができた。

今年度の活動では、このような活動を地域外の学生たちが地域住民とともに実現できたことに大きな意義があると考えられる。ただし、従来の目標としていたアーカイブ資料のさらなる収集は、能登半島地震の影響は大きく十分に達成することができなかった。

また、学生がお囃子を稽古する際には、これまでに収集したお囃子や祭りの動画資料を活用した。

栗津地区とよく似たお囃子を演奏する隣地区の楽譜資料も参考にしたが、楽器演奏の経験がない学生がほとんどであるため、楽譜資料を見て演奏することは難しかった。稽古では動画資料を繰り返し見て覚え、動画と合わせて演奏することが最も有効な方法であった。

また、西洋音楽とは異なる独自の間や拍子があるため、五線譜の楽譜では読み取れないものがあると感じた。さらに、お囃子各曲の構成や稽古手順、学生が気づいた稽古のポイントなどをテキストとしてまとめた。

本年度の活動および、これまで3年間の活動成果によって蓄積しとりまとめたアーカイブ資料やノウハウ、テキストを活用することで、今後も学生が祭り本番や祭り文化を発信する機会に関わることができ、地域の方々の祭り文化の継承を支援することができるようになった。

## 5. 今後の活動について

能登半島地震や豪雨災害の被害は甚大であり、今後の粟津地区の復興には長い時間を要することが考えられる。祭りは地域コミュニティの繋がりを強めるソーシャル・キャピタルとして重要なものであり、地域コミュニティの復興のためには祭り文化や精神を継承することは欠くことはできない。

粟津地区や地域コミュニティの復興に寄与するために、今後も地域と方々と学生が連携した支援活動を継続していきたい。

## 6. 活動に対する地域からの評価

粟津地区自彊団の濱山隆浩氏から、以下のような評価をいただいた。

「地震の影響で神輿渡御がなく練習の成果を地区では披露できなかったが、県立大学の大学祭で自彊団の団員と学生が太鼓と笛の演奏で共演できて良かった。今年または来年以降で祭りがある際は珠洲に来て参加してもらいたい。また成果を使って、いろんな人に珠洲の粟津で行われている祭りに関する事を伝えてもらいたいです。」

## こども食堂の認知と充足率の向上

指導教員	金沢学院大学 教授 広根礼子					
参加学生	4年	荒川七菜 中島なの子	香川椎奈 中波杏奈	鈴木匡樹 中村はるな	高島彩乃 山賀玲菜	中栄輝 松本啓寿
	3年	熊谷日菜子 本田鈴音	清水仁美 山下祥希	高橋萌絵 横井香澄	瀧本楓佑	藤井文音

能登半島地震からの一日も早い復興を心よりお祈りいたします。  
本活動で協働させていただきました、おおくわこども食堂、かなざわっ子 nikoniko 倶楽部、  
その他、活動に参加してくださいました皆様に感謝申し上げます。

広根ゼミとこども食堂 活動動画 YouTube Video 2021～2024 年度



2021 年度



2022 年度



2023 年度



2024 年度

広根ゼミ Instagram



# ◀ 子どもの食の認知と充足率の向上 ▶

## 金沢学院大学ヒロネゼミ

おおくわ子ども食堂・かなざわっ子nikoniko倶楽部

3年:熊谷日菜子 清水仁美 高橋萌絵 瀧本楓佑  
藤井文音 本田鈴音 山下祥希  
4年:荒川七菜 香川椎奈 鈴村匡樹 高島彩乃  
中栄輝 中島なの子 中波杏奈 中村はるな  
山賀玲菜 松本啓寿

### 活動の背景

子どもが子ども食堂に1人で歩いて行ける距離を考慮すると、小学校区に1か所、子ども食堂が存在していることが理想です。

### 活動の目的

能登半島地震と豪雨により、被災地の子ども食堂は開催が困難な状態となり、県内の子ども食堂の状況は大きく変化している。

能登地域には元々子ども食堂が少ない(珠洲市はゼロ)。そこで、被災者を対象に、一緒に集うあたたかい居場所として「出張子ども食堂」を開催し、自分の地域にも、このような場があったらいいなと感じてもらおう。数年後の復興を見据えて、能登地域の子ども食堂再建と新規立ち上げに繋げる活動に対して、ゼミの特性をいかして貢献したい。

### 活動の内容

6月

#### 能登半島地震応援グッズのデザイン



持ち寄ったアイデアを検討



投票の結果、選ばれたデザイン

7月

#### 「出張子ども食堂」in金沢 (金沢学院大学)



ゲームでアイスブレイク



集まったみんなで会食



子どもは、フェルトのワークショップ



大人は、子ども食堂について考えるワールドカフェ

8月

#### 能登半島地震応援グッズ制作



シルクスクリーン印刷の様子



トートバッグとレジカゴバッグ

10月

#### 被災者を対象とした「出張子ども食堂」in七尾



子どもは、大広間でフェルトのワークショップ



集まったみんなで会食

11月

#### 「出張子ども食堂」in田鶴浜



参加者全員で記念撮影



バッグにつめた食材を、参加者に配布



カレー、餃子、ポップコーンを提供



来場者にレジカごとトートバッグを配布

12月

#### 子ども食堂10周年記念全国ツアー「公開ワークショップ」



クラブツアーの様子



参加者と記念撮影

### 活動の成果

#### 能登半島地震支援グッズが好評

復興を願うメッセージをデザインに込めて届けることができた。自分達も使うことで、能登への思いを忘れない、と話した。

#### 出張子ども食堂では

2次避難者や被災者と、食事やワークショップを通じて話を聞く事ができた。会話の中から、子ども食堂の内容が知られていない現状があることがわかり、認知向上のためにアプローチし続けなければならないと改めて実感した。

#### 公開ワークショップでは

子ども食堂の現在地を知ることができた。このような場に学生が参加することで、子ども食堂の意義を理解し、周りに伝えていくことの大きな価値を実感した。

#### 地域からの評価

学生は回を重ねるごとに子どもとの関わりがスムーズに目につくようになっていく姿があった。ワークショップの内容が充実しているため、子ども食堂の参加のしやすさに繋がった。

#### 「公開ワークショップ」

##### <子ども食堂運営者のエピソードトークから>

陣痛がきてもお弁当を受け取りに来るお母さんがいた

ボランティアの高校生が、先生には話せなかった悩みをスタッフに話すようになった

不登校だった子どもが友達を作ることができた

家では食べない料理でも、子ども食堂では残さずに食べる

##### <学生の感想から>

食べるという行為に嫌悪感を感じさせないように、食べる行為が楽しいと感じさせられたらいいなという話がとても印象に残った。

直接何かのお手伝いできているという実感があまり無かったが、私たち学生が子ども食堂という言葉や意味を知っていたり周りに伝えたりするだけでも心強い嬉しいと言われたことがとても嬉しかった。

2024年12月の時点で、石川県の子ども食堂の数は、前年度比10カ所増の98カ所で37位。子ども食堂のある小学校区の充足率は、35.1% (前年度33%) で17位となった。本活動の貢献度は数値化できないが、一端を担うと捉えたい。

## 1. 活動の要約

本活動では、こどもの居場所や地域の交流の場として、近年ますます重要性が高まっているこども食堂が担う役割に着目し、活動を継続してきた。昨年度からは、こども食堂のない地域に出向き、認知向上を目的とした「出張こども食堂」を開催している。今年度は、令和6年1月1日に発生した能登半島地震の2次避難者および被災者を対象に、「出張こども食堂」を金沢と七尾で開催した。地震からの復興を願うメッセージを込めたトートバッグとレジかごバッグをデザインし、食材などの支援物資を詰めて「出張こども食堂」に参加した被災者に配布した。また、認定NPO法人全国こども食堂支援センターむすびえ（以下「むすびえ」）が、こども食堂開設10周年の節目を記念し、全国の都道府県で行っている「公開ワークショップ」の石川県バージョンの開催をサポートした。

## 2. 活動の目的

こどもが1人で歩いて行ける距離を考慮すると、小学校区に1ヶ所、こども食堂が存在することが理想である。能登半島地震により、被災地のこども食堂は開催が困難な状態となり、県内のこども食堂の運営状況は大きく変化した。そこで今年度は、不安を抱えた生活を余儀なくされている被災者を対象に、こども食堂が精神的な拠り所となることを願い、活動を行った。もともと能登地域にはこども食堂が少ない。一緒に集うあたたかい居場所として「出張こども食堂」を開催し、参加した被災者に、自分の地域にもあったらいいなと感じてもらおう。数年後の復興を見据え、能登地域のこども食堂再建と新規設立の後押しを行い、充足率の向上を目指す。

## 3. 活動の内容

今年度の取り組みは、3つに別けることができる。能登半島地震支援グッズ制作・出張こども食堂・公開ワークショップであり、積極的に本活動報告の機会を設け周知に務めた。表1からは除外したが、大学の定例ゼミにて、ミーティング・視察・進捗確認を実施した。主な活動を表1に示す。

表1 活動内容

日時	実施内容
5月24日	キックオフミーティング
6月～8月	能登半島地震 支援グッズ企画デザイン
7月27日	出張こども食堂 in 金沢（金沢学院大学）
8月30-31日	能登半島地震 支援グッズ制作（金沢湯涌創作の森）
10月6日	出張こども食堂 in 七尾（矢田郷地区コミュニティセンター）・被災地視察
11月9日	出張こども食堂 in 田鶴浜（旧中村呉服洋品店）※1
11月21-24日	第51回 石川県デザイン展 活動報告パネル展示（しいのき迎賓館）
11月23-24日	冬服持ってけ市（辰巳丘高校）※2
12月1日	公開ワークショップ・活動報告パネル展示（（駅西福祉健康センター）
12/6-8日	まちなか芸術祭 2024 活動報告パネル展示（しいのき迎賓館）
12/14-15日	学会ポスター発表（アートミーツケア学会 2024 年度大会・九州大学）

当初、活動計画にはなかったが、支援グッズをより多くの被災者に届けるため、出張こども食堂 in 田鶴浜（※1）に参加した。また、学生ボランティアの要請を受け、企業が一般から集めた大量の冬物衣料を、被災者や子育て世帯等に配布するための準備にゼミの有志が携わった（※2）。いずれの活動も、微力ながら被災者支援につながることを願って参加した。

(1) 能登半島地震支援グッズ制作

6月、学生は支援グッズについて検討を重ねた。通学に使えるトートバッグと、こども食堂から要望のあったレジかごバッグを制作することに決め、デザインに取りかかった。トートバッグは、8月末、金沢湯涌創作の森シルクスクリーン工房にて、1泊2日の日程で、約50枚を刷り上げた。レジかごバッグは、複雑な形状特性による制作ロスを避けるため、印刷は業者に発注した。



アイデアの検討



シルクスクリーン印刷



能登をイメージしたデザインのトートバッグ2種



Smiles for Notoメッセージ入りレジかごバッグ

(2) -1 出張こども食堂 in 金沢 (金沢学院大学) 対象：2次避難中の子育て世帯

7月、参加者が構内で迷わないように動線確認・開催告知のフラッグ制作・ワークショップの準備を重ねた。当日、宝達志水・珠洲・輪島で被災した2次避難中の家族30人（こども19人、大人11人）が参加した。食事の際に、被災の現状、2次避難先の学校の感想などに話題が及んだ。食後、ゼミはこども向けワークショップを運営し、フェルトボールのストラップを作った。こども食堂は、大人を対象にワールドカフェを開催し、自分の地域でこども食堂をやるとしたら？というテーマで話し合った。ゼミとこども食堂スタッフ、県の健康福祉部担当者等、総勢60人が参加、新聞報道もされた。



豚井とワッフルの昼食を食べながら歓談



ワークショップの様子

**(2) -2 出張子ども食堂 in 七尾 (矢田郷地区コミュニティセンター) 対象：子育て世帯の被災者**

10月、会場設営後、短い時間ではあったが、地元佐藤喜典市議立ち会いのもと、学バスで近隣の被災地を視察した。当初、申込者数が少なかったが、当日になって、会場内に10本掲示した大きなオレンジ色の出張子ども食堂のフラッグを見て、興味を抱いたという被災家族で満席となった。アイスブレイクとして行ったビンゴゲームの後、2会場に分かれ、ゼミはこどもとワークショップ、子ども食堂は、大人に向けてワールドカフェを運営した。おやつに、ケーキとポップコーンを振る舞った。お土産にトートバッグとレジかごバッグに食材や支援物資を詰め、ひと家族1セット配布した。参加者は、13家族43人(子ども29人、大人14人)、総勢70人が参加し、賑やかなイベントとなった。



参加者



トートバッグとレジかごバッグに支援物資を詰めて配布

**(2) -3 出張子ども食堂 in 田鶴浜 (旧中村呉服洋品店) 対象：被災者**

11月、まんぷく食堂が初開催する子ども食堂に、支援グッズを持って駆けつけた。その場には多様な支援者が集い、トラックを改造した移動式遊び場に子ども達が歓声をあげていた。「ずっと解体工事の音しか響いていなかった通りに、子供の笑い声が聞こえている」と、近所の住民が次々と訪れ、参加人数は80人にのぼった。

**(3) 公開ワークショップ (駅西福祉健康センター)**

12月、「公開ワークショップ」全国ツアーの石川県バージョンをサポート。NPO法人ささえる絆ネットワーク北陸代表理事による開会挨拶のあと、ゼミの代表学生が、本活動について発表した。会場内に活動報告パネルも展示した。公開ワークショップは、子ども食堂運営者のエピソードトーク・共感したエピソードについて話し合うグループトーク・企業の支援活動発表の3部構成で進行した。



グループトークの様子



参加者

エピソードトークでは、21才から定年を機に開設した人まで、様々なバックグラウンドを持つ5人が登壇した。家では食べない料理でも子ども食堂では残さずに食べる、不登校だったこどもに友達が

できたなど、継続のモチベーションに繋がるエピソードを披露した。グループトークには、ゼミも加わり付箋を用いて話し合いが行われた。企業の支援活動発表では、廃棄食材の寄付によるフードロスの減少などの実施例が紹介された。県の健康福祉部担当者も行政の立場で発言した。発言者は自らの活動意義を再認識、聴衆は応援したくなり、会場は一体感に包まれた。こども食堂の認知の重要性を相互に実感する貴重な場となった。当日の様子は、むすびえのホームページで確認することができる。

(<https://ks10th.musubie.org/zenkoku/list>)

#### 4. 活動の成果

能登半島地震支援グッズとして作成したトートバッグとレジかごバッグは、配布した被災者に好評を得た。復興を願うメッセージをデザインに込めて届けることができたと感じる。学生は、自分達もバッグを使うことで能登への思いを忘れない、と話し合った。

公開ワークショップでは、こども食堂の現在地を知ることができた。このような場に学生が参加することで、こども食堂の意義を理解し、周りに伝えていくことの大きな価値を実感した。

昨年12月の時点で、こども食堂の数は、全国で前年度比1734ヶ所増の1万866カ所となったことが、むすびえの調査で明らかになった。都道府県別では東京都が1160ヶ所で最多だった。石川県は、前年度比10カ所増の98カ所で37位。こども食堂のある小学校区の充足率は、35.15%（前年度33%）で17位となった。本活動の貢献度は数値化できないが、一端を担うと捉えたい。秋に出張こども食堂を開催した七尾市では、小学校10校に対してこども食堂が11ヶ所となり、「小学校区に1ヶ所のこども食堂」という目標を達成した。

#### 5. 今後の活動計画

本年度の活動で明らかになったことは、一般の人々にとって、「こども食堂は誰が利用して、どのような場所なのか」まだよく知られていない、という現状である。これまでの継続的な活動によって得られた成果を踏まえ、次年度は、次の2点に取り組む計画を立てている。

1. 能登方面のこども食堂空白地帯で出張こども食堂を開催し、新規設立のアプローチを行う。
2. こども食堂が、不登校や発達障がいを抱える当事者や保護者が集える場として機能していることを、検証し周知する。

#### 5. 活動に対する地域からの評価

今年度第1回目の出張こども食堂では、能登から避難してきた参加者が集まったことで、震災の時に怖い思いをしたことや、2次避難先での生活の苦労などの思いを共有し合う場面が見られた。ワークショップを通して子どもと学生の関係が深まり、その後の会食で一緒にご飯を食べている姿に、これぞこども食堂というのを感じた。

第2回の出張こども食堂では、震災の被害があった地域での開催。七尾市には既にこども食堂が数カ所あるが、「こども食堂は自分たちに関係がないところだと思っていた」「こども・大人だけで参加して良いんですね」とコメントをいただいた。また、学生のワークショップを同時開催することで「イベントと一体型で参加しやすかった」という意見もあった。以上からこども食堂があるところもないところも、こども食堂認知向上のためにアプローチし続けなければならないと改めて実感した。

2次避難者が集えるこども食堂を開催することができ、こども食堂がほとんどない能登の人達にこども食堂の雰囲気を感じてもらうことができた。新規立ち上げの後押しに繋がるワールドカフェを開催できたことで、参加者に自分事としてこども食堂はどのような場所であると良いかの気付きを促すことができた。学生は、回を重ねるごとに子どもとの関わりがスムーズに且つ上手になっていく姿があった。ワークショップの内容が充実しているため、こども食堂の参加のしやすさに繋がった。

## どぶろくの魅力発信プロジェクト

指導教員 北陸先端科学技術大学院大学 教授 島田 淳一  
金沢工業大学 准教授 村山 祐子

参加学生 北陸先端科学技術大学院大学  
2年 大懸崇一郎 石丸琴子 川崎重毅  
1年 岸雄斗 明比翔太郎 安藤光平  
金沢工業大学  
4年 武田晶 中川理瑚 林柊佑  
3年 加藤玲央

「どぶろくの魅力発信プロジェクト」は、2026年1月16日に中能登町で開催される「第17回全国どぶろく研究大会」に向けて、中能登町のどぶろくの飲み頃や飲み方、どぶろくを使った製品を研究することにより、どぶろくの魅力を伝えるとともに、中能二宮天日陰比咩神社のどぶろく醸造の見える化を行い、将来的などぶろく醸造者に中能登町のどぶろく醸造の伝統を継承することを目的としています。

また、2024年12月5日、ユネスコ無形文化遺産に我が国の「伝統的酒造り」が登録されたことにより、日本酒の原酒である「どぶろく」にも注目が集まっています。

本プロジェクト実施にあたり、中能登町の能登二宮 天日陰比咩神社 禰宜の船木清崇さま、また中能登町のどぶろく生産者である「さえさ」の織田好子さま、「太郎右衛門」の田中良夫さまには、本プロジェクト推進に向けてのご協力に感謝いたします。

また、本プロジェクト推進にサポートいただいている中能登町観光協会、(一社)中能登スローツーリズム協議会、道の駅 織姫の里なかのと、PwC コンサルティングさまにも感謝を申し上げます。

# どぶろくの魅力発信プロジェクト（中能登町）

北陸先端科学技術大学院大学・金沢工業大学

中能登町は古くから「どぶろく文化」が根付いており、町内の3神社でどぶろくが醸造されています。また、「どぶろく特区」にも認定されており、2026年1月16日には「全国どぶろく研究大会」が開催される予定です。この大会に向けて、「どぶろくの美味しい飲み方」を開発し、伝統文化としてのどぶろくの醸造過程を見える化することで、どぶろくの魅力を多方面に発信します。

## 中能登町における「どぶろく」を取り巻く状況・課題

### 1. 中能登町における「どぶろく」の醸造 / 生産

天日陰比咩神社など神事での醸造と、どぶろく醸造業者が「さえさ」「太郎右衛門」を醸造。産業として安定的などぶろくの醸造のための新たなどぶろく醸造者が不在。

### 2. 「どぶろく」の販売・プロモーション

中能登町の「どぶろく」への理解と情報発信が不足。全国どぶろく研究大会開催に向けて、文化としてのどぶろくをアピールと、どぶろく宣言などのイベントやSNSでの発信が必要。

### 3. 中能登町の「自分ごと」に

中能登町での「どぶろく」の販売促進や中能登町のプロモーションの検討とともに、町民が積極的に参画し、「自分ごと」としてどぶろく文化を捉えていくことが重要。

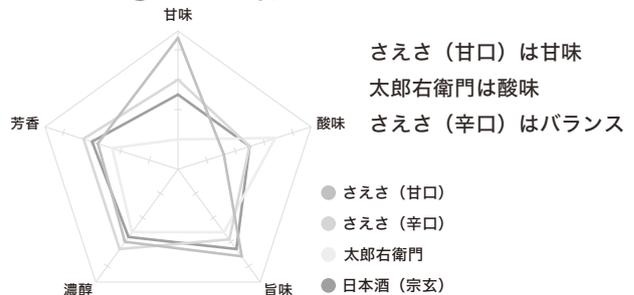
## 天日陰比咩神社での醸造

神事における「どぶろく醸造」の過程を見える化



## どぶろくの味と「合わせ」

- ・中能登町のどぶろく「さえさ」と「太郎右衛門」の特徴を官能評価
- ・食材とどぶろくの合わせ（マリァージュ）を官能評価



## 2025 年度の活動

- ・どぶろくの特徴を踏まえて、マリァージュが良いレシピを開発
- ・どぶろく関連イベントやSNSによって、「どぶろく」の魅力を発信

4 以上	ゆず、生姜（チューブ）、ぜんざい、バニラアイス
3.5 以上	美酢（マスカット）、チョコレートアイス、しめ鯖、ブラウニー
3.5 未満	みかん、レモン、カルピス、ヨーグルト、カレー粉、ココア（粉）、ブルーベリージャム、梅干、美酢（ザクロ）、ローストビーフ、さつまいもチップ、燻製チーズ

### 1. 活動の要約

中能登町では古くからどぶろくが根付いており、2026年1月16日には「全国どぶろく研究大会」が開催される予定です。この大会に向けて、「どぶろくの美味しい飲み方」を開発し、伝統文化としてのどぶろくの醸造過程を見える化することで、どぶろくの魅力を多方面に発信します。

### 2. 活動の目的

中能登町では、古くから3つの神社でどぶろくが醸造されてきた歴史があり、地域文化として深く根付いています。2014年11月に「どぶろく特区」に認定され、これに伴い多様な取り組みが行われています。その中で、2026年1月16日には全国のどぶろく生産者が一堂に会する「全国どぶろく研究大会」の開催が決定しています。また、町内には2名のどぶろく醸造者がいますが、高齢化により製造技術の伝承が課題となっています。これらの課題に対応するため、どぶろくと食材などの合わせ方を研究するとともに、どぶろくの醸造過程の見える化を行い、「全国どぶろく研究大会」を機に、どぶろくの魅力を各方面に発信いたします。

### 3. 活動の内容

本プロジェクトと中能登町役場、中能登町観光協会などからなる「どぶろくの魅力発信プロジェクト実施委員会」を設置し、中能登町どぶろく関係者として天日陰比咩神社、どぶろく特区醸造者をオブザーバーとして迎え、2024年度の活動として、以下の項目を実施いたしました。

- (1) 中能登町のどぶろくに関する基礎調査
- (2) どぶろく宣言(2024/12/12)・どぶろく祭り(2024/12/14)でのPR活動及びアンケートの実施
- (3) どぶろくの魅力発掘のため、飲み合わせ・食べ合わせの評価
- (4) どぶろく醸造の見える化

### 4. 活動の成果

#### (1) 中能登町のどぶろくに関する基礎調査

「どぶろくの魅力発信プロジェクト実施委員会」の関係者から提供された情報を元に、中能登町のどぶろくに関連する情報と課題を取りまとめました。本プロジェクトの実施にあたっては、PwCコンサルティングの工藤氏のサポートを受け、どぶろく特区醸造者と天日陰比咩神社の取り組みをグラフィックレポートとしてまとめました(図1、図2、図3)。

また、これまで、中能登町では、どぶろく研究会などを開催することにより課題と対応策を検討・



図1 グラフィックレポート「さえさ」

対応していましたが、今回、改めてどぶろくを取り巻く状況について整理しました。

・中能登町におけるどぶろくの醸造/生産

天日陰比咩神社などの神事では、どぶろくが醸造されるという文化的側面があり、特区では「さえさ」と「太郎右衛門」が醸造されています。産業として安定的などぶろくの醸造が期待されていますが、新しいどぶろく醸造者が不足しているという課題が解決されていません。

・どぶろくの販売・プロモーション

中能登町のみならずどぶろくそのものへの理解促進が不十分であり、どぶろくに関連する体験は一部対応されているものの、情報発信が不足しています。全国どぶろく研究大会の開催に向けて、どぶろくの文化的側面をアピールするとともに、どぶろく宣言などのイベントやSNSでの発信が求められています。

・中能登町の「自分ごと」に

中能登町において、どぶろくの販売促進および中能登町のプロモーション、さらに観光客増加に向けた方策を検討する必要があります。それと同時に、中能登町の町民が積極的に参画し、「自分ごと」として捉えることが重要です。

(2) どぶろく宣言・どぶろく祭りでのPR活動及びアンケートの実施

中能登町で開催されたどぶろく関連イベント「どぶろく宣言」(2024年12月12日、道の駅 織姫の里) および「どぶろく祭り」(2024年12月14日、能登二宮 天日陰比咩神社)において、(1)で作成したグラフィックレポート(図1、図2、図3)を活用し、どぶろく醸造者と天日陰比咩神社でのどぶろく醸造の様子を紹介しました。また、中能登町のどぶろくを紹介するポスター(図4)を作成し、掲示しました。

また、イベント来訪者に対して、(1)で検討した課題に対して評価項目を設定し、アンケート(表1参照)を実施しました。

どぶろく祭りに比べ、どぶろく宣言には高齢者の参加者が多くなっています。実施場所が道の駅 織姫の里であり、開催時間が平日の11:00-11:45であったため、近隣の高齢者が多く来訪したと推測されます。一方、どぶろく祭りには、幅広い年齢層の来訪者がありました。これは、祭りを目的に来る来訪者や地元の地区の来訪者が多かったためと考えられます。

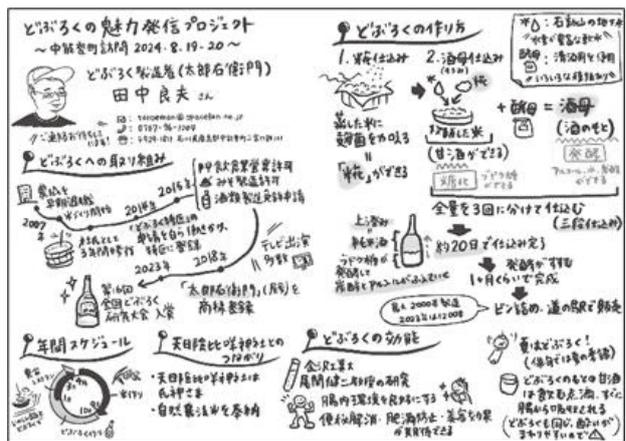


図2 グラフィックレポート「太郎右衛門」



図3 グラフィックレポート「天日陰比咩神社」



図4 「中能登町のどぶろく」ポスター

また、注目する点としては、70歳以上の「どぶろく飲酒経験」です。男性が全員「どぶろく飲酒経験がある」と回答していますが、女性はほぼ「どぶろく飲酒経験がない」との回答としています。この点については、現地での文化的な背景の調査が必要と考えられます。

表 1 どぶろくに関するアンケート

アンケート項目
年齢、性別、居住地、どぶろくの飲酒経験、どぶろくへの印象、中能登町のどぶろくへの印象、どぶろくの飲み方、どぶろくに何をいれると美味しいか、どぶろくと何を一緒に食べると美味しいか、中能登町のどぶろくの活動への意見

(3) 「どぶろく」の魅力発掘のため、食べ合わせ・飲み合わせの評価

(3-1) どぶろくの官能評価（利き酒）

「どぶろく」と食材の組み合わせを研究するために、中能登町のどぶろく「さえさ（甘口）」、「さえさ（辛口）」、「太郎右衛門」について官能評価（利き酒）を行いました。評価にはプロジェクトのメンバーおよび中能登町の関係者が参加しました。プロジェクトメンバーによる利き酒は、事前に複数の日本酒を使用して利き酒を行い、評価基準についての意見交換を経て実施されました。評価軸の

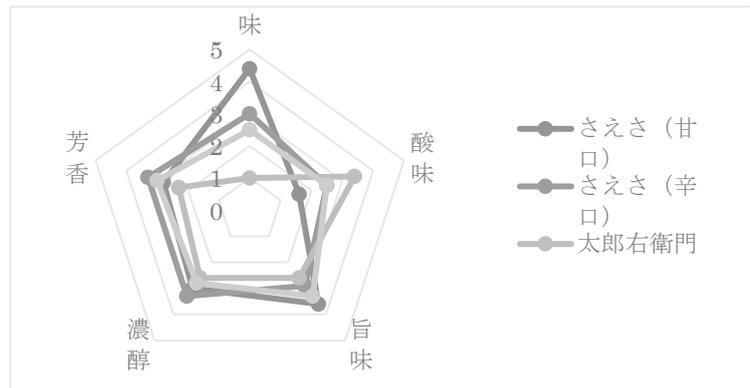


図 5 「さえさ」、「太郎右衛門」の味覚評価

項目は、日本酒メーカーのウェブサイトなどの情報を参考に設定しました。定量的な評価として、「甘味」「酸味」「旨味」「濃醇」「芳香」の5項目について0から5の6段階で評価し、定性的な評価として、「色」「匂い」「味」「全体」について記述式で評価を行いました。(図5参照)

「さえさ（甘口）」は甘味と旨味が高く、酸味が低い特徴があります。一方、「太郎右衛門」は酸味が高く、甘味が低く、芳香が抑えめです。「さえさ（辛口）」は甘味と濃醇が若干高めですが、比較対象の日本酒（宗玄）に比較的近い評価となっています。この結果から、中能登町で醸造されているどぶろくの3銘柄はそれぞれ異なる特徴を持つことが確認されました。今後はこれらの傾向を踏まえ、食材との合わせ方の研究を進めていく予定です。

(3-2) どぶろくと食材との「飲み合わせ」・「食べ合わせ」の評価

プロジェクト実施メンバーと中能登町関係者の経験や前例をもとに、合わせた時に相乗効果が期待できる食材をピックアップし、官能評価を実施しました。評価参加者は、プロジェクト参加メンバーと中能登町関係者からなっています。

官能評価については、評価を「◎」「○」「△」「×」とし、評価点を「◎」「○」「△」「×」をそれぞれ 5、4、2、0とし、それぞれ平均を取って評価点としました(表2参照)。「4.0以上を「極めて評価が高い食材」、3.5以上を「評価が高い食材」として、今後の研究対象とすることにしました。なお、評価点3.5以上の食材については「×」という評価はありませんでした。

これから(2)のアンケートで得られた結果を参考として、どぶろくを利用した飲食品とレシピの開発につなげることとし、また、中能登町のHPに「Nakanoto ココロとカラダをトトノエル」として公開されている飲み合わせの事例も参考にすることとしています。

表 2 合わせた食材と評価

評価点 4.0 以上	ゆず、生姜(チューブ)、ぜんざい、バニラアイス
評価点 3.5 以上	美酢(マスカット)、チョコレートアイス、しめ鯖、ブラウニー
評価点 3.5 未満	みかん、レモン、カルピス、ヨーグルト、カレー粉、ココア(粉)、ブルーベリージャム、梅干、美酢(ザクロ)、ローストビーフ、さつまいもチップ、燻製チーズ

#### (4) 醸造過程の見える化

どぶろくの醸造過程の見える化については、専門のどぶろく醸造者ではなく、天日陰比咩神社での神事における醸造過程を対象とすることにしました。同神社では、年始の振る舞い酒のために年に一度のみどぶろくを醸造しています。2024年度は具体的な醸造過程を把握し、2025年度には撮影データなどをアーカイブ化することを目指します。(図6及び図7参照)

見える化の具体的な項目として、醸造過程の参画および把握に加え、一部の醸造過程を撮影しました。また、発酵過程を理解するため、醸造場所の室内外の温湿度変化やどぶろくの温度、酸度、糖度を測定しました。

測定結果から、「糖度、酸度、温度の定量的な計測が可能」、「仕込みから2週間は発酵状態が不安定」、「2週間経過後から発酵状態が安定」、「3週間経過後から気温・どぶろくの温度も徐々に低下」となっていることが明らかになりました。

「さえさ」と「太郎右衛門」の実際に販売されている製品を開封後、毎週官能評価を行い、経日変化について評価しました。定量的な変化として、「さえさ」は購入後1ヶ月で酸味が高くなる傾向があり、太郎右衛門は各評価項目が維持されるか若干低下する傾向が見られました。一方、定性的な変化については、購入後1ヶ月間で変化が見られますが、1ヶ月を超えると銘柄によって否定的な意見が増え、どぶろくは開封後1ヶ月以内に飲み終えることが推奨されると判断されました。



図 6 醸造過程 1



図 7 醸造過程 2

#### 5. 今後の活動計画

2025年度は、2024年度の実施状況に鑑み、次の課題に対応する予定です。

- (1) 「飲み合わせ」・「食べ合わせ」の評価結果を用いた、どぶろくの楽しみ方の考察
- (2) 醸造過程の見える化による醸造過程のアーカイブ化
- (3) どぶろくに関するプロモーションの実施

また、2026年1月16日開催の「全国どぶろく研究大会」において、研究成果を発表するとともに、全国の生産者に向けて情報発信する予定です。

#### 6. 活動に対する地域からの評価

プロジェクト推進にあたり、中能登町及び中能登町観光協会から次の評価をいただきました。

【中能登町】 今回のプロジェクトにより、どぶろくの魅力、飲み頃という課題をプロジェクトメンバーと連携して、生産者の歩んできた、どぶろくに対する思いをよりわかりやすくまとめていただき、大変うれしく思います。2025年度開催予定の全国大会でも、その取組みを発表することができ全国特区の生産者の皆様にご理解をいただける絶好の機会と考えております。全国大会に向けて一緒になって盛り上げていきましょう。

【中能登町観光協会】 中能登町はどぶろく特区として、どぶろくで地域おこしを推進している中、どぶろくの美味しい時期などを数値にして「見える化」していただけることは、販売している道の駅織姫の里なかのと(中能登町観光協会)としても大変嬉しいことですし、そのまま飲むだけでなく、何と組み合わせたら美味しいかなどお客様との話題も膨らみますので、ぜひ参考にさせて頂きたいと思えます。

能登半島地震におけるこども支援及び中高生の居場所作りにおける調査と検証  
— 石川県の中高生が求めるユースセンターの条件と立地に関する調査 —

指導教員 北陸大学 教授 田尻慎太郎

参加学生 4年 板谷悠希 梅野日花里 江川遙菜 大岩あずさ 芝田虎太郎  
馬縹百優 山本志龍

本研究を進めるにあたり、一般社団法人第3職員室の皆様には、必要なデータの提供に快くご協力いただき、心より感謝申し上げます。また、調査にご協力くださったユースセンターの利用者の皆様にも深く御礼申し上げます。

視察の受け入れにご協力いただいた認定特定非営利活動法人カタリバ、公益財団法人児童育成協会の皆様には、貴重な時間を割いていただき、誠にありがとうございました。

本研究の成果が、金沢市のユースセンターのさらなる充実と発展に寄与することを願っております。最後に、本研究にご協力いただいたすべての方々に心からの感謝の意を表し、謝辞といたします。

# 復興課題枠 石川県の中高生が求める ユースセンターの条件と立地に関する調査

北陸大学経済経営学部 田尻ゼミ (dラボ)  
板谷悠希・梅野日花里・江川遙菜・大岩あずさ・芝田虎太郎・馬縹百優・山本志龍

## ユースセンターとは

**1**

学校でも家でもない、ユース（若者、主に中学生）の第三の居場所のことである

**2**

放課後や休日にユースセンターが楽しい、様々な人達と出会う中で学びを深めたいという声

**3**

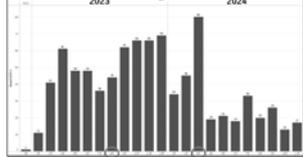
国や地方公共団体と連携して、若者支援の活動を行っている（ユースワーク）

## ①ユースセンター金沢ジュウパコ

運営	一般社団法人第3期員室
場所	金沢市泉野町3丁目3-3
開館時間	16:30~21:00
休館日	毎週月、木、土、日曜日
利用対象者	中学生を中心としたおおよそ10代
設備	・本棚 ・ボードゲーム類 ・くつろぎスペース ・ソファ ・ハンソック ・Free Wi-Fi など



## 月別の利用者数推移(ジュウパコ)

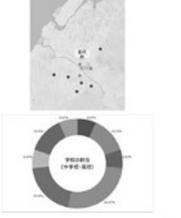


・2023年8月から利用者数は右肩上がり  
・2024年3月を境に、利用者数は大幅に減少  
↓  
新規利用者の獲得ができず、現在まで低迷状態

## 石川県のユースセンター運営を改善する上で参考になりそうな要素

- 区との強い連携**  
2つとも区からの委託ということもあり、支援が充実
- 周辺の学校との強い繋がり**  
区の全校生徒分の富田用子配布(B-lab) 学校カフェ(アップス)
- 地域の大人と出会える仕組み**  
文芸彩集(B-lab)
- 中学3年生を中心に宣伝**  
口コミが広まりやすくなる

## 回答者属性



- 通っている学校は偏りなく多様
- ユースセンター周辺に集中している

## 満足度は高い◎

「満足している」の回答割合  
スタッフ—86.7% 設備—86.6%

丁寧に勉強を教えてくれる人がいるのが嬉しい  
実際にスタッフ体験でも学びを深めたい

コミュニケーションを取りやすいような設備の工夫  
(カードゲーム、くつろぎ空間、お菓子等)

「夢を叶えるための応援をしてくれる大人が側にいてあげたい」というスタッフの熱意  
これからユースセンターの利用者数と更に繋がってほしい

## 金沢駅前での中学生を対象としたユースセンターの認知度調査

調査日: 2024年10月24日(木)~30日(水) (休日を除く)

場所: 金沢駅西口、金沢駅もてなしドーム、地下広場、金沢駅東広場

対象者と回答数: 金沢駅を利用している中学生 143名

## 回答者割合

ユースセンター認知度

95%の中学生が金沢市のユースセンターを知らない

金沢市のユースセンターを知っている人、知っているが行ったことのない人を含む  
5%

## ユースセンターでどんなことができると行きたい？

勉強を教えてもらえるところや自習ができる空間があるところに行きたい  
実際に体験できる環境が整っているのに使っていない！

みんなと遊べるところや子ども食堂の声も！

## 立地に対する感想

Q. ジュウパコ、ユースのリビングの場所を見て、あなたは通いやすい場所にあると思いませんか？

どちらも通いやすいと答えた人、どちらも通いづらいと答えた人で回答が割れた

## 立地に対する感想 (ユースセンターを知らないと回答した人)

どちらも通いやすい場所にあると思った人が50人

「ユースのリビング」は通いやすいと思った人が48人

「ジュウパコ」は通いやすいと思った人は4人

どちらも通いづらいと思った人が34人

ユースのリビングは通いやすいが、ジュウパコは通いづらい

## 立地に対しての感想と回答者の高校、最寄りのバス停 (ユースセンターを知らないと回答した人)

どちらも通いやすいと回答した人に集約は出なかった。最寄りバス停に寄り添っている

一方で、回答者の高校所在地を見ると、特定のエリアに集中している

学校帰りの利用の方が多くの人にユースセンターを利用してもらえ可能性が高い！

## ユースセンターでどんなことができると行きたい？

（今のままでも実現できること）  
1位「勉強」  
2位「遊ぶもの」  
3位「やりたいことが実現できる」

（設備が整わないとできないこと）  
スポーツ、ダンスやバンド、音楽

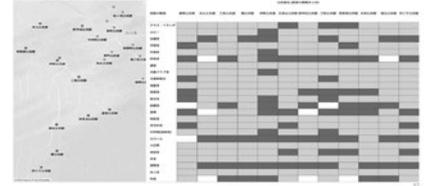
## ジュウパコの新しい候補地探し

☆金沢南エリアに着目  
・複数の学校が集中しているエリア  
・特に勉強に力を入れている学校が多い  
・親ジュウパコ利用者のユースが今後もあるように

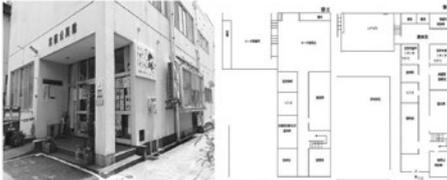
優先度  
**立地 > 部屋の種類 > 金銭面**

これらを考慮し高山人からのご意見の結果！ユースたちが快適に過ごせる空間があり、環境が最初からある程度に整っている公民館が適していると考えた。

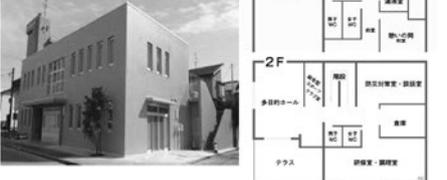
## 金沢南エリアの公民館と部屋の種類



## 第一候補 富樫公民館



## 第二候補 伏見台公民館



## 明らかになったこと

- 「ユースのリビング」「ジュウパコ」のどちらも、通っている「学校」が近くにある人は「通いやすい」と感じていること
- 駅前アンケート回答者の中学生、現ユースセンター利用者のどちらも「勉強」に集中して取り組める環境を求めていること
- 勉強以外でも「遊び」「やりたいことを見つける」ことを求める声も多いこと

## 1. 活動の要約

石川県内のユースセンターの現状を調査し、併せて中高生が必要としている居場所について分析した。また、東京都内のユースセンター2カ所を視察し、そこで導入されている仕組みや取り組みを確認した。その結果、多様な活動を支えるスペースの確保や、地域の行政機関や教育機関との連携が重要であることが分かった。これらの知見を基に、石川県金沢市泉野町にある「ユースセンター金沢ジュウバコ」の新たな物件候補地を検討した。候補地の選定においては、アクセスの良さ、施設の規模、施設の使用料金の3点を重視した。施設における充実度の面から公民館を借りることを考え、公民館の中から候補地を選出した。

## 2. 活動の目的

石川県金沢市泉野町にある「ユースセンター金沢ジュウバコ」は、2024年で借りている物件の契約が切れる。そのため、新たな拠点となる物件を探していた（2025年現在、契約期間の終了に伴い、移転準備のため閉館中）。石川県の中高生が求めるユースセンターの条件と、立地に関する調査を行い、ユースたちに対してどのような対応を取るべきかを明らかにした。さらに、アンケートの調査結果やユースセンターの視察経験から、立地や交通の面でどのような物件がユースセンターの活動を行う上で最適であるかを調査し、明らかにした。

## 3. 活動の内容

活動内容を表1に示す。主に①ユースのリビングでのスタッフ体験、②「ユースのリビング」、「ユースセンター金沢ジュウバコ」でのアンケート調査、③中高生に向けたユースセンターの認知度、理想の居場所像のアンケート調査、④公民館候補地の分析に取り組んだ。

表1 活動内容

2024年7月	・ユースセンター金沢ジュウバコの現状、課題点の整理、打ち合わせ
2024年8月～9月	・金沢市長町にあるユースのリビングでスタッフ体験 ・「ユースのリビング」「ユースセンター金沢ジュウバコ」でのアンケート調査
2024年10月	・東京のユースセンター「b-lab」「アップス」への視察 ・中高生に向けたユースセンターの認知度、理想の居場所像のアンケート調査
2024年11月	・「ユースのリビング」「ユースセンター金沢ジュウバコ」の来館者データの分析
2024年12月	・「ユースのリビング」の初来館者データの分析

・公民館候補地の分析

## 4. 活動の成果

### (1) ユースセンター利用者アンケート (n=15)

スタッフへの満足度は86.7%、設備への満足度は86.6%という結果が得られた。その理由として、スタッフが丁寧に勉強を教えている点や、ユースの願いを反映し、交流しやすいように工夫されている点が挙げられる。また、スタッフの熱意も利用者の満足度を向上させる要因の1つである。

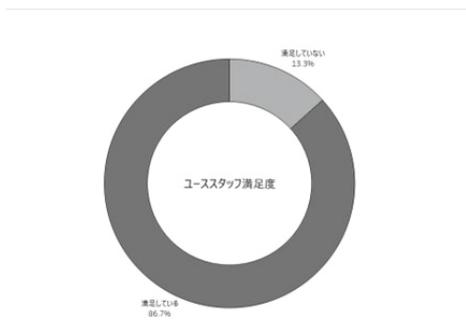


図 1 ユースセンターの満足度

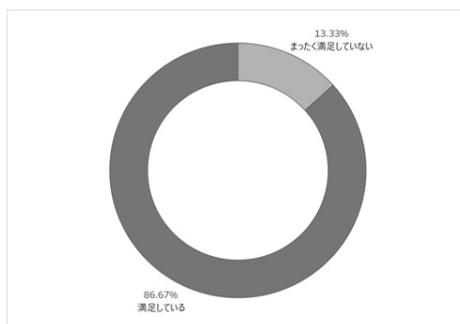


図 2 設備満足度

一方で、低評価を得たのは立地に対する満足度である。ユースセンター利用者の約半数が、不満を感じていると回答している。金沢駅からジュウバコまでは徒歩で約 50 分、バスでも約 30 分かかる。そのため、高校生にとって気軽に立ち寄れる場所とは言えない。このような立地の不便さが、新規利用者の獲得に結びついていないのではないかと考えた。

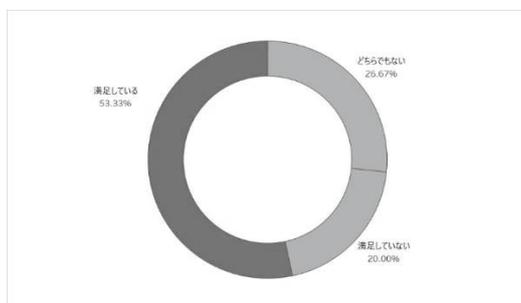


図 3 立地に対する満足度

(2) 金沢駅前での中高生を対象としたユースセンターの認知度調査 (n=143)

金沢市におけるユースセンターの認知度を問うと、95%の中高生がユースセンターを知らないという回答を得た。一方で、知っている人や知っているが行ったことのない人は、わずか5%であった。

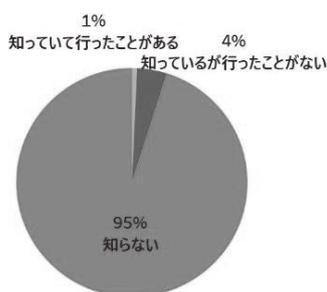


図 4 金沢市内のユースセンターの認知度

ユースセンターで何ができれば行きたいと思うかを問うと、主に勉強を教えてもらえるところや自習ができるといった回答を得た。実際にそのような環境が整っているのにも関わらず、中高生に対して上手く認知されていないことがわかる。

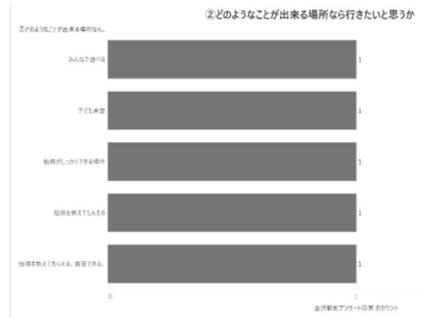


図 5 どのようなことができればユースセンターに行きたいと思うか

### (3) 金沢市南エリアにある公民館の分析

ジュウバコの新しい候補地探しとして、金沢南エリアに着目した。理由は以下の3点である。

- ・勉強に力を入れている学校が複数集中しているエリアである
- ・現ジュウバコ利用者のユースが今後も通えるようなエリアである
- ・金沢駅前周辺でアクセス良好な「ユースのリビング」の立地はそのまま、「ジュウバコ」の場所を変更することで棲み分けをする

優先度として、立地、部屋の種類、金銭面の3点を挙げた。ユースたちが快適に過ごせる空間があり、環境が最初からある程度に整っている公民館が適していると考えた。また、中高生を対象としたアンケート結果から①勉強を黙々と取り組むことができ、少しの会話が出来る場所、②防音施設、③身体を動かせるスペースがある場所という条件を踏まえ、公民館を選んだ。

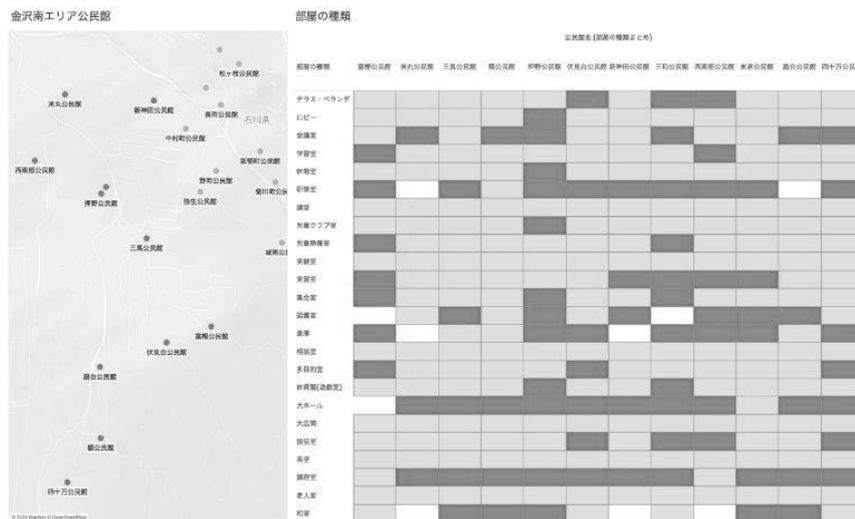


図 6 金沢南エリアの公民館と部屋の種類

第1候補の公民館は、富樫公民館である。泉丘高校前のバス停から富樫公民館最寄りのバス停“窪”には約7分+徒歩約5分、自転車では約5分の距離、錦丘高校前から窪へ約1分+徒歩約3分の距離、自転車では約3分である。学習室や多目的室があり、勉強をしたいユースやダーツ、ボードゲーム等で遊びたいユースにとって不足ない。

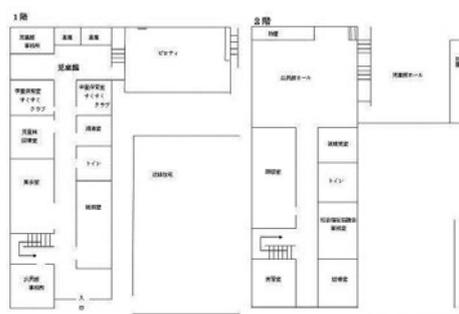


図 7 富樫公民館の外観、施設平面図（画像出典：富樫公民館 | トップページ）

第2候補の公民館は、伏見台公民館である。泉丘高校前から公民館までバスを利用すると、“窪南”まで約9分+徒歩約9分の路線と“金沢赤十字病院前”まで約8分+徒歩約8分の路線がある。錦丘高校からは徒歩約10分の近さにある。大ホールや多目的ホールという大きい空間があるため、ユースがのびのび遊ぶには丁度良い。広く自由な空間があるという点は、富樫公民館と差別化できる。



図 8 伏見台公民館の外観、施設平面図（画像出典：金沢市伏見台公民館 | ホームページ）

### 5. 今後の活動計画

担当教員異動のため、1年目で終了予定

### 6. 活動に対する地域からの評価

利用者ならびに一般の中高生を対象に、ユースセンターについての意識調査を実施し、結果を可視化してくれたのは非常に役に立った。その結果、①「ユースのリビング」「ジューバコ」のどちらも、通っている学校が近くにある人は「通いやすい」と感じていること、②駅前アンケート回答者の中高生、現ユースセンター利用者のどちらも勉強に集中して取り組める環境を求めていること、③勉強以外にも「遊び」や「やりたいことを見つける」ことを求める声も多いことが明らかになった、ことについては、今後の運営に役立てていきたい。さらに、ユースセンターの認知度や新たな物件選びの条件などを知ることができた。またユースセンターの臨時スタッフとして活動いただいたことにも深く感謝申し上げます。

## 七尾市の人口減少と能登地域の衰退

指導教員 金沢大学 教授 松島大輔

参加学生 4年 中村温雅 岡本岳人 定免泰誠 花田怜大 加木翔太  
3年 赤秀颯太

### 令和 6 年能登半島地震に関わる皆さま

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます  
また被災された方々には心からお見舞い申し上げるとともに  
復興に尽力されている皆様には安全に留意されご活躍されることをお祈りいたします  
敬具

### 地域団体への謝辞

一般社団法人きたまえ JAPAN をはじめ、七尾市役所や七尾商工会議所、七尾高校の  
皆様、また今回の活動をご支援・ご協力いただきました皆様はこの場を借りて御礼  
を申し上げます。この度は誠に有り難う御座いました。また、引き続きご指導・ご鞭撻  
の程、宜しく願い申し上げます。

金沢大学 松島ゼミナール一同



約30名の金大生が  
大集合！！みんな  
で登屋台村へ！



# 金沢大学生 コラボ祭り

ステージや遊びが盛りだくさん！  
ガラポン抽選会もあるよ！



11時15分～  
14時45分～

大道芸サークルJMC



12時～  
15時30分～

金KIRA凛～篠笛～



常設

ボードゲーム 第三職員室



12時30分～

お笑いサークル「笑風」



14時～

ダンスサークルPhilia

ガラポン抽選会  
12月14日（土）11:00～



ガラポン抽選会



金沢大学生特別ステージ

※時間は予定です

お問い合わせ [anshin.project.jp@gmail.com](mailto:anshin.project.jp@gmail.com)

## 1. 活動の要約

金沢大学産学融合研究会（松島ゼミ）が株式会社九州電力との共同研究の一環として行っている「Anshin Project」にて、令和6年能登半島地震の復興支援のため、能登を中心とする地域の伝産品を販売する物産展を長崎駅直結の商業施設「アミュプラザ長崎」にて物産展を実施した。

また、実施における、能登の事業者への事前取材や能登の事業者の取りまとめなどに関しては、一般社団法人きたまえ JAPAN と金沢大学産学融合研究会（松島ゼミ）が連携し執り行った。さらに、長崎での物産展においても一般社団法人きたまえ JAPAN と連携をされている事業者や一般社団法人きたまえ JAPAN の皆様に長崎にご足労いただき商品販売やトークセッションなどを実施した。また、同様の物産展を能登屋台村にて、金沢大学松島ゼミとしても商品販売を行いながら第二弾イベントとして実施した。

金沢大学松島ゼミとしては、2回のイベントで継続して消費者の声を事業者に伝えることができる「FAN 通貨」システムである「SENTOKU」を開発し、被災地の事業者に応援の声を届けるためのツールとして活用した。

## 2. 活動の目的

令和6年元旦に発生した能登半島地震により被災した事業者の応援として、事業展開と販路拡大の機会を創出すると共に、開催地域との交流、地域経済の活性化を目的としてイベント「のたと、わたし」（以下本企画）を実施した。

本企画においては、アミュプラザ長崎にご協力いただき、能登・長崎双方の魅力を商材やサービスを介して伝えると共に、震災により被害を受けた能登の現状、復興状況などを知る機会として、現地からのメッセージや関わる方々の想いを届けた。本企画を通じ、地域、企業、個人、一人一人が新たな社会との向き合い方を構築し、持続的な応援、連携を育むことを目指した。

また、第二弾イベントとして、七尾市の PATRIA 1 階にある能登屋台村にて、能登屋台村 1 周年記念祭イベントを実施した。本イベントでは、屋台村の認知度を一層高めるとともに、地域内外からの継続的な関係人口を創出するための重要な機会となることを目指し、イベントでは、参加者が屋台村に関連したアンケートに回答することで、能登屋台村内で利用可能な域内商品券 AnshinCoin が当たるガラポン抽選会を実施した。このキャンペーンにより、屋台村を訪れる顧客層の拡大と販促活動のさらなる強化を図った。

## 3. 活動の内容

### ○ 第一弾イベント基本情報

#### ▶ イベント名

「のたと、わたし」

#### ▶ 開催日時

1日目：2024年10月26日（土）11時～17時

2日目：2024年10月27日（日）10時～16時

#### ▶ 開催場所

アミュプラザ長崎 かもめ広場 多目的広場

#### ▶ 主催/協力

主催：九電グループ

協力：JR九州グループ、ひとことものの公社、金沢大学産学融合研究会

### ○ 第二弾イベント

#### ▶ イベント名

#### 屋台村 1 周年記念祭

- ▶ 開催日時  
1 日目：2024 年 12 月 14 日（土）11 時～16 時  
2 日目：2024 年 12 月 15 日（日）11 時～18 時
- ▶ 開催場所：能登屋台村 PATRIA 1 階
- ▶ 主催：ナナイベ合同会社
- ▶ 協力：金沢大学産学融合研究会

### 4. 活動の成果

#### ○ 第一弾イベント

- ▶ 長崎駅前の利用者数：約 2 万人  
能登からの出店では合計約 167 万円の売上、イベント全体で 210 万円の売上があった。物産展当日は、能登地域ならではの品々が並び、能登事業者との交流を通して多くのお客様に能登の現状と魅力を伝えた。また、ホームページと復興支援ブース上では、より詳細な事業者の復興後の姿、どのような想いで商品販売を継続しているか等、「想い」にフォーカスを当てた紹介を実施した。お客様にリアルな声を伝えることに加えて、お客様からの応援メッセージも募集し、約 200 件の応援が集まった。  
参考) HP に掲載した事業者の想いを伝える紹介例  
<https://www.anshinproject.jp/nagasaki2024-noto>

#### ○ 第二弾イベント

- ▶ 来場者数  
2 日間総合約 500 名
  - ① 金沢大学関係：5 団体 39 名  
Philia14 名/笑屋 10 名/金 KIRA 凛 3 名/第三職員室 2 名/司会者 1 名/SBC9 名  
AnshinCoin28,000 円分を団体配布
  - ② 太鼓関係：14 団体 200 名
- ▶ 利用金額/場所
  - ▶ 振興券管理情報
    - ◇ カード版 70,500 円
    - ◇ アプリ版 3,800 円
  - ▶ 店舗ごとの振込金額・決済履歴
    - ▶ 総合 92 回 74,300 円：カード 88 回 70,500 円/アプリ 4 回 3,800 円の決済利用
      - ◇ ①きたまえ JAPAN の子店舗である能登屋台村 BBQ 65,000 円  
カード 61,700 円/アプリ利用 3,300 円
      - ◇ ②洋菓子店シエル 7,800 円  
カード 7,300 円/アプリ利用 500 円
      - ◇ ③SandBoxConnections1,500 円

#### ○ SENTOKU での調査結果

**1. 屋台村イベント実施報告：ファン通貨・購買傾向診断**

Anshin  
プロジェクト  
Project

**ファン通貨 (24回答)**

**実施内容**

- ・QRコードに下記の説明アンケート用紙を留め回答をもらう
- 1) 購入を決めたのは？ (未登場/1回目/店を通ったとき/他と比べて戻ってきた)
- 2) 購入の決め手は？ (店・商品のファン/接客/デザイン・匂い/メニューの内容・豊富さ/価格・コスパ/同伴者のため)
- 3) 一番好きだった商品は？ (記述式)
- 4) 2つの説明のどちらかがランダムに実施
  - ・似た商品より好きな点を具体的に教えて！
  - ・好きなものを知らない人に魅力を伝えて！

**結果→考察**

- ・QRカードに紐づいたアンケートは4回答 (16%) のみ
- ・店舗への認知の不足により、店員がカードのみ回収していた
- ・「店のファン=来店前、接客/デザイン=1回目、メニュー/コスパ=比較」との仮説は多少傾向は見えたものの、はっきりと結果には出なかった

店・商品のファン	からあげ丼	海鮮丼	焼鳥	計
店・商品のファン	0	1	0	2
接客	0	1	2	6
デザイン・匂い	0	0	0	2
メニューの内容・豊富さ	2	7	2	13
価格・コスパ	1	1	1	7
同伴者のため・シェアのため	0	0	0	0
計	3	10	5	

・ファン後のスコアリング材料として設定している記述式のコメントについてはこれまで実施した内容 (応答コメント、ファンレター) と比べて、コメント量と内容に大きな差はうまらなかった

・ファン投票という形で記述式で質の高いコメントを収集することに限界がある。お題の制約が甘いため、とっさに思いつくことが難しい

**今後について**

- ・QRカードでの投票方法はこれまでで最も回収率が高かった。また設問内容も1)・2) については回答がスムーズに行われていたため、同様の方法でより拡大のしやすさ及び、データ解析が容易になる方法の検討
- ・引き続きコメント形式で定性データを収集する場合、質の高い回答を得るためのお題の設定
- ・コメント以外の形式で定性データを収集する方法の検討

Copyright(c) Anshin Project All Rights Reserved

**1. 屋台村イベント実施報告：ファン通貨・購買傾向診断**

Anshin  
プロジェクト  
Project

**購買傾向診断 (60回答/FBアンケート48回答)**

**実施内容**

1. 購買傾向を診断する診断をオンライン (Google Form) で受けてもらう
2. プースにて診断結果と結果に対する下記のフィードバック用アンケートを渡す説明
  - 1) 診断結果は自分に当てはまると思うか
  - 2) 診断は楽しかったか
  - 3) 実際の購買データから診断をするサービスについてどう思うか (抵抗がある・利用しない/メリット次第/抵抗はない・利用したい)

**結果→考察**

- ・FBアンケートを回答することで抽選会に参加できるため、12人 (20%) はアンケートそのものに興味を持って参加したと考えられる
- ・1日目にその傾向が多く、1日目は大学生の参加者が多かったため、若者には興味を持ってもらいやすいといえる
- ・大半の人は結果を当てはまると感じている

楽しいか	(人)	(%)
楽しい	5	11 22.92
	4	20 41.67
	3	14 29.17
	2	2 4.17
楽しくない	1	1 2.08
計	48	100.00

・リアル購買データを使った診断については、肯定的な人が多かった

**実際の購買データを利用した診断について**

	(人)	(%)
利用しない	1	3.33
メリット次第	18	60.00
利用する	11	36.67
計	30	100

**課題・今後について**

- ・引き続きオンラインでの診断を大学生を中心に実施。フィードバックを継続的に回収し、設問及び診断結果の内容の改良を行う
- ・展開ビジネスとして、1人1人の顧客それぞれが求めている接客や、購買の傾向を来店時に従業員に転送→適切な接客で顧客満足度の向上を図るサービスを検討。
- ファン通貨との連携として、実施した接客やおすすめされた商品・サービスに対するフィードバックを購買意思として送付。これまでのファンスコア同様顧客のスコアリングの実施は継続しつつ、従業員側のスコアリングについても展開を検討する

・アンケートを楽しいと感じる人も大半を占めていたが、プース前で回答をしていた1人で来たの3-40代の人たちは、回答中は楽しそうな様子ではなかった。ただ、結果を共有する相手がいる人は、結果を受け取った後楽しそうにしている様子が見えた。

Copyright(c) Anshin Project All Rights Reserved

## 5. 今後の活動計画

本企画を通じて、遠方地域である長崎に能登の現状や魅力を伝えることができ、地域の特産物や現状への理解が深まる機会となった。一方で、広報体制や継続的な取引・販路開拓の仕組みについて、課題が見受けられた。今後の展望として、一度限りの物産展で終わらせることなく、能登の地域資源が長崎で持続的に販売・展開されるための販路開拓施策を推進したい。具体的には、能登地域外の企業・店舗とのコラボレーション商品を開発・物産展での販売を行う。その後も連携企業・店舗で継続販売を行うことで、物産展の枠を超えた連携を目指す。今回の事例で考えると、能登からの商材を、長崎の店舗で仕入れし、商品開発することで、単なる物産展の来場者向け販売に留まらず、長崎市内の店舗やオンラインでの継続販売に繋がる流通網を構築できると考える。また、イベント終了後も長崎の消費者に能登の商品を継続的に提供する仕組みづくりとして、ポップアップストアを長崎市内の商業施設などに中長期で展開し、能登のブランドイメージを継続的に訴求する場を設けられるような形を実現したい。以上のように、短期的な販売イベントにとどまらず、長期的な視野で販路の創出と市場への定着を目指すことで、能登の持続的な発展と地域間交流を促進していきたい。

## 6. 活動に対する地域からの評価

### ○ 第一弾イベント

#### ▶ イベント利用者 (購入者)

◇ 学生時代に冬の七尾に行きました。地震のニュースを見るたび、「能登の七尾の冬は住

うき」という俳句が頭をよぎります。笑顔の皆さんが素敵でした。

- ◇ 元旦地震の時に能登がこんなことになって心を痛めています。1日も早く能登が復興できるよう、祈っています。頑張れ！能登！
- ◇ 3月に災害ボランティアで七尾に出向きました。あれから豪雨災害でのダブルパンチに心が痛みました。ですが今日お会いした方々は皆さん笑顔で「頑張ります」と元気におっしゃっていました。これからまた必ず七尾と繋がって行こうと思っております。ありがとうございました。
- ◇ 看護師です。被災地支援に従事されている方々を尊敬しています。たくさん食べて飲んで、楽しませてもらいました！お身体にはお気をつけて。明日も来ます！
- ◇ きれいなろうそくで一番最初に貴店に足が向きました。復興は本当に大変だと思います。今回このイベントで皆様の想いを知りましたので、何か私でも出きることを探していきます！このような機会をいただき、ありがとうございます。

▶ イベント参加事業者

- ◇ 遠くにいても、応援ということたくさんの方に買っていただけて非常に嬉しかった。物産展という出店形態にとどまらず、様々なコラボレーションを通して販路開拓ができる状態をつくるようにしていきたい。
- ◇ 長崎という金沢から離れた地域での開催だったため不安もあったが、現地で当社の商品を知っていらしている方がわざわざ応援に駆けつけてくれて非常に嬉しかった。

▶ JR 長崎アミュプラザ（丸山さん）

- ◇ かもめ広場という場所を提供させていただくことで、長崎の方々が少しでも能登の現状を知るきっかけになることが一番だと思います。今回のイベントのように、地元で頑張られている事業者さまへの活躍の場を提供することは共感するビジョンです。我々もマルシェ型のイベントをおこなっていくことで、事業者さまの育成支援を行っていきたくと考えております。

<https://www.anshinproject.jp/nagasaki2024-nagasaki-1-1>

○ 第二弾イベント

▶ 参加者の声

- ◇ 金沢大学 1,2年生 10人組の男性

イベントに出演させていただきありがとうございました！能登にこのような場所（屋台村）があることを知らなかったなので、来ることができて非常に良かったです！またぜひ呼んでください！

- ◇ 金沢大学 2年生ダンスサークル

出演させていただきありがとうございました。たくさんの方に見ていただくことができうれしかったです。

もともと石川県かほく市出身で、PATRIAのことは知っていましたし、屋台村ができた当時は盛り上がっていたので、1周年で呼んでいただけて嬉しかったです。

復興支援で始まった屋台村だと思いますが、もっと盛り上がったら嬉しいです。

奥能登観光資源の創造的復興のモデルケースづくり

指導教員	石川工業高等専門学校（当時）	准教授	豊島祐樹			
		教授	村田一也			
	金沢工業大学	准教授	片桐由希子			
参加学生	石川工業高等専門学校					
	5年	林恭平	東稜子	石橋矢焯	北室葉那子	
	4年	池田茉結	島崎真鳳	二宮琉偉	門田啓矢	安藤望心
		鋤柄満帆子	高野凜夏	安井幹造		
	金沢工業大学					
	4年	宮本悠太				
	3年	小田伊吹	本多紗和	山下太陽	吉田樹	川西康介
		島知滉	石川晟士	山田愛翔	黒河桂斗	桂田涼

活動にご協力いただきました、やなぎだ植物公園の利用者の皆さま、NPO 法人ボランティアインフォさま、能登町ふるさと振興課の皆さま、合同会社能登みらい創造ネットワークの皆さまに感謝申し上げます。

# 奥能登観光資源の創造的復興のモデルケースづくり

連携した地域団体：合同会社能登みらい創造ネットワーク

石川工業高等専門学校 豊島研究室・村田研究室 / 金沢工業大学 片桐研究室

## 1. 活動の成果要約

本活動は、令和6年能登半島地震後の復興を目指し、やなぎだ植物公園を地域活性化の拠点とするための観光プログラムの検討と実践を目的として行った。地域の祭りや復興関連イベントに参加し、地域住民と交流を図るとともに、復興に求められていることを把握した。公園利用者の意見収集を通じて、特に求められていることなどを明らかにした。現地合宿では、キャンプエリアやウォークラリーのチェックポイントの検討を行った他、古民家の見学を行い、歴史的建築物を活用した観光構想も議論した。北側の里山エリアの活性化案では、合鹿庵を中心とした古民家移築やリノベーション、自然と融合したフォリーの設置を提案し、公園の多機能化と地域資源活用の可能性を追求した。

## 2. 活動の目的

能登半島は以前から急速に人口減少や少子高齢化が進む地域であり、震災に対し地域資源を活かした復興のビジョンが求められている。やなぎだ植物公園は比較的震災による被害が少なく、消防緊急援助隊の拠点としても活用され、地理的な条件からも奥能登にとって重要な拠点であるといえる。今年度のゼミ活動では、地域資源を活かした復興を意識した観光プログラムの検討と実践を行い、地域活性化の拠点としての公園のモデルケースをつくることを活動の目的とした。



図 やなぎだ植物公園の位置 (Google maps より)

## 3. 活動の内容 4. 活動の成果

●**能登町のあばれ祭や復興関連イベントへの参加**：7/5(金)~6(土)に行われた「あばれ祭」に参加し、地域研究拠点で元所有者や親戚の方々と学生が交流を行った。参加学生は「あばれ祭の迫力やヨバシの文化から、能登の力強さや絆を強く感じ、能登の文化に魅力を感じた」「能登を離れた人が戻って来られる場所づくりに関わりたいと思った」などの感想を持ち、今後の復興のヒントを得た。「のど未来カイギ」の運営協力を行い、祭りや景色を残すこと、子どもたちが遊べる場所が必要とされていることが分かった。



図 あばれ祭の様子



図 第1回のと未来カイギの様子

●**やなぎだ植物公園利用者の意見収集**：やなぎだ植物公園の利用者の意見収集を行った結果、今後の希望としてはアスレチックや遊具の充実を求める声やスポーツができるようにしてほしいとの声が多く、次いで音楽イベントやキャンプができるようにしてほしいとの声も多かった。その他、具体的に変えたいところとして、公園内の植物の名前の表示をすることや、屋根をつけて雨や日差しを避けられるようにすることがあげられた。



図 やなぎだ植物公園の利用者の意見収集の様子

●**やなぎだ植物公園での合宿**：キャンプに適した場所を3つに絞り、それぞれの場所の評価をした。ウォークラリーのチェックポイントは、公園内をまわった上で高低差がきつく歩きにくいところは避け、①イングリッシュガーデン、②野外ステージ、③森づくり体験エリア、④花菖蒲園、⑤キリシマツツジの林、⑥ツツジ、⑦合鹿庵、⑧水車小屋、⑨出会い橋の9か所を提案した。植物の名札や各エリアの看板についてQRコードを活かした提案を行った。

能登町郷土館、中谷家住宅、やなぎだ植物公園内の合鹿庵の見学し、被災した歴史的建築物の状況を把握するとともに、今後の建物の活かし方について検討を行った。やなぎだ植物公園の北側の里山エリアが十分に活用されていない状況から、合鹿庵を中心にエリアを活性化させる提案を行った。具体的な提案として、①合鹿庵のリノベーション、②古民家の移築・活用の提案、③里山に点在するフォリー（小建築）の提案を行った。



図 現地での検討の様子

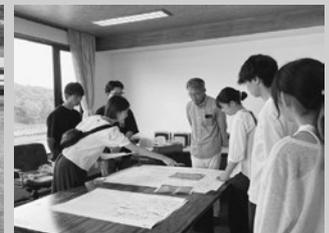


図 検討内容の発表や議論の様子

## 5. 次年度以降の計画 6. 活動に対する地域からの評価

今後も研究室として継続的にやなぎだ植物公園に関わり続け、将来構想や具体的な整備の検討、利活用の実践を行っていきたい。

連携団体である合同会社能登みらい創造ネットワークの代表・竹内氏から「若い世代である学生の皆さんが関わってくれることや、公園の将来構想や具体的な整備案について可視化してもらえることがありがたい」との評価をいただいた。

## 1. 活動の要約

本活動は、令和6年能登半島地震後の復興を目指し、やなぎだ植物公園を地域活性化の拠点とするための観光プログラムの検討と実践を目的として行った。地域の祭りや復興関連イベントに参加することで、地域住民と交流を図るとともに、復興に求められていることを把握することができた。また、やなぎだ植物公園の利用者の意見収集を通じて、アスレチック・遊具の充実やスポーツがよりできるような整備が特に求められていること、キャンプエリアや植物の名札などの提案が求められていることが分かった。さらに2度の現地合宿では、キャンプエリアの候補地検討やウォークラリーのチェックポイントの検討を行った他、郷土館や合鹿庵などの見学を行い、歴史的建築物を活用した観光構想も議論した。北側の里山エリアの活性化案では、合鹿庵を中心とした古民家移築やリノベーション、自然と融合したフォーリー（小建築）の設置を提案し、公園の多機能化と地域資源活用の可能性を追求した。これらの活動を通し、やなぎだ植物公園において復興と観光資源開発のモデルケース構築に向け具体的な成果を生むことができた。

## 2. 活動の目的

能登半島は以前から急速に人口減少や少子高齢化が進む地域であり、令和6年能登半島地震に対し地域資源を活かした復興のビジョンが求められている。今回連携する合同会社能登みらい創造ネットワークは、能登町のやなぎだ植物公園において、観光資源開発に取り組もうとしている。やなぎだ植物公園は比較的震災による被害が少なく、消防緊急援助隊の拠点としても活用され、地理的な条件からも奥能登の観光にとって重要な拠点であるといえる。今年度のゼミ活動では、2022年度に作成した将来のゾーニング案を元に、地域資源を活かした復興を意識した観光プログラムの検討と実践を行い、地域活性化の拠点としての公園のモデルケースをつくることを活動の目的とした。

## 3. 活動の内容

毎週のゼミでの検討の他、能登町の祭りへの参加や復興関連イベントの運営協力、やなぎだ植物公園利用者の意見の収集、やなぎだ植物公園での合宿を行った。以下にそれぞれの内容を記す。

### ○能登町のあばれ祭や復興関連イベントへの参加

7/5(金)～6(土)に行われた「あばれ祭」に参加した。地域研究拠点の元所有者や親戚の方々と学生が交流を行った。

能登町が主催する7/14(日)の「第1回のと未来カイギ」と8/18(日)の「第2回のと未来カイギ」の運営協力を行った。



図1 あばれ祭の様子



図2 第1回のと未来カイギの様子

### ○やなぎだ植物公園利用者の意見収集

やなぎだ植物公園内のレストラン棟で8/11(日)～18(日)の期間、利用者の方々の意見を集めた。「やなぎだ植物公園の好きなところ・おすすめポイント」「やなぎだ植物公園でやってみたいこと」「やなぎだ植物公園のここを変えたい」「やなぎだ植物公園をこんな公園にしたい」の4つの質問に対する回答を付箋に書いて貼ってもらった。収集した意見について整理・分析を行った。



図3 やなぎだ植物公園の利用者の意見収集の様子

### ○やなぎだ植物公園での合宿 (1回目)

1回目の合宿を9/10(火)～11(水)に行った。NPO 法人ボランティアインフォのテントを借りていたが、公園内でのキャンプに適したエリアについて、実際に現地でテントを広げて検討を行った。別のチームは、ウォークラリー (オリエンテーション) のチェックポイントの検討を行った。その他、植物の名札や公園内の各エリアの看板についてどのようにしたら良いかの検討を行った。

最後に、やなぎだ植物公園の指定管理者である合同会社能登みらい創造ネットワークの代表・竹内氏に検討内容を発表し、コメントをいただいた。



図4 現地での検討の様子

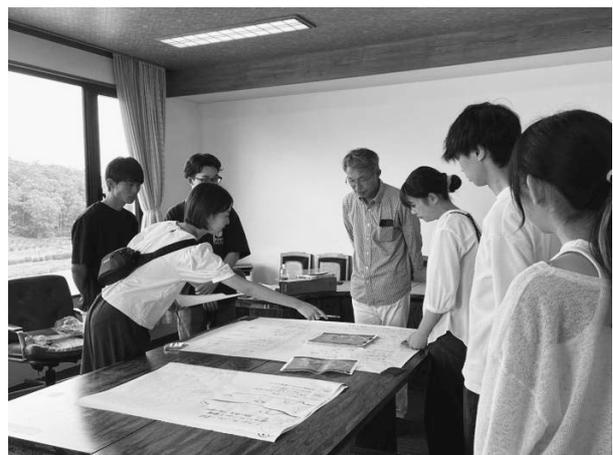


図5 検討内容の発表や議論の様子

### ○やなぎだ植物公園での合宿 (2回目)

2回目の合宿を12/21(土)～22(日)に行った。1日目には能登町郷土館の見学、合鹿庵の見学を行った。2日目には、里山エリアのうち文化ゾーンについて、奥能登の古民家移築も含めた新しい構想の

提案を行い、合同会社能登みらい創造ネットワークの代表・竹内氏と意見交換を行った。その後、国の重要文化財である中谷家住宅の見学を行った。



図6 合鹿庵見学の様子



図7 プライベートプラネタリウム体験の様子



図8 プレゼンの様子



図9 プレゼン後の意見交換の様子

#### 4. 活動の成果

##### ○能登町のあばれ祭や復興関連イベントへの参加

7/5(金)～6(土)に行われた「あばれ祭」に参加し、能登町宇出津にある地域研究拠点で元所有者や親戚の方々と学生が交流を行った。参加学生は「あばれ祭の迫力やヨバレの文化から、能登の力強さや絆を強く感じ、能登の文化に魅力を感じた」「能登を離れた人が戻って来られる場所づくりに関わりたいと思った」などの感想を持ち、今後の復興に関するヒントを得た。

7/14(日)の「第1回のと未来カイギ」と8/18(日)の「第2回のと未来カイギ」の運営協力を行った。

参加者から様々な意見があがる中で、祭りや景色を残すことや子どもたちが遊べる場所づくりが必要とされていることは広く共通する意見であることが分かり、その後の公園での活動に活かすこととした。

##### ○やなぎだ植物公園利用者の意見収集

やなぎだ植物公園の利用者の意見収集を行った結果、今後の希望としてはアスレチックや遊具の充実を求める声やスポーツができるようにしてほしいとの声が多く、次いで音楽イベントやキャンプができるようにしてほしいとの声も多かった。その他、具体的に変えたいところとして、公園内の植物の名前の表示をすることや、屋根をつけて雨や日差しを避けられるようにすることがあげられた。

### ○やなぎだ植物公園での合宿（1回目）

1回目の合宿では、以下の成果が得られた。

公園内でキャンプに適した場所の検討については、現地調査を進める中で候補の場所を3つに絞り、それぞれの場所の良い面と良くない面を整理した。水回りの整備が必要なことは3つの場所で共通していたが、水回りの整備によってすぐにキャンプ地として整備できそうな場所はなく、それぞれ地形の傾斜を緩やかにしたり、湿度が高いのを改善したり、プライバシーや他の利用者からの景観に配慮したりといった改善策が必要であり、引き続き様々な面から検討が必要である。

ウォークラリーのチェックポイントは、公園内をまわった上で高低差がきつく歩きにくいところは避け、①イングリッシュガーデン、②野外ステージ、③森づくり体験エリア、④花菖蒲園、⑤キシマツツジの林、⑥ツツジ、⑦合鹿庵、⑧水車小屋、⑨出会い橋の9か所を提案した。このチェックポイントを組み合わせることで、難易度や所要時間を調整できるようにしている。

その他、植物の名札や各エリアの看板について検討を行った。植物の名札は、名前、花が咲く時期、花言葉などを表示することが意見としてあがったが、情報量が多いと名札が大きくなってしまいうため、詳しい情報はQRコードで読み取って見られるようにする提案をした。QRコードを読み取ることによってスタンプラリーの機能を持たせる案も出た。各エリアの看板については、エリアの広さにより1つか必要最小限の数としてQRコードを読み取ることによりエリア情報が得られるように考えた。

### ○やなぎだ植物公園での合宿（2回目）

2回目の合宿では、以下の成果が得られた。

能登町郷土館、中谷家住宅、やなぎだ植物公園内の合鹿庵の見学し、被災した歴史的建築物の状況を把握するとともに、今後の建物の活かし方について検討を行った。

やなぎだ植物公園の北側の里山エリアが十分に活用されていない状況から、合鹿庵を中心にエリアを活性化させる提案を行った。具体的な提案として、①合鹿庵のリノベーション、②古民家の移築・活用の提案、③里山に点在するフォリー（小建築）の提案を行った。

①合鹿庵のリノベーションでは、合鹿庵を里山エリアにおける総合受付・インフォメーションセンター、物販所、アートと特産品の展示所としての機能を持たせた。

②古民家の移築・活用の提案では、郷土館を移築してオーベルジュとして活用し、能登の魅力でもある食と自然を活かす提案とした。まずは郷土館の移築の具体的な提案を行ったが、今後は奥能登の古民家の「移築保存地区」として移築件数が増えていく将来像も描いた。

③里山に点在するフォリー（小建築）の提案は、やなぎだ植物公園の自然の美しさを引き立てること、日差しや雨・雪から守られた休憩場所とすること、里山を遊び場・学び場とするための展示機能等とすることを目的としている。フォリーは、その場所に合わせて池、花、林道、樹木など引き立てる自然を設定した小建築を提案した。

## 5. 今後の活動計画

今後も研究室として継続的にやなぎだ植物公園に関わり続け、将来構想や具体的な整備の検討、利活用の実践を行っていききたい。

## 6. 活動に対する地域からの評価

連携団体である合同会社能登みらい創造ネットワークの代表・竹内氏から「若い世代である学生の皆さんが関わってくれることや、公園の将来構想や具体的な整備案について可視化してもらえることがありがたい」との評価をいただいた。

知恵と科学に基づいた避難所施設の安全性・利便性向上の検討

指導教員 石川県立看護大学 准教授 松田幸久

参加学生 松田ゼミ

4年 高橋愛結 浜辺麻由 又吉志織

ヒューマンヘルスケア4班ゼミ

2年 北野有紗 高橋優希 高本彩乃 竹内咲季

※ 活動にご協力くださいました宝達志水町の皆さんに感謝申し上げます ※

本活動の様子の一部は石川県立看護大学のホームページで公開されています。



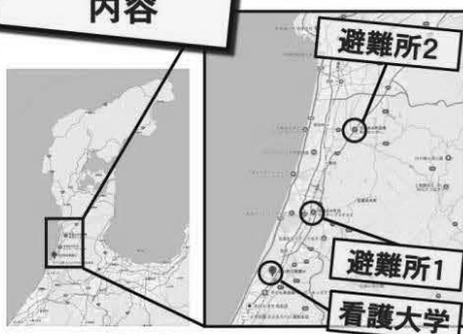
# 知恵と科学に基づいた避難所施設の安全性・利便性向上の検討

活動地域: 宝達志水町  
活動ゼミ: 石川県立看護大学 松田ゼミ・HHC4班ゼミ

## 活動の目的

- 本活動は、宝達志水町における避難所施設の機能を今以上に高めるための方策について知恵と科学に則って提案するものである
- ゼミ活動を通して、避難所としての質の向上に寄与するフレッシュなアイデアの創出とその実現可能性について模索したい
- 具体的な取り組みとして、部屋の温度、湿度、照度の変化を計測し、健康への影響を考慮した避難施設の最適な運用法の提案を目指している

## 内容



## 活動1: ヒアリング

- 職員2名と宝達志水町河原区の災害担当者ともミーティングを行ない情報収集した
  - 1) 情報を得るためにテレビがある部屋に人が集中する
  - 2) 生活を送る上でのプライバシーを保護する必要があるが、人によって必要なプライバシーの度合いが異なる。女性専用の部屋、ペット専用の部屋が必須
  - 3) 避難が長期に渡ると、部屋ごとに暖房の温まりが異なっていたので、公平な暖房器具の運用に苦慮した

## 対象施設

- 宝達志水町民センター・アステラス (避難所1) と生涯学習センター・さくらドーム21 (避難所2)

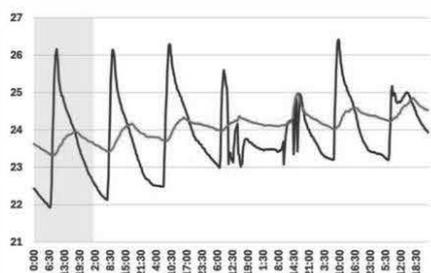
- 災害時に必要とされている物品の再検討や運用ルールの策定の必要性が明らかになった
- 3の環境温度の問題については当初より想定していた問題であった。そのため、本年度では活動2と合わせて環境測定を中心として活動を行うこととした

## 活動2: 温湿度計測

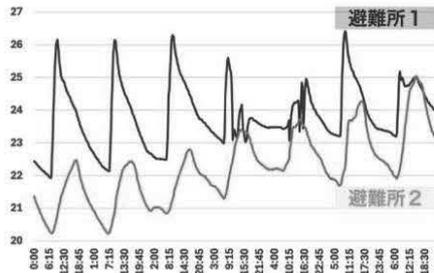
- 各避難所で震災時に使用頻度が高かった部屋を対象とした。避難所1: 5部屋、避難所2: 7部屋
- 室内の角付近と中心部の2~7ヶ所に温湿度計を設置した。また、各施設の室外4ヶ所に温湿度計を設置し、外気温を計測した



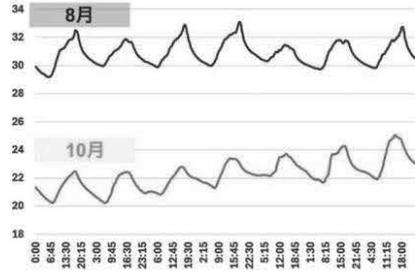
一番よく使っていた部屋の比較 (10月)



和室の比較 (10月)



避難所2・和室の比較



## 活動報告

- 石川県立看護大学卒業研究発表会、かほく市地域公開講座、宝達志水町河原区総会での啓発講座の様子



## 1. 活動の要約

本活動は、宝達志水町における避難所施設の機能を今以上に高めるための方策について知恵と科学に則って提案するものである。通常、災害後では便利な最新の防災グッズを購入して次の災害に備えるという発想になりがちであるが、知識と経験に主眼を置き、避難所運営の質の向上を目指す。

本年度では避難所生活の中でも重要な温度と湿度を定期的に計測し、温室度の季節毎、施設毎、部屋毎の変化について基礎的なデータを計測する活動を行なった。得られたデータからは施設毎に室温の変化の様態が異なることが示されていた。より良い避難所運営を考える上で、本活動で収集しているような基礎的なデータは貴重であると考えている。

## 2. 活動の目的

宝達志水町は能登半島地震のような甚大な自然災害に対する備えを必要としている。避難所施設は緊急時に備えて必要不可欠な状態を保っているが、令和6年度に発生した能登半島地震のような想定を遥かに上回る災害に対する備えを検討したいと考えている。

また、ゼミ活動を通して、避難所としての質の向上に寄与するフレッシュなアイデアの創出とその実現可能性について模索したい。具体的な取り組みとして、部屋の温度、湿度、照度の変化を計測し、健康への影響を考慮した避難施設の最適な運用法の提案を目指している。

## 3. 活動の内容

### 1) 活動

活動1：避難所指定施設である宝達志水町民センター・アステラス（避難所1）と生涯学習センター・さくらドーム21（避難所2）の2施設を対象として、実地見学を行う。その際に避難所の開設や運営に関わった職員より当時の対応状況のヒアリングを行う。これらを通して2施設が抱えていた問題点などを整理し改善策を提案する。

活動2：2施設の避難所として使用した部屋を対象とし、1部屋内で複数箇所（例えば窓側、廊下側など）の温度、湿度、照度を計測する。1つの位置において10 cm、40 cm、100 cmの3つの高さで計測する。比較のため施設外の温度等も同時期に計測する。これらを用い、科学的データに基づいた避難所運用の提案を行う。

### 2) 地域団体との役割分担

宝達志水町側は管理運営している避難所の情報を提供すると共に、大学ゼミによる現地の視察や調査活動を補佐する。大学ゼミ側は、避難所指定施設での見学、データ計測、ミーティングなどのゼミ活動を行う。

### 3) 成果目標

避難所指定施設の機能の評価と算定、改善点の提案と吟味、温湿度・照度の測定の実施とまとめ、最終報告会の実施を目標とする。なお測定は4回、指定施設の見学は最低1回以上とする。

### 4) 現地での実施状況

活動時期、内容、回数は以下の通り。文末のカッコ内はスタッフの参加人数である。

#### 令和6年（2024年）

5月：調査対象施設の下見と評価（4名）

6月：下見後ミーティング、問題の洗い出し、活動の概要の決定（4名）

避難所1・2で温湿度計設置（6名・2名）

避難所1・2で温湿度計の回収。ポストミーティング（6名）

8月：避難所1・2で温湿度計設置（6名・2名）

避難所1・2で温湿度計の回収。ポストミーティング（4名）

10月：大学にて、上半期の活動の振り返りと活動の分析、下半期の活動の予定策定（4名）  
大学にて、温湿度計設置のための機材の改良と準備（4名）  
避難所1・2で温湿度計設置（4名）  
避難所1・2で温湿度計の回収（1名）

11月：かほく市地域公開講座にて、市民向けにこれまでの活動を踏まえた発表実施。タイトルは「温度・湿度からみる家の特徴を知ろう！」。地域からの参加者は14名（4名）

12月：宝達志水町河原区総会にて啓発活動。地域からの参加者は30名程度（1名）

## 令和7年（2025年）

1月：避難所1・2で温湿度計設置（2名）  
避難所1・2で温湿度計の回収。ポストミーティング（2名）

## 5) 活動概要

### 5-1) 避難所運営のヒアリング

5・6月に活動1を実施した。その際、職員2名から当時の状況をヒアリングし、避難所運営時に特徴的だったことや困ったことなどをまとめた。また、12月に宝達志水町河原区総会後に現地の災害担当者ともミーティングを行ない、情報収集した。以下は、得られた情報の例である。

- 1) 情報を得るためにテレビがある部屋に人が集中する
- 2) 生活を送る上でのプライバシーを保護する必要があるが、人によって必要なプライバシーの度合いが異なる。女性専用の部屋、ペット専用の部屋が必須
- 3) 避難が長期に渡ると、部屋ごとに暖房の温まりが異なっていたので、公平な暖房器具の運用に苦慮した

上記を受けて、災害時に必要とされている物品の再検討や、運用ルールの策定の必要性が明らかになった。また、3の環境温度の問題については当初より想定していた問題であった。そのため、本年度では活動2と合わせて環境測定を中心として活動を行うこととした。

### 5-2) 避難所の環境要因

当初、温度、湿度、照度の3つを環境要因として計測する予定であった。活動を進める中で、照度を定期的かつ自動的に計測する機材がなかったため、本活動では温度と湿度の計測に集中することとなった。

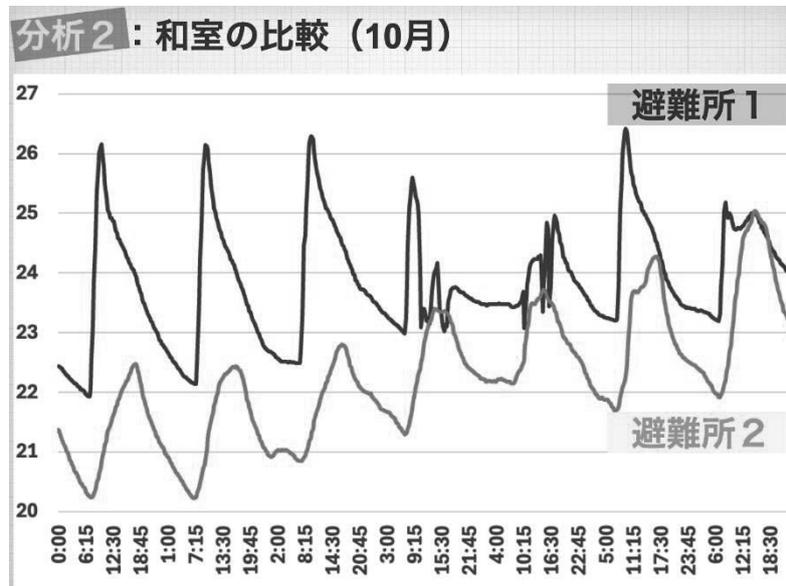
避難所において、震災時に使用頻度が高かった部屋を対象とした。避難所1では5部屋が、避難所2では7部屋が対象となった。室内の角付近と中心部の2～7ヶ所に温湿度計を設置した。また、各施設の室外4ヶ所に温湿度計を設置し、外気温を計測した。活動時の様子を以下に記す。これらをゼミ生を主体として実施した。



本活動で得られたデータの一部を以下に示す。これはかほく市地域公開講座での資料の一部である。

下図は10月における避難所1と避難所2の和室の温度の結果である。両避難所とも、和室の利用頻度が最も高かったため、代表的なデータだと考えられる。

データによると、全体的に避難所1の平均室温が高いことがわかる。ただし寒暖差も大きく、最大で約4度程度もある。一方で避難所2では平均気温は低いものの、寒暖差がほぼない。このような特徴の違いは避難所での暖の取り方に大きな違いを生み出すと考えられる。平均気温が高い避難所1では寒暖差を少なくするような工夫が必要であるし、反対に、避難所2では平均気温を上げるような工夫が必要であろう。このようにして、より良い避難所運営を考える上で、本活動で収集しているような基礎的なデータは貴重であると考えている。



#### 4. 活動の成果

##### 1) 活動によって得られた成果物

避難所運営のヒアリング時の語録と温湿度計測によって得られたデータが本活動によって得られた成果物である。これらを宝達志水町と共有し、今後の避難所運営に役立ててゆく予定である。また、成果物を用いて以下の成果発表を行なった。

##### 2) 市民向け講演の実施

本事業での活動をもとに、かほく市地域公開講座と宝達志水町河原区総会で、啓発講座の講演を行っている。当日の様子は下図の通り。



##### 3) 成果発表

本学のホームページを通して以下のような成果報告を行なっている。

- 1、<https://www.ishikawa-nu.ac.jp/archives/27753>
- 2、<https://www.ishikawa-nu.ac.jp/archives/27752>
- 3、<https://www.ishikawa-nu.ac.jp/archives/27856>
- 4、<https://www.ishikawa-nu.ac.jp/archives/27927>

また、2025 年度発刊予定の石川県立看護雑誌にて、「災害時の避難所施設における温湿度計測の展開 -計測時の道具の開発を中心として- 」と題した資料論文を発表する。

## 5. 今後の活動計画

本年度は各施設との関係構築、必要な物品の購入、ゼミ運営のルーティン化などを実現している。これらは活動の初年度に必要な内容であり、それを達成していることから順調であると考えている。

次年度は活動の2年目にあたるため、活動をより広く展開する予定である。具体的には以下の通り。

### 1) 温湿度計測活動の継続

活動2の温湿度・照度計測は天候や時期によって結果が変化する。できるだけ多くのバリエーションを計測しておくことでより有用な情報となることから、令和7年度以降でも定期的な継続を実施する予定である。

### 2) 宝達志水町河原区公民館での活動の展開

本活動を行う中で、宝達志水町河原区から災害時に必要な知識や備えについての講演や実演をしてほしい旨の依頼があった。そのなかで、河原区の公民館での温湿度計測や、プライバシー用のシェルター内の環境測定といった、本活動を拡張する活動についても展開してゆくこととなった。来年度では上記についても実施する予定である。

### 3) 簡易ライフラインの検討

本活動は、災害に直面した際に「知恵や経験」に基づいて、以前より適切な行動を行えるようになることを目指しているが、特別な物品が必須となる場合がある。例えば、断水や停電は頻繁に起こっている。また、電話の通信局が破壊され、携帯電話が繋がらないという事態も頻出している。これらを解決する物品、例えば簡易浄水器、ポータブルのソーラー発電機、廉価な衛星通信機などには頼る必要がある。

本活動で主眼を置いている「知恵と経験」という観点から考えると、上記の物品を実際に使ったことはない人の方が多いため、具体的には何をどうすると問題が解決できるのかについては未経験である。災害時には迅速な判断や行動が求められる。市民感覚では「壊れたら怖いからまだ使わない」といって長期間使用しないという場面も十分に考えられる。そのため、日常的に入手可能な物品を用立て、それらを用いた演習を行う予定である。

## 6. 活動に対する地域からの評価

かほく市地域公開講座と宝達志水町河原区総会では、直接市民の方からの感想を受けることができた。概して、良い活動だと思うので続けてほしい、もっと広く展開してほしい、という旨の好意的な評価を得ている。

なお、本活動の過程で知り合った関係者を通じて本活動が口コミで広がっていた様子であり、宝達志水町河原区の区長を通して河原区の1次避難先である河原区公民館の環境計測の依頼があった。

河原区区長とのヒアリング時に語られたことであるが、当区は、宝達志水町の例に漏れず少子高齢化が進む過疎の地域である。この地域では、世帯主が75歳以上である世帯が約60%を占め、そのほとんどが老人の1世帯である。このような地域で災害が発生した際、避難が適切に行えるのか不安であり、かつ、避難先の準備について知識もないため、困っているとのことであった。

そのため施設環境の温湿度計測と共にワークショップなども開催して災害リテラシーを高めたいという要望があり、次年度ではそれに答えることとした。これを一例として、地域からの評価は高いと考えている。

過疎高齢化と震災による地域の人口減少と地域住民の活力の低下

— コミュニティのエンパワメント震災復興の第一段階としてのキリコまつりと地域の語り —

指導教員 金沢星稜大学 准教授 神崎淳子

参加学生	4年	泉沙也加	沖崎葵	坂本大征	島田一咲	辻青空
	3年	岩岸優太	奥森みいゆ	川原田大喜	釣谷陽春	利水輝
		伏田朱里	宮下瑞希	彌久保大河	矢田晴菜	山口智也
		米田貴広	加藤蓮	松永竜威		
	2年	池守桃香	石野凌真	岩井理紗	尾角有彩	河村倫空
		島田歩夢	白井希愛	杉浦優	長田真依	中村花音
		林陽菜	東みらい	道井侑里	村田温大	山崎恵実花
		山下百花	渡辺莉央	山下俐空		

# コミュニティのエンパワメント 震災復興の第一段階としての キリコまつりと地域の語り

金沢星稷大学経済学部 2024年度神崎ゼミナール

2年基礎専門ゼミナール 18名、専門ゼミナール3年生13名、4年生5名

★プロジェクトチーム★

加藤蓮・山口智也・岩岸優太・奥森みいゆ・伏田朱里・松永竜竜・米田貴広



## ゼミ紹介

私たちは人的資源管理・人の働き方をテーマにしたゼミに所属しています。地域の人が復興を実感（やりがい）したり、自分たちが住んでいる地域に誇りをもつ（コミットメント）するにはどうしたらよいかを考え、キリコまつりの実行に地域のかたと学生が話をする機会をもうける取り組みを行いました。

## プロジェクトチーム

能登町宮地地区のフィールドワークに関わる、事前準備やデータの分析、報告資料の作成、報告などを行った。

右図 2024年度 専門ゼミナール事前準備風景



## はじめに

宮地地区では、少子高齢化による人手不足により、キリコの担ぎ手が不足していたため、秋祭りの前夜行う「宵まつり」でキリコ運行ができなくなっていた。地域学習や単発的なキリコ運行を除くと30年近くキリコを動かすことが無く、キリコの運行に関わる地域住民が持つ知識や技能が継承されなくなっていた。神崎ゼミでは、2022年度にキリコまつりの歴史や地域の方にとっての意義についてのインタビュー調査を実施し、2023年度はキリコ運行の経験がある住民から、キリコ運行時に演奏していた地域の祭りばやしを記録、演奏方法の指導を受け、太鼓、笛、シャンギリをによるまつり音楽を引き継いだ。

2024年1月の能登半島地震により、宮地地区でも山の崩落や断水、家屋の全半壊などの避難を余儀なくされ、広域避難や仮設住宅への避難など地域を離れる住民もいる。一方で、春祭りをきっかけに避難していた住民が地域を訪れるなど、まつりは地域の関係構築の場になっている。地域の「ハレ」の日やそこで語ることが地域の再生の一歩となっている。

## 目標

○大学生が参加してキリコを運行することで、秋祭りを盛り上げる。  
地域の人が宮地らしさを感じてもらい、地域の人が語り合える場をつくる。

## 方法論

震災により地域コミュニティにいる人たちが、個人的、経済的、文化的、政治的なエンパワメントを阻害されている状態であると考えた。基本的な権利を実現するための評価枠組みである「潜在能力アプローチ」の視点から、特に「個人の生活、家族との生活、そして社会的な生活を享受すること」と「自分らしくあり、自己表現を行い、自尊心があること」に注目した活動を行った。具体的には、秋祭りでは地域の誇りであるキリコを運行した。また、地域住民の祭りに関わる生活史のインタビュー調査を行い一人ひとりの生活をインタビューし、地域に生きる思いの発言を集めた。

## 結果

キリコまつりでは地域の人や学生だけでなく、能登の復興支援に来ているボランティアの団体や個人も参加し、交流の場が生まれた。また、地域のかたへの震災時のことやその後の生活、まつりや地域の歴史についてインタビュー調査を行った。学生はまつりを体験し、地域の人との語りを聞くことで改めて地域のことを知り、自分達の視点から言葉や写真で地域についての記録をおこなった。それぞれが感じた課題や魅力をまとめた成果物をつくり、貴重な学びの機会となった。最後に、2年生が作成した「宮地記録集」に学生が書いたことばを紹介する。「私たちは歴史あるキリコ祭りに参加させてもらったことで、宮地の魅力をたくさん知る事ができました。宮地の皆様が快く迎え入れてくださり、人のあたたかさを感じ楽しみながら活動することができました。この活動を通じて、宮地が私たちにとても大切な場所となりました。この貴重な経験や感じたことを記録として残すとともに、宮地の皆様に感謝を伝えたいと思いこの「宮地記録」を作成しました。」

## 活動報告

今年度は、復興の第一段階として地域住民のエンパワメントを意識した活動となった。アイデンティティの再確認や学生参加者のコミットメントの形成を目的として、交流と会話の機会を外部発信に取り組み。特に震災以降、地域を離れていた日常の生活に不便を抱えている人とともに、地域の文化である「祭り」の時間を共有し、地域の再生を考える契機とした。

また、自分たちが地域の人と話を学んだ内容を、まつりに参加していない他学生に伝えたり、自分たちの学びの内容を伝えることでまつりや宮地の地域にたいするコミットメントを醸成した。また、情報発信を行いながら、地域との継続的なかわりを生み出す仕組みづくりについて検討した。

9/19(火) 活動内容：交流サロンの実施・キリコ祭り当日  
11:30 宮地地区到着  
13:00 宮地地区散策・白山神社参拝  
14:00 ①交流企画「ふれあい空」：ゲームや工作、喫茶など  
②キリコ準備(キリコ準備・楽器練習)  
21:00 宵祭り、キリコ運行開始：地域のキリコ運行、神事  
24:00 就寝

9/20(水) 活動内容：インタビューと秋祭り  
8:00 朝食・施設等清掃  
10:00 地域の祭りに関する住民インタビュー調査  
13:00 秋祭り(本祭)  
15:00 宮地地区出発



## 考察

### <成果物>

#### ①金沢星稷大学HPの記事発表

・キリコ運行活動報告  
・宮地地区の現状と調査内容報告  
対象：星稷大学生、保護者、高校生  
⇒震災後の生活やまつりに対する地域の人々の声を大学HPで発信し、宮地地区への関心を高めることで地域に対する自信と安心な生活への期待を持ってもらうことを目的とした記事を作成した。

#### ②記録集の作成

対象：住民向け資料  
⇒冊子を作成し宮地地区への配布、地域を訪れ、まつりを体験した学生のコメントや地域でみつけた魅力をまとめた記録集。

#### ③宮地新聞の作成

対象：大学生向け資料  
⇒大学構内に掲示し、奥能登地域で発見した内容や奥能登震災のことを忘れて欲しくない、という地域の人々の言葉を掲示した。宿泊施設春蘭の里にも掲示。

### <成果物>

#### ①金沢星稷大学HPの記事



### <成果物>

#### ②記録集の作成



### <成果物>

#### ③学生向け「宮地新聞」の作成



## 1. 活動の要約

今年度は、地域住民のエンパワメントや学生参加者のコミットメントの形成と外部発信に取り組んだ。特に震災以降、地域を離れていたり日常の生活に不便を抱えている人とともに、地域の文化である「祭り」の時間を共有し、地域の再生を考える契機とした。

震災により地域から離れてしまった住民が祭りを通じて地域の歴史を感じたり、話をする機会をつくることに取り組んだ。そのため、キリコ運行だけでなく、地域の方が訪れ大学生と交流する「交流室」の運営や、地域の方の住宅を訪問し、地域の歴史やまつりの写真をみせていただきながら、学生が地域生活や現在の課題についてインタビュー形式でお話を伺う「語り」の場づくりをおこなった。

## 2. 活動の目的

本活動は、震災復興の第一段階として、地域の伝統的なキリコ祭りを通じたコミュニティエンパワメントと、住民の生活や地域課題に関する聞き取りを通じた「語り」の場を創出することを目的とした。地域課題の聞き取りは、今後の復興支援に向けた基礎情報となるだけでなく、地域の生活や祭りに関する経験や歴史を住民自身が語る機会を提供し、地域への愛着を言語化する場ともなる。エンパワメントにおいては、自己の存在を肯定することが重要であり、それが他者に受け止められることによってさらに力となる。このため、本活動では学生が住民から話を聞くインタビュー調査を行い、その内容を地域にフィードバックすることで、外部視点から見た地域の魅力や課題を共有する取り組みを実施した。

また、震災からの復興に向け、地域住民が宮地地区に住むことを誇りに思えるような活動を展開した。キリコ運行は、長年地域の文化や季節の行事として親しまれてきたもので、住民にとって地域への愛着や継続への葛藤を象徴する行事でもある。この祭りを通じて、地域住民や学生だけでなく、外部からも多くの人に関われる場を作ることを目指した。同地区では高齢化や人口減少が進み、住民だけのキリコ運行が困難となり、祭りの記憶が薄れつつある。神崎ゼミと「春蘭の里事務局」は2022年から連携し、祭りの歴史や文化を学びつつ、キリコ運行時の笛や太鼓、シャンギリの御囃子の記録映像を撮影するなどの活動を続けている。2023年には学生が実際にキリコの準備や運行、安全管理や声掛けを体験した。このような取り組みを通じて、学生や地域支援者が協力し、キリコ運行を通じたコミュニティのエンパワメントを目指した。

学生はキリコ祭りの準備・運行・記録に携わり、地域文化を体験するとともに、交流室の運営やインタビューを通じて住民の語りを収集し、地域資源や課題を再発見し発信する活動を行った。

## 3. 活動の内容

3年生ゼミ生、特にプロジェクトチームメンバーを中心に、4月以降、ゼミナール時間にグループ内議論やオンラインミーティングを行い、以下の日程で現地訪問による打ち合わせや活動、調査を行った。現地訪問に諸活動以外にも、インタビュー内容の検討、調査結果のとりまとめ、インタビュー調査、祭り参加の依頼文章の地域内回覧、受け入れ機関との事前打ち合わせ、祭り当日の必要な準備物、宿泊施設など、当日のみの参加学生の受け入れ準備についても確認業務などを行った。

7月20日 まつり等準備活動：受け入れ機関である「春蘭の里」との打ち合わせ、地域へのまつり学生参加の依頼



9月19日 交流サロンの実施：地域住民との交流を行った（写真上段）



宵祭りにおけるキリコ運行：キリコの準備、祭りの運営、地域外参加者のサポート



9月20日 住民インタビューを実施：地域の生活や歴史、地域資源、課題について住民の「語り」を記録した



10月以降 記録作成と発信：住民の語りや祭りの様子を写真や文章で記録し、大学内の掲示物として掲示したり、パンフレットを作成して住民に配布する（報告書作成時点では準備中）。また住民参加型ワークショップや祭りの記録を大学ウェブページで発信し宮地地区を知らない人にも関心を持って貰うことを意識した情報発信をおこなった。〈参照：成果物〉

#### 4. 活動の成果

コミュニティの絆の強化：

住民と学生が共に活動することで、地域内外の連携が強化された。

地域文化の再発見：

キリコ祭りを通じて地域資源の価値を再認識する機会となった。

記録の公開：

「宮地記録」やウェブコンテンツを作成し、祭りの様子や住民の語りを広く共有することで、地域外からの注目も集めることができた。

<成果物>

##### ①金沢星稷大学 HP の記事発表

対象：星稷大学生、保護者、高校生

- ・キリコ運行活動報告
- ・宮地地区の現状と調査内容報告

⇒震災後の生活やまつりに対する地域の人々の声を大学 HP で発信し、宮地地区への関心を高めることで地域に対する自信と安心な生活への期待を持ってもらうことを目的とした記事を作成した。

##### ②記録集の作成

対象：住民向け資料

⇒冊子を作製し宮地地区への配布、地域を訪れ、まつりを体験した学生のコメントや地域でみつけた魅力をまとめた記録集。

##### ③宮地新聞の作成

対象：大学生向け資料

⇒大学構内に掲示し、奥能登地域で発見した内容や奥能登震災のことを忘れて欲しくないという地域の人々の言葉を掲示した。宿泊施設春蘭の里にも掲示。



## 5. 今後の活動計画

今後は、以下の活動を展開する予定である。

継続的な記録活動：

地域住民の語りや文化的活動を継続的に記録し、保存する。

地域資源を活用した交流イベント：

震災復興をテーマとしたワークショップや交流イベントを定期的を開催する。

地域外への発信：

作成した記録や成果を発信し、地域の魅力を広く伝えるとともに、新たな協力者を募る。地域外に出た人に情報を届け、地域の復興を考えるためにどのようにすればいいか、地域の祭りを継続的な活動にするための仕組みづくりについて検討する。

ゼミナールは人的資源管理を専門としており、自分たちが学んだ内容を祭りに他学生にレクチャーし、参加者のモチベーションづくりやコミットメントの醸成、継続的な活動の仕組みづくりについて検討する。

## 石川県における地域防災力の向上

指導教員 金沢大学 講師 原田魁成

参加学生 2年 西村省吾  
1年 喜多見浩介 大澤帆夏  
ほか 金沢大学ボランティアさぼりとステーションメンバー

この度の活動にご協力いただきました NPO エコラボの皆さまに感謝申し上げます。  
また毎週のように被災地復旧・復興のためにご尽力されている金沢大学ボランティア  
さぼりとステーションの皆さまに心からの敬意を表し、本事業を推進する上でも度々  
お力添えいただきましたことに厚く御礼申し上げます。  
金沢大学ボランティアさぼりとステーションの活動報告は以下の QR コードからご  
確認いただけます。

Instagram



X



金沢大学 HP



# 令和6年能登半島地震発災以降における 金沢大学でのボランティア活動と地域活性活動について



金沢大学ボランティアさぽーとステーション  
顧問 原田 魁成(金沢大学 経済学経営学系 講師)  
学生一同



## ■ボラさぽの成り立ちと主な活動

- 2011年5月 「能登金沢足湯隊」(金沢大学生を含む一般有志)が若手県陸前高田市を初めて訪問
- 2011年9月 「継続的に支援を続けていきたい」との思いからサークル立ち上げに動き、大学からの資金援助が実現
- 2011年12月 「金沢大学ボランティアさぽーとステーション(ボラさぽ)」が発足

### 災害ボランティア活動

地震や大型台風・豪雨等による被災地でのボランティア

### 写真洗浄

被災した「思い出」を洗浄し、被災者にも届ける活動

### 地域防災教育

自治体や組織と合同で地域住民の方々の防災教育活動を実施

### 東北スタディツアー

被災者の方々と継続的な交流を通じて地域での暮らしを創出

## ■令和6年能登半島地震以降の動き

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
避難所支援						1/12-田上公民館 1/17-11.5次避難所	2/14以降は個人参加				
被災地派遣	2/22-継続中 月2-3回実施		七尾市	能登町	輪島市・重蔵神社、珠洲市、能登町						輪島市
継続活動	3/11-継続中 いずれも月1-2回実施				「金沢行くまいかい」交流会(再掲) 「金沢あつまらんげ〜のど」15月以降は毎週参加						
吹き出し・子ども支援						6/19-継続中					

活動内容(1/17-12/31)	参加人数	実施回数
避難所での生活支援	104人	36回
被災地での災害支援活動	814人	68回*
継続活動	212人	75回
吹き出し支援 児童基金 子ども支援等	140人	30回
<b>合計</b>	<b>1,270人</b>	<b>229回</b>

1/1~12/31までにボラさぽ以外の学生や教職員の方を含む、延べ1,270名の方が活動に参加

## ■被災地派遣

○LINEのオープンチャット機能でボランティアの調整を実施  
→12/31時点で710名以上が登録  
○派遣時に参加者全員へ活動に関わる留意事項をまとめた”しおり”を準備  
○ボラさぽメンバーには緊急時の対応や応急処置法等の事前研修も実施  
○県内外の大学や支援団体に声掛けし積極的に合同ボランティアを実施中

### 七尾市

“仮”仮ごみ置き場での解体や被災品の運搬などを実施

### 能登町

個人宅での被災家財・家電の運搬や津波浸食地での漂流物撤去などを実施

### 珠洲市

被災家屋の屋根瓦やブロック塀の運び出しと災害ゴミ置き場への運搬を実施

### 輪島市

仮設住宅への引越しや被災品の探索など、**金沢工業大学**や**北陸大学**と合同実施

### 水害対応(輪島市)

・屋内の家財撤出、泥出し、清掃  
・屋外駐車場や側溝の泥出し  
・生活支援及び水害支援物資の配布や運搬  
・農林業の復旧支援 ...etc.  
多方面での支援を実施(継続中)

## ■傾聴活動

○金沢市内への2次避難されている方や被災地に居住されている方々への傾聴活動を実施中  
○3つの傾聴活動を主催・共催し、被災者の方に寄り添った企画を実施  
○ワークショップや足湯&ハンドマッサージなども取り入れる

### 行くまいかい！ 交流会【金沢市】

### あつまらんげ〜のど！ 【金沢市】

### 寄ってきまし 交流会【内灘町】

### ほしぞらカフェ 【穴水町】

### 仮設住宅訪問 【輪島市】

## ■その他の活動

○被災地及び被災された方への支援を継続することで交流の輪が拡大  
○支援活動を通じて得た経験を広報することで更なる支援者増加及び防災・減災意識向上を図る

←依頼に基づき輪島市深見町にあるインスタントテントにアートを施す金沢大学生と富山大学生

### 街頭募金活動

石川県災害ボランティア協会、石川県防災士会、新神田校下少年連盟の方々と合同実施  
金沢駅前では本学学生・教員が募金を呼びかけた。

### 子どもの遊び・学習支援

NPO法人リエラや災害支援NPOありんこらと連携し、料理の共作やかけっこなどを実施した。  
今後は子ども支援団体と連携し、2次避難している児童や被災地で生活する児童への支援も計画中

### 2次避難者の方との交流

畑作や料理の共作などを通じて2次避難者の方の”楽しみ”を支援  
共通の話題からコミュニケーションが加速し、より深い交流が行われるようになった。

## ■学外支援団体との積極的な連携

石川県中小企業家同友会や石川県災害ボランティア協会の方々と連携し、被災地にある海水浴場の清掃や吹き出し支援、能登地元産品の金沢出張販売などを実施した。他に**輪島復興支援団体**りーしや**金沢エナジー株式会社**と継続的な合同災害ボランティア活動を実施している。

## ■災害支援の講演活動

金沢大学における令和6年能登半島地震調査・支援活動報告会や石川県中小企業家同友会、ロータリークラブ、トルコ青年スポーツ省等への金沢大学におけるボランティア活動報告等を実施した。

## ■防災・減災教育

金沢市市田上町自主防災組織との避難所運営の在り方に関する意見交換や親子を対象とした居住地域における災害危険個所のマッピング活動などを実施した。  
今後は防災バッグの中身や使い方について講演予定

## ■地元文化の体験と継承

千枚田での収穫体験や陶器配布等を通じて能登の伝統文化を体験  
輪島市重蔵神社主催のキリコ祭りに担ぎ手として参加、性別や国籍問わず地元の方と共に祭りを盛り上げた

## ■被災地復興に向けた追悼と願い

2025年元日、重蔵神社にて被災された方を追悼する竹灯籠を点灯、多くの方々にとっての癒しとなった。

## ■情報発信

ボラさぽの活動内容は以下からご確認いただけます

Instagram

Twitter

金沢大学HP  
ボランティア活動

## 1. 活動の要約

本事業では他大学や他団体らとの連携ネットワークの構築を基に、石川県内での地域防災力向上を図った。連携ネットワークを構築する上で、令和6年能登半島地震及び令和6年奥能登豪雨に伴う金沢大学ボランティアさぼーとステーション(ボラさぼ)との合同災害ボランティア活動を他大学と計17回、民間企業と計7回(いずれも2024年12月31日時点)実施した。またNPOエコラボを含む他大学及び他団体との防災教育イベントを計4回実施した。

## 2. 活動の目的

令和6年能登半島地震及び令和6年奥能登豪雨に伴う被災地及び被災者の方への継続的な支援を行うためには他団体との連携が不可欠である。また団体ごとに有する固有の強みを融合させることで、より多面的な被災地復旧及び復興あるいは被災された方への支援が可能となる。従って各団体との合同ボランティア活動等を通じた連携ネットワークの構築と、それらの横の繋がりを活用した地域全体での防災力向上を活動の目的とする。

## 3. 活動の内容

他団体との合同災害ボランティア活動や傾聴活動、講演活動などを実施した。また防災力向上のための活動として、NPOエコラボと連携し、熱源が限られた被災地でも活用可能で、太陽光を活用した「ソーラークッカー」による食品加熱体験を実施した。他に地域の危険個所を探索し、それらを地図上に記録する「きけん度マップ作り」、防災士監修の下で子どもたちと一緒に防災を学ぶ「防災運動会」、防災バッグの中身や使い方について学ぶ民間企業主催の「そなエナさい」などを実施した。

## 4. 活動の成果

金沢大学ボラさぼを通じた被災地及び被災された方への支援活動実績は以下の通りである。なお下記の数値は2024年12月31日時点であり、ボラさぼ構成員の個人活動も含まれる。

- ・被災地災害ボランティア活動：814名、88回(輪島市を中心に七尾市、能登町、珠洲市など)
- ・傾聴活動：212名、75回(金沢市、内灘町、穴水町など)
- ・避難所での生活支援：104名、36回(田上町、1.5次避難所、輪島市など)
- ・その他活動(炊き出し支援や子ども支援等)：140名、30回

以上より合計1,270名の学生・教職員らがボランティア活動に参加した。なお他大学との連携実績として、金沢工業大学、石川県立看護大学、金城大学、北陸大学、石川工業高等専門学校、早稲田大学、熊本学園大学、東北大学などが挙げられる。またボランティア活動を通じた交流を契機に、能登地域の伝統行事であるキリコ祭りへの参加や被災者追悼企画の運営など地域活性に関わる活動も行った。他にも、ボランティア活動と被災地の現状に関する講演活動を計5回(金沢大学第2回・第3回のと里山里海未来創造シンポジウム、ロータリークラブ、だいせん聴覚高等支援学校、早稲田大学)実施している。



輪島市朝市通りでの災害ボランティア活動の様子



重蔵神社夏季大祭に参加する金沢大学学生



2025年元旦に輪島市重蔵神社で金沢大学学生らが作成した竹灯籠を点灯

本事業に関わる地域防災力向上イベントとしては以下の通りに実施した。

○「みんなで作ろう！新神田きけん度マップ」

- ・実施日・場所：2024年10月26日(土) 新神田公民館
- ・主催：金沢大学ボランティアさぽーとステーション、新神田校下少年連盟協力(協力)
- ・対象：金沢市新神田地区居住の親子(大人5名、子ども14名の計19名)
- ・活動内容：新神田公民館周辺をボラさぽメンバーと親子を含む3つのグループに分かれて探索し、被災時の避難場所や倒壊危険箇所、水害発生危険個所などを記録した。公民館へ帰着後、グループごとに探索中に発見した箇所について「何がどう危険で、どう対処すればよいか」の観点から話し合い、その後、子どもたちによる発表会の機会を設けた。企画終了後のアンケートでは19名中17名が、同企画について防災を考える上で「参考になった」と回答し、「何気なく歩いていた道に対する見方が変わった」や「避難場所やそこにある備蓄なども確認できてためになった」などの感想が得られた。今後参加してみたい防災イベントでは「防災グッズの中身や使い方」、「地震体験」、「防災食の試食会」などが挙げられた。



校区内の避難・危険個所を一緒に探索する学生と参加者親子



探索後にどここの何が危険であったかを話し合う様子



作成したきけん度マップを発表する参加者親子

○ソーラークッカーを用いた試食会と応用可能性

- ・実施日及び場所：2024年11月3日(日) 金沢大学角間キャンパス(金大祭開催期間)
- ・主催：金沢大学ボランティアさぽーとステーション、NPO エコラボ
- ・対象：金沢大学の大学祭(金大祭)へ訪問した学生や一般の方々
- ・活動内容：屋外にてソーラークッカー機器を設置し太陽光を用いた食品の加熱と試食会を行った。参列者に対し、NPO エコラボの中村早苗氏から同機器のエネルギー吸収効率性などの機能面に関する説明と、災害時には熱源が限られており、太陽光などの自然エネルギーを活用することで飲食料品の加熱や足湯などの応用可能性がある旨の説明がなされた。



ソーラークッカーの準備をする  
NPO エコラボ中村早苗氏



ボラさぽメンバーと中村早苗氏との集合写真

○「親子でつくろう体験の和～能登地震から考えること～」

- ・実施日及び場所：2024年12月15日(日) 国立能登青少年交流の家
- ・主催：新神田校下少年連盟、金沢大学ボランティアさぼーとステーション(協力)
- ・対象：金沢市新神田地区居住の親子(大人3名、子ども3名の計6名)
- ・活動内容：ボラさぼメンバーと親子がグループとなり、缶バッチづくりや能登ヒバ箸作りなどで交流を図った。その後、防災士の指導の下で震災時の身体の守り方に関する講習や担架の作り方、防災バッグの作り方、仮設トイレの作り方など、防災や有事の際の対応等について子どもたちと一緒に身体を動かしながら体験した。最後に防災に関する〇×クイズを実施し、ボラさぼメンバーが解説をしながら防災について学習した。



仮設トイレと一緒に作成する学生と参加者親子



防災バッグに詰めるものを一緒に考える様子



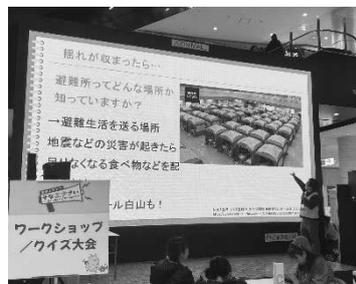
防災クイズを一緒に考えている様子

○「金沢エナジーそなエナさい～親子で考える防災への備え方～」

- ・実施日及び場所：2025年1月19日(日) イオンモール白山
- ・主催：金沢エナジー株式会社、金沢大学ボランティアさぼーとステーション・金沢工業大学防災・減災プロジェクト SoRA(協力)
- ・対象：イオンモール白山を訪問した親子(低学年向け)
- ・活動内容：「親子で考える防災」をコンセプトに、参加親子向けの講演として「考えてみよう！もし今地震が起きたらどうしよう？クイズ」を実施した。防災士の資格を持つ学生が震災時に命を守るポーズ(ダンゴムシポーズ)の紹介や揺れが収まった後の行動、避難中の危険、有事の際に備えた防災バッグの作り方とおすすめの備品などについて講演した。他にボラさぼが2024年に実施したボランティア活動の報告や金沢工業大学が実施した防災クイズへの参加、金沢エナジー株式会社が企画した、手回し発電ライトや新聞紙で作る防災グッズなどのワークショップへの参加などを実施した。



金沢工業大学 SoRA と一緒に防災に関するブースを展開する様子



クイズ形式で防災について講演する金沢大学学生



参加された皆さんとの集合写真

## 5. 今後の活動計画

2025年1月時点においても被災地は依然として復旧活動中であるため、大学間及び他団体と連携した支援活動を行いつつ、現地で居住するあるいは金沢等へ2次避難された被災者の方々への支援も継続して行う。

また被災地の風化防止及び能登復興に向けて、被災地の現状や現地のニーズ、能登半島地震の経験を踏まえた防災の在り方等について、県内外への講演活動を積極的に実施し、さらに連携ネットワークを拡張させる。

## 6. 活動に対する地域からの評価

防災教育の実施についてはアンケート結果からも高い評価を得た。また被災地での活動では、能登半島地震発災以降金沢大学として85回以上の災害支援及び地域活性活動を行っている輪島市において、同市での災害支援活動及び心の支援活動を精力的に実施している団体らが参集した共働支援センター(仮)の設置が検討されており(2025年1月14日時点)、そこに大学として唯一招待されるなど地域においても一定以上の評価をされている。他に被災された方々との傾聴活動ではいずれの企画でも毎回10名程度の方々に参加され、学生らとの交流を楽しみにされている様子が伺える。